最弱勇者とチートな勇者の御一行様

優魔くん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
最弱勇者とチートな勇者の御一行様

【Ｎコード】
Ｎ７２１７Ｖ

【作者名】
優魔くん

【あらすじ】
僕は普通の中学２年生。喧嘩もした事ないし、成績も中間ぐらい。そんな僕が異世界に勇者として召喚されてしまった。勇者として召喚されると、とてつもない力を得るらしいが、僕はせいぜいチョイっと優秀ぎみな近衛兵ぐらい。こんな僕じゃ勇者なんてこなせないよ！僕が旅の最中で仲間になるのは、神様より罰で魔王掃除の手伝いを命じられたルシファー。三蔵法師との旅が終り、暇つぶしに猛者に挑む、聖天大成孫悟空。５００年後の未来に生まれてくるアーサー王の存在が消えないように、魔王を消そうとする、今はまだ若

き少年魔導師マーリン。そんなチートすぎる仲間と共に大冒険。むしろ僕は勇者じゃなくて，猛者達の従者じゃないのって疑問を抱えて旅をする。空色の髪の無口なチートヒロインも加わりました。

第1話　それぞれの旅立ち（前書き）

すみません、異世界召喚ものを読んでたら僕も書いてみたくなりました。偉大なる賢者★トール＆徹（徹）も書いてる最中なので、こちらは気が向いたら書く事になりそうです。

第1話　それぞれの旅立ち

俺はルシファーて名前だ。俺は神に愛されて天使の中で頂点に立つものだ。
俺は神の如き力を持ち、神の様に美しい容姿を持つ。俺様は完全無欠だ。

「おい、ルシファー。お前天使長としての仕事はどうした！しっかり、働け！これが最終警告だ！」」

おや、こうるさい天使副長のミカエルが来たな。

「メンドーだ。ミカエル、適当にやっといて。」

俺は寝っ転がりながらワインをぐびぐび飲む。天使長なんてメンドくせー管理職だ。そんなもん、ミカエルに任せときゃ万事ＯＫさ。いつもミカエルに任せときゃ上手くいくんだからな♪
ミカエルは、ハァーとため息をついた。

「ルシファー、俺は『最終警告』と言った。神はお前の怠惰な生活の罰を与えると告げられた。」

俺はワインをブーっと吐き、むせた。

「な、何！神が俺に罰を！」

「そうだ、お前が仕事を投げ出した、お前が人間界に降り、人間のふりをして、人間の勇者と共に魔王を討伐の手助けをせよとの事。それまで、お前は天界に帰ってきてはならぬ。ちなみに、人間界に

落ちたらお前の力の１%しか出せないよう制限をかけておく。」

「そ、そんな殺生な！なんで完全無欠美男子天使の俺がたかだか人間風情の尻拭いをせにゃあかんのだ！」

「自業自得だ！さぁ、行け！」

ミカエルが手を振ると、俺の脚元の雲が割れ、俺は人間界に落ちた。

（とある山の木の上）

「暇だなー。何かおもしろい事でも無いかなぁ。強い奴でもいりゃぁ、暇つぶしにでもなるんだがなぁ。」

猿の様な男が呟く。三蔵法師様と経文を取りに行った旅が人生で一番おもしろかったような気がする。あの旅から３００年もたった今、あの時が懐かしくなる。

「さらに西を目指してみようかな。」

男は雲に乗り、西へと飛び出した。

（森の中の小さな小屋の中）

一人の少年が水晶玉を覗き込んでいる。彼は占われた未来に対して

若い顔にしわを寄せている。

「魔王がこの世を支配してしまうと、５００年後の未来、アーサー王がこの世に誕生できないのか。キャメロット王国すらこの世に存在できないかもしれない。大変ではあるが魔王は倒すしかない。この世に召喚されるだろう勇者と共に！」

彼は黒いローブをはおり、旅支度を始めた。

（城の中の巨大な魔法陣のある部屋）

僕はごく平凡な中学2年生。友好関係もそこそこあり、学校生活にもそれなりに満足している。この世に不思議な事を夢見たりしないし、地に足をついてる事の方が好きだ。別に超常的な力に憧れてもいないし、喧嘩も嫌いだ、というか強くない。

「勇者、ワタル・ハセガワよ。汝を召喚した理由は、汝にこの世の征服を企む魔王を打ち滅ぼして欲しいのだ。どうかこの国、いやこの世界を救っては下さらぬか。」

と、セイルーン王国の国王が僕に頼み込む。

僕は平凡な生活が結構気に入っていた。それなのに異世界に勇者として召喚されるとは・・・・。

王様と王妃様と姫、近衛兵達が緊張した様子で僕の返事をうかがっている。

そう、みんな不安なのだ。

魔王に生活を脅かされて、何時、己が死を迎えるかわからないこの怖れに。
苦肉の策として召喚した勇者（僕）に断られるのではないかと怯えているのだ。
僕だって魔王と戦うなど怖くてしょうがない、いや喧嘩をする事にですら僕は怯える。
もちろん力になってやりたいと思う心もある。みんなを安心させてやりたい。
そう、だから僕は決心した。決して後悔なんてしたくない。
僕は勇気を振り絞り、そっと口を開く。

「すみません、王様・・。僕は戦ったどころか喧嘩すらした事もないので、皆様方のお力になれる自信はありません。」

断るための勇気を振り絞った。みんな、真剣な頼みを断る事だって、相当な勇気がいるんだよ。まさに場の雰囲気を壊す事を恐れずに、自分の意見を言う事は、勇者の称号に値する。
王様はしばらく考え込み、

「ふむ、勇者殿がそうおっしゃるのであれば致し方ないが、もう少しだけ考えては頂けぬ「嫌です、無理です、僕には荷が重いです。」・・・・・・・・かなぁ？」

僕は間髪入れずに、すぐさま即答。僕は喧嘩ができないが、ゲームには腕があり、ボタンの早押しの経験を生かして即答した。

「しかし、勇者、ワタル・ハセガワよ。汝を召喚した理由は、どうしても汝にこの世征服を企む魔王を打ち滅ぼして欲しいのだ。どうかこの世界とその未来を救っては下さらぬか。」

会話がループしました。ドラクエをやっていて、会話をループさせるのを見てバカだな―と思ったが、実は泣き落としと同じぐらい効果があったりして・・・。これって遠まわしに僕に有無を言わさずに命令しているような・・。

僕は心を落ち着けて答えた。

「王様。僕は魔法どころか武術もやった事ありません。それなのに盗賊どころか魔王を倒すなど絶対に無理です。」

「おお、それについては心配せずとも良い。勇者がこの世界に召喚されてから、勇者は強靭な肉体と強大な魔力を授かって召喚されるのだ。さっそくだが、勇者の力を測定してみようではないか。」

王様は僕に魔王を倒すと約束させる事は難しいと判断したようで、今は会話をそらすようだ。

黒いローブを着た魔術師が水晶玉を持ち、僕の前に来た。

「さぁ、この水晶玉に御顔を映してくださいまし。」

僕は水晶玉を覗き込んだ。

魔術師が「はぁ！」と魔力を込めたらしい。水晶玉を覗き込んでいた魔術師は徐々に微妙な顔をし始めた。

能力を測定する際に『見習騎士』とか『ベテラン魔術師』などがあり、それぞれの能力を6段階に判断するらしい。ここでは分かりやすく、S，A，B，C，D，Eとしておく。

僕の能力

戦士の才　；D　（僕は喧嘩した事がないからだ）

魔術師の才；B　（どんな魔法が使えるか楽しみだ）

僧侶の才　；E　（僕は信仰深くないからだ）

狙撃士の才；Ａ　（ちょっと意外だ）
諜報士の才；Ｄ　（僕は頭が悪いからだ、しかし勇者にいったい何をさせる気だったのか？）
鍛冶家の才；Ｂ　（僕は図工が結構とくいだ）
商人の才　；Ｅ　（僕には頭も財産もないからだ）
料理人の才；Ａ　（これまた意外だ）

僕も王様王妃様も近衛兵も難しい顔をした。とても勇者の能力には思えない。これでは勇者をやるなど無理だと思うし、せいぜい勇者御一行様の一人になるのが精一杯だ。僕と王様の困惑した視線が交叉した。ちなみにまだ１０歳ぐらいの姫様は居眠りしていた。

「ごほん。しかし、近衛兵の中でも上位に位置するぐらいだ。恐らく勇者はこれからとてつもない成長を遂げると思う。きっと大器晩成なのだ、そうに違いない。」

王様はめげなかったようだ。きっと若い頃はどんな苦境にも立ち向かう方だったのだろう。みんなの困惑の視線を向けてくる中、僕は勇者としての使命を流れで任せられたようだ。

第2話　初めての場所には注意せよ！（前書き）

一人目のチートな仲間をあともうちょっとで出そうと思います。
誤字脱字が多かったので、直しました。

第2話　初めての場所には注意せよ！

僕こと、長谷川亘（はせがわ わたる）は親友の金田真央（かねだ まお）とお台場に観光にきていた。中学生二人だけにしてはちょっと遠出だったので、まるで冒険しにきたようでワクワクしていた。ゆりかもめに乗って博物館を見たり、食べ歩きグルメを回っていた。

今後、異世界へ本当の冒険に出るとは知らずに・・・・。

金田真央とは幼稚園からの友達で、とても仲良しだ。彼はとても勇気と元気があり、いつも弱虫な僕を助けてくれた事も多い。もちろん、喧嘩したこともあるが、言い争うだけで怖がる僕に彼はすぐにあきれて仲直りしたものだ。

そんな彼は新聞に何故か分らないが、ゆりかもめの切符が二人分挟まっていたのだ。新聞屋のサービスかな？　と思い、彼は僕に「お台場に遊びに行こう」と誘ってくれたのだ。

彼と僕はハシャギながらフジテレビを見学した。あっちこっちが目新しく、ハイテンションで見学した。

「ワタル、ちょっとトイレ行こう。」

僕達は白く、きれいなトイレに向かった。

入口に入ると、とても白い輝きが僕の目を刺した。

（トイレはきれいな方が気持ちがいいけど、ここまでピッカピカにする必要は無いと思うんだけどなぁ。逆に落ち着かないかも。）

僕はちょっと長めのトイレへの通路を抜けると、白い輝きが薄れていった。

するとそこには昔の西洋風なドレスを着たお姉さんや、布地が白いがシスターみたいな服を着た女性の方達。その周りを守るかのように、ずらりと並ぶ西洋風の鎧を着た兵士のような男の人たち。みんな僕の事をギロリと睨んでいる。（僕の主観です）
僕が居る部屋はレンガの壁で、まるでどこかのお城の中のようだ。

（しまった！僕達、うっかりテレビの撮影現場にまぎれ混んじゃったみたいだ。ど、ど、どうしよう、真央は・・、って居無いし！）

さっきまで隣にいたはずの真央の姿が見えなかった。僕よりも早く気が付いて逃げたに違いない！薄情者！

僕が心の中で親友に不満を抱えていると白いシスターさんが歩み寄ってきた。

「す、すみません、間違えてここに来てしまったようです。そ、その、お邪魔をするつもりはありませんでした。し、失礼します！」

僕は回れ右！をして、さっきの白い通路を出ようとした。
しかし、僕達が通ったはずの通路は存在しなかった。
僕がびっくり仰天していると、シスターさんが声をかけてきた。

「すみません、伝説の勇者様。私達があなた様をこの世界に許可なく連れてきてしまった事を真にお詫びを申し上げたいと思います。どうかご無礼をお許しください」

「い、いえ。僕はトイレと間違えてここに来てしまっただけです。きっと、他の役者さんと間違えているのでしょう。僕は失礼いたします」

「あの、いきなりなので混乱されていらっしゃるのでしょう。落ち着いて、どうか私達の話をどうかお聞き下さい」

「だ、だから、僕は役者じゃありません。人違いです。お金もあまり持っていないので、みなさんの撮影の邪魔をしても慰謝料の方はかんべんしてください」

「いえ、そういう話ではなく、・・・」

少市民な僕と白いシスターさんは４０分位の間、食い違った会話を続けていた。結局、僕が落ち着いたのはトイレの我慢ができなくなって、トイレを借りた後だった。他の皆さんもよくこんなに長い時間を我慢して立っていられるのか不思議だ。

僕はシスターさんに勇者召喚の話を聞き、「なんじゃそれー」とか、「真央はどこいったの？」とか叫んだ。

そうして、話は王様の前へとつながっていく・・・。

（城の一室のベランダ、・・じゃなくてテラス）

勝手に僕が魔王を倒す話になって、僕には部屋を与えられた。

僕は夜空に浮かぶ月のような衛星を眺めた。真っ赤な光が輝いていて、なんだか不気味だ。

僕はホームシックになった、いや、ワールドシックかな？異世界よりもアマゾンの原住民にやりで囲まれた方がまだましかも。（かなり失礼、アマゾンの方々、又は出身の皆さま、もしこの小説をお読みになされていたら、ごめんなさい！）

「真央は今、どうしているんだろう？」

僕はため息をついた。

真央は僕と一緒に召喚されなかったらしかった。真央がテレビ局で僕を探しているのだろうか？それとも、この世界に召喚されたが別の場所にたどり着いたのか、僕には分からない。

白いシスターさんは、この世界の巫女のような存在で、僕にいろいろ説明してくれた。

僕をこの世界に召喚した魔法は、古代の遺跡に残されていた文献や魔法陣から得た知識らしい。５年程前から突然と現れた魔王軍に支配されていって、召喚魔法にすがったそうだ。

詳しい事は分からず、元の世界に戻す方法も分からないらしい。

勝手に召喚して、迷惑な話だ。

ヒントが残っているかもしれない古代の遺跡も魔王の軍勢に支配されたようで、元の世界に戻る可能性を探すためには、魔王軍と戦うしか、道は無いようだ。

僕は魔王との戦いを決心した

元の世界に戻るために

ついでにこの世界の人たちの平和のために

でも、足が震えるのを止められなかった・・。

それから3カ月、僕は城で戦い方や魔法の訓練をした。

いくら魔法の能力測定で一般兵ぐらいの結果が出ても、それは、その時点での潜在能力。戦い方や魔法の使い方を知らなければ、ただのガキだ。

３カ月の特訓のすえ、ようやく僕は旅立ちの準備を迎えられた。一般兵と同じ位の能力だけど・・・・。どうやら、王様は近衛兵の優秀な方と言っていたが、多目に見積もっての話らしい。トホホ・・・。

しかし、元の世界に生きて帰りたければ、もっと強くなるしかない。

一週間後は仲間を率いて旅に出るのだから。

第3話　チートな仲間、一人目登場！

ついに、旅立ちの日が来た！
・・・いや、来てしまった・・・。

「勇者ワタルよ！　そなたが魔王を倒す旅がついに始まる！　汝が道中、無病息災である事を祈る。それと、道中の道草にはくれぐれも気をつけるように！」
王様と王妃様と姫様が僕に祈りを込める。まるで何かのおつかいみたいな言葉だ。

（獅子王師匠（ライオン）！　魚の目師匠（アプロディテ）！あなた方の授けてくれた剣と杖と技術で魔王を倒します！）

僕は心の中で誓った。ちなみに、僕の修行については、一応国家機密なので詳細はここには書かない。
僕が腰に差した、獅子王師匠から授かった、銅と鋼のハイブリッドでリーズナブルなハチキュッパの剣と、魚の目師匠から授かった、小さいタクトみたいな杖に向かって誓っている時、王様が思い出したように声をかけた。

「おぉ、勇者ワタルよ！すっかり忘れておったが道中の仲間を紹介する！神官騎士、ミルドラース（どっかの魔王みたいな名前だなぁ）だ！」

そんな大切な事忘れないで！王様はもう盲録したの？と、心の中で文句を垂れていた。

すると扉の外から「誰だ！お前は！」とか、ゴギッ！ドカン！とか、

喧騒が聞こえてきた。
すぐに喧騒が収まり、扉から神官騎士ミルドラースらしき人が入って来た。
金髪のポニーテールで、蒼くきれいな瞳をしていた。とってもハンサムでその体つきは細くも筋肉が引き締まっているようである。神官騎士らしい、独特で優雅な鎧を着ていて、まるで一流の芸術家の作品の銅像が本物になったようかの姿だ。
彼は輝く白い歯を見せてほほ笑んだ。

「勇者サマ、アナタハ神ヲ信ジテイマスカ？信ジテイルナラ、神ノ御加護ニヨリ、魔王ヲ倒ス事ガ出来ルデショウ！」

滅茶苦茶うさんくさいハンサムだった。
王様もビックリして、口を大きく開けている。
王妃様と御姫様は顔を赤らめて凝視している。彼女たちにとって、怪しいのと、ハンサムとはまた別問題らしい。

「神官騎士ミルドラースよ。2，3日見ぬ内に、ずいぶんとハンサムになったの。髪は金髪じゃったっけ？」

「（ひそひそ声）王様、あきらかに別人です。さっきの喧騒も聞いといて、怪しいと思わないのですか。」
大臣が王様に耳打ちする。
怪しいハンサムが答える。

「ワタクシノ、従兄ノミルドラース殿ガ馬車酔イシタノデ戦エマセン、ソコデ勇者サマノ御供ヲ代ワリニ務メサセテモライマスル『ルシファー』ト申シマス。ドウゾ、ヨロシクチョンマゲ。」
ルシファーが怪しげな台詞を吐いて、輝く笑顔と共に優雅にお辞儀

をする。

「そ、そうか。分かったルシファーよ！そなたが立派に務めを果たす事を期待する。」
王様が答える。

「しかし、ミルドラースはこの城に住んでいるのに、なんで馬車酔いするのか？」
大臣が疑問をつぶやく。

王様！納得するな！　大臣！もっとはっきりと突っ込め！　ルシファーも、もっとましな嘘をつけ！
僕は心の中でどれだけ突っ込んでいるのだろうか？　断っても会話がループしてしまう勇者に選択権が無いのである。

「それでは、近衛兵隊長、ヨシュア・A・ガーナ。」
王様が呼ぶ。

鎧を着た壮年の男性が歩いてきた。

「勇者殿、私も精一杯に力をこめ・・・。」

ズドン！
近衛兵隊長が急に倒れた。目を白く剥いて、口からブクブク泡を出している。

「「ど、どうした！近衛兵隊長！」」

大臣と王様があわてた声をかける。

「オオー、可哀想ニ！　キット、魔王トノ戦イヘノ訓練ノ疲労ト、緊張デ、倒レタヨウデス。」

ルシファーが棒読みで声を上げる。

「ルシファー、君の目が異様に蒼く光って隊長を睨んでいたけど、知らんぷりするつもりなの？」

僕が思わず突っ込む！

「オー、疑ワレルナンテ、ショックでーす。」

ルシファーが大げさに天を仰ぎ、顔に掌を当てる。

「きっと、勇者殿はルシファー殿の目が蒼くきれいなので、見間違えたに違いない。うむ、仕方あるまい。ではもう一人の従者、魔導兵隊長ローラ・フローラル。」

「はい。」と返事と共に、黒いローブをきた女性が歩いてきた。

「オー、美シイ女性ト御近ヅキニ、ナレルトハ、トテモ嬉シイでーす。」

ルシファーが歓迎と共に彼女を抱きしめてキスをした。

すると、ローラさんは顔を真っ赤にして気絶した。

「オー、ヤハリ彼女モ緊張ノアマリ気絶シテシマイマシタ。カ弱イ女性ニ困難ナ旅ハ無理ノヨウでーす。」

ルシファーが大げさに嘆く。

ルシファー、君は明らかに何かの力を使っているだろう。

「そ、そうか。それは困った。では他の者を・・・。」

その後も、精霊の巫女、召喚士、魔法剣士、魔法格闘家、魔法三銃士、などが呼ばれるものの、みんな不思議な事にことごとく気絶した。

「ふーむ、わが国には他に優秀な者達がいないのだ。もう勇者殿の従者に相応しい者がいないので、私から直々に文書を渡そう。これを見せれば仲間になってもらえるかもしれぬ。」

王様が渡してくれた文書は「勇者殿と共に魔王を倒す旅の仲間になってくれぬか、みごと務めを果たせたのならば、我が直々に褒美をやる。」と、仲間を集めるための内容が書かれていた。（チャラチャラチャンチャンチャーン）（効果音）勇者は仲間募集の紙を手に入れた。

「それと、勇者は狙撃の才があるそうなので、私が父から受け継いだ物をやろう。代々王家に受け継がれる一品だ」

王様の命令で、召使いが銃を運んできた。
どっからどう見ても猟銃にしか見えなかった。

「それは、王家が代々キツネ狩りをする際に使用するものだ。３発まで装弾可能で、魔力で弾丸を撃つ物だ。」

チャンチャラチャンチャンチャーン（効果音）。
勇者は王家の猟銃を手に入れた。これでキツネを狩れるようになった。

「あ、ありがとうございます。」

僕は笑みをひきつらせてお礼をいった。これで魔王を狩れ！と言うのか。
王様は満足そうにほほ笑んだ。
「勇者よ、魔王を倒すうえで、一つ話がある。
この世界のどこかに勇者しか扱えぬ伝説の聖剣が必ずある。他の王国の王家や貴族が宝として持っているかもしれぬし、商人が持っているかもしれぬ。
昔、この王家には代々勇者にしか使えぬと言われている伝説の聖剣があった。石の台座に収められていて、決して誰にも抜く事はできなかったと言い伝えられていた。」
「え、昔はこの御城にあったのですか？どうして今はないのですか？」
王様は気恥ずかしそうに目をそらして言った。
「私の４代前の王が、国家が財政難になった際に、「誰にも抜けぬのだから」と、言って、台座ごと売り、財政難を乗り越えたそうだ。」
そんな大切な国宝の聖剣を簡単に売るな！４代前の王！
僕があきれと怒りが混じったツッコミを心の中でしていると、王様が気を取り直して話を続けた。
「勇者よ！もしかしたら、商業国として発展した『マッカ―王国』に何か手掛かりがあるかもしれぬ。まずはそこを目指すと良い。この国よりも優れた武具もあると思う。」

（猟銃よりもましな銃があるかもね。）
もちろん口にはしない。

執事から旅のための荷物を受け取る。

「勇者殿、改メテヨロシク御願シマス。」
ルシファーがほほ笑む、怪しげに。

「そ、そう。よろしく。」

僕は仲間のルシファー（本当は１２人ついてくるはずだった）と二人で魔王を倒す冒険の旅へでかけた。

第3話　チートな仲間、一人目登場！（後書き）

ようやく旅が始まります。「偉大なる賢者★トール＆とおる」と並行して話を書いていくつもりなので、どうやらペースが遅くなりそうです。

第４話　猛者たちとの戦い

怪しげなハンサムのルシファーと旅をする事になった僕、まずは冒険者のギルトがあると聞いたのでそこに登録する事にした。ネットも新聞もないこの世界では、冒険者のギルトは情報が回る中心であり、魔王を倒す旅の仲間を探すのにも、この世界のどこかにある聖剣のうわさを聞くにも冒険者ギルトに所属する事がちょうどいいらしい。

僕はフンフーンと鼻歌を歌いながら、町を歩く美人にウインクするルシファーのそばを歩く事が重く感じた。女性の熱い視線と、不細工な男たちの冷たい視線を直接浴びなくとも、地味で小市民な僕にはきつかった。

（本当にルシファーって何者なんだろう？　ルシファーって名前、どこかで聞いたことあるような気がする。・・・慨視感（デジャヴ）かな？）

僕は思案した。

城でルシファーに睨まれた猛者は気絶し、キスされた女性を昏倒した。彼の能力は謎のままだが、少なくとも僕より遥かに強い事は確かで、火を見るより明らかだ。下手に彼を問いただして争うより、今は様子を見る方がいいだろう。藪をつついて蛇を出すのは得策ではない。

「ドウシマシタカ？勇者殿。ギルドニ着キマシタヨ。」

「あぁ・・、うん・・。」と返事して僕の意識がギルドへ向く。

僕達が建物に入ると厳つい男達がたたずんでいた。

僕は気負けしそうになったが、ルシファーは鼻歌を歌いながらギ

ルドの受付に向かい、僕は流されるように続いていった。まるで、僕がルシファーの従者みたいだ。
僕が受付に目を向けると、ハシバミ色のきれいな髪をした女性が受付をしているのに気が付いた。

「こんにちは。今日はどのような御用ですか？」

ルシファーは、身を乗り出して受付嬢の手を握り、とろけそうになる笑みを彼女に向けた。

「コンニチハ、美シイ御嬢サン。私ハ、貴女ノ美シサと高貴ナ薫リニ惹カレテ来マシタ。今夜、一緒ニ食事ト、二人ッキリノ熱イ夜ヲ過シマセンカ？今夜、一緒ニ二人ノ未来ヲ作リマショウ！」

ルシファーの輝く笑顔と露骨な誘いに彼女は赤くなる。でも、まんざらでもなさそうだ。

（露骨にナンパしないで欲しい・・。後ろのモテナイ猛者達の視線がチクチク痛い。・・・・ハぁ。）

勇者は逃げたくなった。しかし、周りはきつい視線で囲まれてしまった！

「ルシファー、露骨すぎるよ。初対面の人をナンパして何処まで行く気なの。」
僕はルシファーに耳打ちする。

「勇者殿、モチロン、ベッドノ中マデ、トカ、彼女ノ中マデ、でーす。」

「（ひそひそ）もうちょっと控えてよ。」

「分カリマーした。彼女ト、愛ノ真理ノ探究ト、生命誕生ノ神秘ニ立チ合イマス。」

「表現を控えるんじゃなくて、行動を控えて欲しいんだけど・・・。とにかく、ルシファー・・、僕達はナンパしに来たんじゃなくて、ギルドに登録しに来たんでしょ。」

僕はルシファーを諌める。

「チッ！」

輝く笑顔でされた舌打ちに恐怖を感じるものの、僕は受付嬢に意識を向けた。

「すみません、ギルドの方。僕達は冒険者のギルドに登録したいのですが・・・。」

僕は彼女の目の前でブンブンと手を振り、彼女の意識をルシファーからこちらにそらした。彼女は僕を見て、がっかりしたような顔をしている。（ガキでダサくて悪かったね！）

「・・・・えっと、ギルドの登録ですね。すみませんが、お名前とそれと身元を証明するような物はありますか？　身元を証明する物がありましたら、煩雑な手続きを省くことができます。」

僕はこの世界に来て3カ月たつが、城から一歩も出た事はなく、家なんて持っていない。何か身元を証明できるものはあるかな？と、考えていたら王様から渡された「仲間募集」の紙が役に立つかな？っと、思った。

彼女に渡すと少し驚いた様子だった。

「（ひそひそ）本当に勇者様と御一行様なのですか？本物の王家の紋章がありますが・・・。」

「えぇ、そうです。」

僕もつられて小声で答える。

「分かりました。身元を保証する物はこれで十分です。では、従者様。こちらの方に勇者様と貴方様のお名前をお書き下さい。できれば戦いにおいてのプロフィールも書いていただけると助かります。」

どうやら僕は彼女に勇者様の従者と見られたようだ。

僕はうさんくさいハンサムを見上げる。そのハンサムは不細工な猛者達の視線を平気な顔で浴び続けている。

・・・。僕が勇者だとばれたら、仲間の行動についての責任を男たちに問われそうだな・・・。

僕は責任回避をするべく、彼女の勘違いをそのままにした・・・。

ジャジャーン♪（効果音）勇者は世渡りが上手になった。

僕は僕達のプロフィールを書いた。僕は城の一般兵ぐらい、ルシファーは城で誰よりも強いと書いた。（実際はもっと強そうだが、僕にはそこまでしか分からなかった。）

チーム名を何にしようか？と、考えていたら、ルシファーが横からペンを取り、「レディーの見方」と、勝手に決めてしまった。

「えぇ～・・・、『レディーの見方』御一行様。クエストとレベルについてのご説明をさせていただきます。」

受付嬢はチーム名に顔を難しくしながら言った。

「レベルは受けられるクエストを制限する物です。これは無謀な挑戦をしないようにと配慮しての事です。クエストを沢山成功させたり、能力について実績を得たりすると、レベルが上がり、より高いレベルのクエストを受理する事ができます。ちなみにクエストを失敗、又は放棄すると異契約金を支払わなければならなくなるので、十分にご注意ください。貴方方様は実績があまりお持ちでいらっしゃらないようなので、初期レベルのEから初めて頂くことになります。レベルはS，A，B，C，D，Eの6段階となります。」

ルシファーが話を聞いて顔をしかめた。

「メンドーデスネ。実績ガ有レバ、高レベルカラ始メラレマスカ？」

「えっと、そうです、はい。」

ルシファーは戸惑った顔の受付嬢から体を後ろに向け、猛者たちに視線を投げた。

「コノ中ニ、高レベルノ人ハ居マスカ？居タラ、私ト決闘シテ下サーイ。何人デモ、一度ニデモ構イマセン。」

「えっと、ルシファー！」

僕はルシファーの挑戦的な発言に慌てた。

でも、時は既に遅し！　ルシファーのハンサムな容姿と女たらしさが不細く・・、じゃなくて一流の猛者達の心に火をつけた。

「うぉぉぉ、ハンサムだからっていい気になるな！」
「お前の顔をグチャグチャにしてやる！」
「手前みたいな軟弱な顔を踏みつけたかったんだ！」
「女を全部持っていくな！」
「俺にも女を分けろ！」

猛者達は心からの叫びと悲痛な願いを口にしながらルシファーにかかっていった。
ルシファーは不気味な笑みと共に両手の指を三本立てる。

「なんだ、６分で十分という意味か？」
僕は緊張する。ルシファーは強いと思うが、指を立てた意味が全く分からない。

猛者達を激突する寸前、ルシファーの姿がブレタ！
猛者達は次々に後ろへ吹っ飛んでいく。
一部の猛者は壁に頭を突っ込み、尻を向けている。
一部の猛者は隅で積み重なり山となっている。
一部の猛者は天上に頭を突っ込み、首から下をぶらぶら揺らしている。

６秒もかからなかった・・・。

ルシファーは両小指を口の前に持っていき、フ―ッと、息を吹きかける。
彼の小指はほんのり赤くなっているので、恐らく小指でデコピンをしたのかもしれない。無茶苦茶だ・・・。

（ルシファー・・・、本当に恐ろしい子・・・。）

僕と受付嬢は目をまんまるにしていた。
ルシファーが輝く笑顔を受付嬢に向けた。

「美シイ御嬢サン、コレデ高レベルカラ始メラレマスカ？」

思わずコクコク頷く受付嬢。まるで人形のような動きだった・・・。

僕達はクエストレベルＡから始める事になった。あの中にレベルＡの猛者が３人いたらしいが、ルシファーが軽々と倒してしまったからだ。あの騒ぎの後、巡回していた衛兵が事件を問い詰めたが、「私は彼らに襲われました！（一応、嘘ではない）」と言い、ルシファーは何も罰を受けなかった。ルシファーの魅力は男にも通用するのか？あるいは何かの力を使っていたのか？とにかく事件を問う衛兵の目が少しおかしかった。

僕達はギルドに届け出られたレベルＡのクエストを見て、近隣の村の近くの東の山で暴れる謎の魔物を倒す依頼があったので、それを受けてみる事にした。
それには御城で防具・武器を貰ったが一応武具店を覗いてみる事にした。

（魔物よりもルシファーの方が謎だけどね・・・。）

第４話　猛者たちとの戦い（後書き）

急遽変更！次回はチートなオリジナルヒロインを出そうと思う予定です。

第5話　勇者、初めてのお使い（戦闘）（前書き）

旅行に行っていて、遅くなりました。

第5話　勇者、初めてのお使い（戦闘）

僕とルシファーは武器を覗きに行った。

「・・いらっしゃい・・・。」

やる気のない声で店主が迎えた。

「「・・・・・・・・。」」

僕とルシファーは沈黙している。

店内に並ぶのは、鍬・鋤・草刈り鎌・のこぎり・斧など農具など生活に必要な物ばかりで、唯一あったのは護身用のナイフ程度だった。

よくよく考えてみると、一般の国民が、生活に不必要な武具を買うはずがない。

武具が必要なのは、城の兵士や、傭兵、冒険者だけであり、僕達が入った店は生活に必要な物しかなく、この店で装備を整えても農民一揆になってしまい、魔王（悪徳領主）で、勇者（村の若いリーダー）みたいな構図が出来上がる。

この国にも武具を作る鍛冶家はあるが、城の方で管理されているらしい。

つまり、僕達が城でもらった物がこの国で良い武具であるという事だ。

僕達は『謎の魔物の討伐』の依頼を受けるために、冒険者ギルトに戻った。

ルシファーは少し大きめなギルドの建物に入り、真っ先にギルドの受付嬢とおしゃべりを始めた。

「所デ、美シキ御嬢サン。冒険者ギルドハ、ドンナ歴史ガ有ルノデスカ？」
「４０年前までは『冒険者ギルド』という名前ではなく、『魔術師ギルド』だったのよ。」
ルシファーが受付嬢と仲良くなるための作戦から始まった会話に、僕は少し驚いた。
「元々は、魔術師同士の知識を共有し合い、魔法を必要とする人へ人材を派遣する組合だったの。」

昔は、災害や生活などに魔法を必要とする人達に魔法を提供する事から始まった。

東に大地震が起これば、天に祈りて、大地を鎮め
西で干ばつが起これば、雨を祈りて、大地を潤す
北で争う夫婦があれば、賢者の知恵をもって、平和を導き
南で子に恵まれない夫婦があれば、癒しの力で子種を増やしてやる

いつの世も、人類が抱える問題は似たり寄ったりである・・・。

そんな様子で、昔は不思議な力を持つ魔物は居なく、戦争、治安維持、天変地異から他愛もない問題にも携わってきた。
しかし、４０年前から力の強い魔物が発見された。
一般の人が猟銃や斧で追い払おうとしたが、軽々とやられてしまう程に強かった。
そこで、盗賊などの悪党の討伐や、他国との戦争で戦う魔術師たちに魔物の退治を依頼が回って来た。
いつしか、一般生活などで魔法を求められる数が減り、戦いや討伐ばかりの依頼が増えていった。
魔術師達だけでは足りなくなったために、戦いに向いている傭兵などが、一緒に依頼を受けるようになった。

魔術師でない者も参加するようになったので、名前を変更する事になったそうだ。
案の一つに『傭兵ギルド』が有ったが、殺伐としているので却下。
依頼の一部に、未知の大陸や島の発見をする仕事を国から受けたりする事もあるので、それにちなんで冒険者という事で、『冒険者ギルド』になったらしい。
これなら、色々な人が依頼をしやすい雰囲気な名前だ。

「しかし、魔物は４０年ぐらい前から突然現れたのですか？」
僕は意外な過去に驚いた。
「えぇ、不思議な事にね。中には意思を伝えられる魔物もいて、それを魔族と呼ばれているわ。」
驚いている僕らに彼女は幾分得意げに話す。
「ヘェ、ソレハ凄イデスネ。魔物ガイキナリ、言葉ヲ話スナンテ。」
ルシファーが感心する。
すると、彼女はキョトンとする。
「え、何を言っているんですか？・・・あぁ、そういえばルシファー様は異世界から来て下さった勇者様ですものね。そういえば、意思を伝えるのも苦労無さっているようですし。」

・・・勇者は僕なんですけどね・・・・。
面倒な僕と、女を口説くルシファーは彼女の感違いを訂正しない。
彼女はルシファーの口調のおかしさに納得したようで、話し始める。
「この世界は『神、イエスキリスト』に祝福された世界なのです。」
元の世界で聞きなれた神の名前を聞いた僕は驚いた。ルシファーは妙に納得した顔で頷いた。
彼女の話では、神の元で大いなる意思を一つに統一されているらしい。
この世界に住む住人は、声を通して自らの意思を相手に伝える事

ができ、紙や木に印を書く事で自分の意思を込める事ができるらしい。
内容がなんとなく分かってしまっていたが、依頼書をよく見返すと訳の分からないいたずら書きみたいなのがあったが、それが僕の脳内で変換されているのか、どうしてか読めてしまうのだ。

「まぁ、そんな訳でこの国では意思を伝える練習はすれば、2歳になればある程度話せるのよ。動物の中にもに人と意思のチャンネルが合って、人と話をできる動物もいるのよ。王に助言する動物もいたそうよ。中には話ができる魔物がいてもおかしくないっという事よ。」
彼女の説明に便利だなぁと、僕は頷いた。ルシファーは、目線が顔とそのちょっと下の方を行来きしていたが、僕は無視した。

「所で、冒険者ギルドにどんなようかしら?」
彼女は脱線してしまった話を元に戻した。
　僕は彼女に掲示板に張り付けてあったクエストを指差した。
「この依頼をこなしたいのですが。」
「勇者様がこの依頼をこなしていただけるのですか!それは助かります。」
彼女は少し驚いたようだったが、すぐに嬉しそうな顔をした。
「実はその依頼は4チーム失敗しているんですよ。」

・・・・やっぱり、止めておけば良かったかな・・・・。
僕が勇者らしからぬ考えを巡らせていると、彼女は説明をし始めた。
「ここから東にあるスタッカート村の南には迷いの山脈があり、そこに猟へ行った者達は半分ほど帰って来なかったそうです。帰って来た者も、「ば、化け物が・・、」と言い残して気絶すると、次の

日に何も覚えていなかったそうです。」
迷いの山脈って何さ！普通は迷いの森じゃないの！冒険者初日から、何で難易度が高そうな場所に行かなくちゃいけないの！
そんな僕をよそにルシファーは、
「大丈夫デス、私ガ退治シテ来マショウ！」
・・・・もう、断れそうに無いな・・・・。
僕はがっくり肩を落としていると、彼女は思い出したかのように付け加えた。
「この依頼は1カ月前から受けている女性がいるんです。この依頼は期限が設けられていないので、依頼を断りさえしなければ失敗にはならないのです。その方と話をつけて協力するのも一つの手かもしれません。」
彼女の言葉に僕は思案する。
その人が強ければ、僕は生きて帰って来られるかな？・・・でも、1カ月やって、成果が無いんじゃ、あてにならないかな？
「・・・・その人、美人かな・・・？」
ルシファーがボソリと呟いた。
どちらも勇者には程遠い二人。所でルシファー、妙な片言な話し方はやはり演技だったのか？
「その冒険者の特徴は、水色の髪と瞳を持ち、バスターソードを二本、肩に背負ってます。」
「分カリマシタ！早速行キマショウ！」
ルシファーは水色の髪の女性に興味を持ったようだ。
ルシファーに引きずられて、僕は出発した。
僕らは東のスタッカート村を目指して歩いていた。

村へは道なんて、洒落た物は無かった。
草がぼうぼうに生えた平野で、虫に刺されて肌が腫れ
胸元まで高さのある大きな川で流されそうになり
ウサギを追って森に入るも、クマに追われて帰って来たりした

その間ルシファーは、
聖なる加護で虫から身を守り
川の水面をひょいひょい歩き
クマに追われる僕を見て、腹を抱えていた

現代っ子な僕はへとへとになり、最初は用心して構えていた王家の猟銃も腰に差したままにした。
ルシファー、少しは助けてほしいな・・。
途中、角の生えたウサギの魔物を見つけたが、人を食べる種では無いらしく、僕達を襲ってきたりはしなかった。
雨もぽつぽつと降ってきて、僕の体力をさらに奪っていく。
平野なのに、まるで毒の沼に入っているような気分だった。
魔物に襲われるよりも、道中でへばる僕の前に、ついに魔物が現れてしまった。

プルンプルンと震えるゼリー状の体で、不気味な目と口を持っている。
「スライムだな。」
ルシファーがつまらなさそうに呟く。
「雑魚ダ、ワタル、一人デ頑張ッテ下サイ！コレグライ大丈夫デス！」
お願いだからルシファー、傍観しないで助けてよ！
僕は怯えつつも、初めて見る不気味なスライムと対峙した。
形は崩れたゼリーみたいだ。今思うと、ゲームみたいに涙型の形を保つのは難しそうで、目の前にいるスライムの形の方がリアリテ

ィーはある。

・・・・スライムが可愛いなんて、あのゲームの中だけだ！・・・・・

僕は鳥肌を立てながら、王家の猟銃を3発撃った。

スライムはあっけなく四散する。

「はぁー、良かった。本当に弱くて・・・・。」

僕は安堵して、銃の弾丸を装弾して、腰に差した。

「さて、先を行こう！」

僕はルシファーに初めて勇者らしいリーダーシップを取った。

するとルシファーはにやにや笑っている。

「マダダゾ、ワタル。」

ぽつぽつと雨が降る中、四散したゼリー状の物は一か所に集まってきて、元のスライムの形を取り戻した。

「Ｎｏｏｏｏｏｏ！」

僕は悲鳴を上げる。

スライム、お前は最弱モンスターじゃなかったのか。

僕の方に向かってきたスライムを僕は素早く抜いた剣で切りつけた。

スライムが真っ二つになるも、つかのま、すぐに再生して僕に飛びかかって来た。

慌てて避けようとして無様に転ぶ僕の顔面をスライムが覆い、僕は息ができずに呼吸困難になる。

僕は必死の形相になり、両手でスライムを引き剥がす。

投げ飛ばしたスライムにタクトの様な魔法の杖を抜いた。

僕はスライムによりベタベタになった顔を無視して、杖を四拍子で振った。

火の精霊たちよ、我が呼びかけに答えて悪しき物達をその炎をもって浄化せよ！

杖の先に拳サイズの炎が灯り、それをピッチャーホームでスライムに投げつける。
魚の目師匠（アフロディイテ）の教えによると、この世には様々な精霊が満ち溢れ、自らの魔力を精霊に捧げる事により、精霊の力を引き出す事が魔法らしい。
僕は火の精霊の力を借りて、火の球を生み出し、投げつけた。
スライムからジュワッと、蒸発する音が聞こえて、その体は半分程になった。
「遂にやったか！」
僕は喜びながら弱りきったスライムを眺めた。
ここで僕は気を抜き、痛恨のミスを犯す。
僕はもっと火の魔法をかけるべきだった。
ポツポツと雨を受けるスライムは、塩で縮んだナメクジの如く、徐々に膨らんでいき、動けるほどに回復してしまった。
僕はあんぐり口を開けて固まった。
しばらくして沸々といら立ちが湧いてきた。
「どおぉぉぉりゃぁぁぁ！」
僕は剣で地面の土をザックザクとスライムにかけ、剣の腹でスライムを上からどんどん叩いた。
スライムを軽く地面に埋めた僕は、林の方に走った。
剣で枝をバッサバサと切り、枝を集め、スライムの上に置いた。
僕はまた炎の魔法をかけて枝を燃やして、これでもかっと、言うぐらいに炎の魔法を連発した。
ようやくスライムは蒸発して、僕は膝をついた。
「ヨウヤク倒シマシタネ、勇者殿。見事デス。」
にやにや笑いながら話しかけてくるルシファーに、僕はギラつく視線を向けた。
ルシファーはビックリした。視線で人を殺せそうな勢いだった。
「・・・・先を行くよ・・・・。」

ルシファーはコクコク頷く。
普段は大人しい人程、怒ると怖い。それは事実のようだ。

初めての戦闘でスライムと死闘を繰り広げた勇者ワタル。
その険しい旅に果てに、勇者は魔王を倒す事ができるのか。
がんばれ勇者ワタル！
世界の平和のために
彼が元の世界に戻るために！

第6話　空色の少女

僕とルシファーはようやくスタッカート村に着いた。
木の小さな小屋が数個並んだだけのさびれた村だった。
「さてと、同じ依頼を受けている人は何処にいるかな？もう出発してたりして。」
「サテト、水色ノ髪ノ美少女ハ何処ニ居ルカナ？早ク会イタイナ。」
僕とルシファーは依頼を受けた冒険者を探す。ルシファーの目的は変わってしまったようだが。
村の端っこでは畑を耕している人がいたり、あっちこっちで鶏を小屋で飼っているようだ。
「すみません。南の迷いの山脈に現れる魔物についてお聞きしたいのですが？」
僕は畑を耕す男に声をかけた。
「はぁ？畑を手伝いたい？なら、頼むよ。」
男は耳が遠かったみたいだ。
「違います。南の魔物についてお聞きしたいのですが？」
「そうか、なら畑を頼むよ。」
「違います！だから・・・」
「聞こえてるよ！バーロー！ここは素直に手伝うって言いやがれ！手伝わねぇなら帰れ！あぁ、仕事メンド癖―。」
男が怒鳴る。
僕は茫然とした、徐々に腹が立ってきた。
僕はいら立ちを隠しながら子供達に声をかけた。
「君達、南の迷いの山脈に現れる魔物について何か知っているかい？」
子供たちは足を止めて僕を指差した。
「あぁ、魔物が来たぞぉ！石投げろぅ！」
ガツン、ゴツン！！

子供たちはふざけて僕に石を投げつけてくる。そこそこ痛い。
「痛い、どうしよう、ルシファー・・・」
僕は助けを求めるべく、顔を手で庇いながら、首を回してルシファーを探す。
「辺境ノ村ニ隠レタ女神様、私ト、ロマンチックな夜ヲ過ごシマセンカ？」
早速村娘を口説いていました。

プッチン
何かが弾けた様な音がした気がした。

「フギャァァァ！む・か・つ・くー！！」
僕は大声で喚いた。
子供達は怯えて逃げ出したが、鈍くさい鼻たれ坊主一人だけが尻もちをついた。
鼻たれ坊主は「うわぁーん！！」と盛大に泣きだした。
僕がイライラ、イライラ、イライラしていると、どこからともなく、箒を手にしたおばちゃんが現れた。
「うちの子に何をするのよ！」
おばちゃんが箒の先を僕に向かって振りおろす。
僕はあわてて避けると、次から次へとありえない方向から箒を繰り出してくる。
箒を避けている内に家の壁まで追い詰められてしまった。
「ちょっと、待って！その子供たちに石を投げられたんだってば！」
「嘘言うんじゃないよ！うちの子がそんな事するはずないでしょ！」
異世界だろうとモンスターペアレントは存在するらしい。
すると、にやにやこちらを見物していたルシファーが助け船をだしてくれた。
「スミマセン、奥サン。彼ハ私ノ仲間デス。誤解デスよ。」
ルシファーはハンサムオーラでおばさんを照らした。

おばさんは顔を赤らめルシファーを眺めるも、ルシファーはこっそりとそっぽを向いて、吐きそうな顔をした。
おばさんが落ち着いたのを見て僕はおばさんに声をかける。
「そうです、僕達は南の迷いの山脈に住む魔物を倒しにきました。」
「そうかい、それは御苦労さま。ここまで来るのは大変だったでしょう？」
おばさんは打って変わって穏やかな対応になった。
おばさんの相手も大変な事の一つでしたが・・・。

僕達はようやく話がつきそうだった。
しかし、それを邪魔するものがいた。
いきなり殺気を感じて僕は横に転げた。
その刹那、
ズドーンと爆発的な破壊音が響く。
横を見ると、巨大なバスターソードが僕の横に小さいクレーターを作っていた。
顔から血の気が退きまくる僕はバスターソードを握る人を見る。
その髪と瞳は晴天の空の様な水色で、僕と同じ位の背をして、普通の女の子と同じぐらいの腕の太さだった。
そんな女の子が自分の背に迫るほどの大きさのバスターソードを片手に一本ずつ軽々と持っている。
女の子が視線をこちらに向ける。その瞳には一切の感情がうかがえない、とても冷たかった。
彼女はその可愛らしい口を無表情で開く。
「お前がこの地を荒らす曲者か。」
「ち、違います！僕はここの村に来て5分も経っていません！」
彼女の勘違いに僕は慌てる。
「嘘をつく必要は無い！この人相書き、お前にそっくりだ。」
彼女はそう言い捨てて、一枚の紙を突き出す。
その人相書きの人物は、僕と同じ黒真珠のような髪と瞳。

その顔の肌は日本人みたいな肌色。
目は二つ、鼻と口は一つだった。
問題は、その人相書きはまるで、クレヨンで描いた子供のいたずら書きのようで、黒髪と黒い瞳の人間ならば、男も女も当てはまってしまう人相書きだった。
「・・・・・、あまり似ていませんよ・・・・・・。」
これで似ていたらちょっとショックだ。
「そんなはずは無い！この人相書きでは・・・・・」
彼女は改めて人相書きを確認した。
すると彼女はしばらく黙った。
彼女は少しだけ申し訳なさそうな顔をした。無表情なので分かりにくいが・・・。
「やっぱり、人違いだよね。その人相書き全然似ていないよ。」
僕が笑いながら言うと彼女は答えた。
「・・・すまない、この人相書きはお前に違いないが、この村とは別件の人相書きだった。」
痛恨の一撃！僕は二重にショックを受けた。
「この村の件は、・・・これだ。」
彼女は漁った鞄から、一枚の人相書きを出した。
それは人型の黒豚が描かれていた。
・・・僕とは黒以外の共通点が無い、というか人ですら無い。
「それで、お前に関しては・・・、えっと・・、何で私はお前の人相書きを持っているんだっけ？」
「僕に聞かないでよ！僕が聞きたいぐらいだ！」
首をかしげる彼女に僕は不満をもらす。
ふむ、と頷いて彼女は僕に問う。
「お前は何の目的でこの村に来たのか？」
この村に来て初めて話がかみ合った。
「僕達は冒険者ギルドの依頼で、この村の南にある迷いの山脈に住む魔物を退治しに来た。」

彼女は少し考え込んだような顔をした気がした。
「私も、この魔物に手を煩わせている。他者と協力してはならないという決まりは無いので、お前は私と協力しないか？」
努力が実を結んだ。魔物退治は全く進んで無いけど。
「僕の名前は長谷川亘（はせがわわたる）。」
「私ノ名前ハ、ルシファーと申シマス。以後、御見知リ置キヲ、美シイお嬢サン。」
彼女は無表情な顔で僕とルシファーを見る。
ルシファーのハンサムオーラも彼女には効果が薄いようだ。
「・・・了解、私はキリ―だ。」
彼女はバスターソードを肩に収めながら自己紹介した。
「・・・では、早速出発する。」
「へっ、もう日が暮れますよ？」
僕は驚く。
夜になり、魔物が活発になっては非常に困る。
「魔物対策はあるのですか？」
僕の問いに彼女はコクンと頷く。
「私がいれば、ザコが千でも万であろうとも変わらない。」
・・・・・、不安が増えました。
「・・・行くぞ。」
彼女は東に向かって歩き出す。
「・・・・迷いの山脈は南ですよ、そっちは東。」
彼女は立ち止り、南へ方向転換する。
「では、改めて、・・・行くぞ。」
彼女は南へ真っすぐと進んだ。
バキッ！！ドガッ！！
民家の壁にぶち当たるも、彼女は壁を蹴り破る。
仲良く食卓を囲み、団欒を楽しんでいる家族の夕飯を足で踏みつけて先を進んだ。
彼らは目をまん丸にして、口をポカーンと開けていた。

僕は慌てた。
「何をやっているの！？」
「何って、迷わないように、南へ真っすぐ進む。」
「民家は迂回すればいいじゃないか。」
「迂回する内に、自分では気がつかない内に道が逸れ、とんでもない所へ辿りついてしまう。山を目指しているのに、気が付くと何故か海や、砂漠とかにいるものだ。目の前に壁があるならば、それをぶち破って真っすぐ進む。そんな格言が有った様な、無い様な。」
・・・その格言、使い方が違う！人生で挫折しかけた時の格言で、本当に迷子になった時の格言では無い。もしかして、こんなに強いのに1カ月も依頼をこなせないのは方向音痴だから？・・・
彼女はまた壁を蹴り破って外に出て、ルシファーも面白そうに後に続く。
僕も外に出ようとして後ろから肩を掴まれた。
「お・ま・え・ら、何の家を荒らしとんじゃどりゃぁぁ！！」
こちらのお家のお父様はどうやらお怒りのようです。
「御免なさい、さよならー。」
僕は勇者の足を生かして、その場から逃げだした。

無事に？水色の戦士の少女と合流した、勇者ワタルの御一行は南の迷いの山脈へ向かう。
ここまで苦難の道のりであったが、彼らにさらなる試練が待ち受ける。
まぁ、ここまでの道のりはスライム一匹だけだったが・・・。
さぁて、謎の少女キリーと怪しいハンサムのルシファーの正体はいかに！？
次回で明らかになるか！？・・・・・・・・まだ無理かもしれません

第6話　空色の少女（後書き）

もうすぐ夏休みも終わりで、学校が始まったらなかなか書けないと思います。
できるだけ書くつもりですが、更新できなかったらごめんなさい。

第7話　勇者ワタル！早くも大ピンチ！？

僕とルシファーはスタッカート村で出会った、水色の少女ことキリーの後を付いて行った。
その後の数日、僕らは波乱に満ちた冒険をした。
雪山で遭難しかけたり（僕だけ瀕死状態に陥った）、
ジャングルで原住民に槍を突き付けられたり（僕だけ危うく神への生贄にされかけた）、
王族暗殺計画の容疑者にされたり（僕は王が飲むはずの毒を少量飲んで倒れた）、
『勇者よ、お前に世界の半分をくれてやろう。』と言う魔王の前から逃げ出したり（その時は二人とはぐれていて、僕一人だけだった）。
この依頼は簡単にはいかない。
この依頼をこなすには相当な覚悟が必要だ。
・・・と、彼女告げる。
「・・・、二人とも、覚悟はいいか・・・・。」
「「・・・・・・。」
彼女の問いかけに、僕とルシファーは沈黙で答えた。
僕らの沈黙に彼女は何かを感じたようだ。
彼女はひとつ頷いて、前に向かった・・・・、が、僕とルシファーに呼び止められた。
「「何で、迷いの山脈に行くだけで、万丈波乱な冒険劇を繰り広げなくちゃいけないんだ！！」
僕らは、長い道のりを経て、迷いの山脈の前にようやく辿り着いた。
キリーは酷いぐらいの方向音痴で、僕らもどうして迷子になったのか分からないぐらいだ。
通常なら3時間歩けば着く距離なのに、世界を一周してこの山脈

に辿りついたような感覚だった。
さすがのルシファーもハンサムな顔に疲労の色が浮かんでいる。
僕も依頼を始める前から、疲労困憊で倒れそうだ。
唯一平然とした顔をしているのは、迷子になれているキリーだけだった。
やはり、一か月も依頼を達成できなかったのは、敵が強いからではなく、彼女が残念な程に方向音痴なせいのようだ。
「・・・過去は振り返っても何も得られない。私達は前に進むしかないんだ。」
キリーは遠い目をして空を眺めた。
「少しは反省しろ！！」
僕は声の限り彼女に怒鳴った。

迷いの山脈は見た目普通の山だった。
山は木々で生い茂っていて、野生の動物、魔物も沢山いそうだった。
ただ、それなりに高く、とても広大で、依頼の魔物を探すのも大変そうだ。
僕らが山に足を踏み入れようとした時、ルシファーが顔をしかめた。
「何だか、結界があるのか、空間が歪められている気配がする、いや、シマスよ。」
ルシファー、君は胡散臭い話し方が面倒になったんだね。もう普通に喋っても良いよ。
しかし、結界があるという話しは見過ごすことができない。
僕はふうむと唸る。
「ルシファー、空間の歪みはこの迷いの山脈が持つものなの？誰かが作り出した物なの？」

「恐ラク、何者カガ、コの結界を作り出しているようだ。」
ルシファーは思案しながら話す。
キリーも自分の思考に没頭する。
「なるほど、私が迷いの山脈に近づく事すらできなかったのは、結界のせいなのか！？」
「「それは違う、お前が方向音痴なせいだ！！」
僕とルシファーはハモッて、ツッコム。
彼女は聞こえてないのか、何も感じないのか、スルーして山へ向かった。

僕達は山を登り続けた。
実の所、登り始めて1時間ぐらいしか経過していないが、僕が現代っ子な上、世界を一周する程の迷子になれば疲労で歩けなくなっても正直仕方無いと思う。
僕は王家の猟銃を杖にしながら、山道を登った。
王家の誇りを傷つけないかって？・・・、そんな物は糞くらえだ！
普段は温和な小市民の僕も、疲労で気が立っているようだ。
ルシファーも、自分の周りにいるのが残念な美少女だけだとやる気が出ないらしい。
キリーは黙々と登り続けている。
彼女は強そうだが、戦い以外の事はからきしだめらしい。
美少女なのにお色気がゼロなのは珍しい。
彼女も暇になったのか、僕に話しかけてきた。
「・・・ワタル、何してる・・・。」
「え、そりゃ、道しるべのため、道に印を付けているんだよ。こうすれば帰り道が分かるんだよ。」
僕はナイフで木にぺけ印を書きながら答えた。
「なるほど、・・・・私も・・・。」
僕は嫌な予感がした。

彼女はシャラーンといい音を立てて、優雅にバスターソードを二本抜いた。
「ちょっ、ちょっと待って！！」
僕はあわてて彼女を静止するも、わずかに遅かった。
彼女は樹齢１００年を越えた樹木にペケ印の軌跡を描いて切断した。
樹齢１００年の木を切られて大地が怒ったのか？
巨木は天罰と言わんばかりに倒れ込んできた！！
何故か、善良で小市民な僕の頭上に！！
「？★５●ｋ■▽＄％“＃ｍ¥@＊！！！」
僕は声にならない悲鳴を上げて、横に飛び退いた。
ズドーン
僕が慌てたために脱げてしまった靴が、僕の目の前で巨木につぶされる。

「・・・・・・」
僕は無言で彼女を睨みつける。
彼女は頭をかいて、口を開く。
「・・・・気にするな・・・・・。」
「君が気にする立場だ！！」
僕はとても泣きたかった。
魔物よりも先に仲間に殺されるような気がした。

僕達はひたすら登り続ける。靴が片方脱げてしまい、歩きづらいし、足の裏が痛い。
もし、山の頂上に魔物がいるのであれば、頑張って上を目指せるだろう。
しかし、魔物は何処にいるのか分からないのだ。

ゴールの見えない山登りなど、やっていて気が萎えてくる。
この広い山脈の中から魔物を探せと言われても、数日はかかってしまうだろう。
「あぁー、メンド癖ー。やってらんねぇよ。」
ルシファーがボヤク。演技をする気力が無いようだ。
「おい、ワタル。こんな依頼ふけちまって、とっとと魔王の城へ行こうぜ。」
「困っている人がいるみたいだし、もう少しだけ頑張ってみようよ。だいたい、元々はルシファーが勝手に受けた依頼じゃないか。」
ルシファーが今まで猫かぶっていた事に気づいていた僕は、ルシファーの地の話し方に疑問なく返す。
ルシファーは僕の答えに舌打ちする。
僕とルシファーの会話を聞いて、キリーが尋ねるかのように僕の目を見た。
勇者だって知られたらどんな反応をするんだろう？
僕は少し考え込んだ。
キリーの人柄は、強くて、方向音痴で、馬鹿である事が分かった。
（別に言っても、たいして興味を持たないか、すぐに忘れてしまうかな？）
「うん、僕達は魔王の城を目指しているんだよ。」
「・・・そうか。」
キリーは何かを考え込むように黙っていた。

僕達は山を登っていると、３匹のゴブリンが現れた。
キリーは小物に興味ない様子で無視した。
「ワタル、今の内に経験積んどけ。」
ルシファーもゴブリンを無視して登り続けた。
「ちょっ、ちょっと待ってよ。」
ゴブリンは強者の二人には近づかずに、弱者な僕にだけ襲いかか

って来た。
僕は恐怖に身をすくめながらも、王家の猟銃を構えた。
ゴブリンは僕の膝ぐらいまでの大きさで、茶色い不気味で細い体で、まるでミイラみたいだ。頭からはちょこんと小さい角があり、手の爪は小さくも鋭く、黄色い瞳がぎらぎら光っている。
「キシャ―！！」
ゴブリンが奇声をあげながら飛びかかってくる。
僕は恐怖していたが、スライムの時とは違って落ち着いていた。
スライムは得体のしれない化け物で、ゴブリンは得体のしれない獣に見えたからかもしれない。
人間、理解できず、見た目が気持ち悪いものを怖がるものだ。
実際に僕は沖縄のなまこを怖がって触れなかったし・・・。
見た目もひとつの大きな要素だと思う。
僕はゴブリンに狙いを一瞬で付けた。
僕の頭の中に獅子王（ライオン）師匠の教えが思い出される。

『ワタルよ、恐怖を飼い慣らせ。恐怖で身がすくんでしまっては命を落とし、恐怖を感じずに強敵と立ち向かえば殺される。しかし、恐怖を飼いならす事で、恐怖を敵からの攻撃を察知する第六感に昇華するのだ。・・・、でも無理は禁物。危なかったら迷わずにげろ。』

ゴブリンを相手にして本気で逃げようかと悩んだ。
しかし、ここで逃げていては何もできやしない。
ゴブリンに勝てない奴が魔王に勝てるはずが無い！！（正論）
そんな考えをほんの一瞬で思考した。
狙いを定めた王家の猟銃が火を噴いた。
一発はゴブリンの腹に命中。
二発目は二人目のゴブリンの頭に命中。
３発目は外れてしまった。

３匹目のゴブリンは仲間がやられてしまって、逃げ腰になっているようだ。
僕は二匹を倒した事に油断してしまい、装弾しようとした弾を落としてしまった。
それを見た３匹目はチャンスとばかりに飛びかかって来た。
僕は再び恐怖を感じながら、銃をあきらめて後ろに飛び退いて攻撃を避けた。
すると、『ゴン！！』と大きな音が鳴り響いた。
「痛い！」
僕は頭を太い木の枝にぶつけてしまい、頭を抱えて蹲（うずくま）った。
僕は窮地に立たされた。
ゴブリンは勝利を確信し、こちらに飛びかかってくる。
くそ、ゴブリン。ここまで手強いとは！！
僕は歯を食いしばって後悔するも、他人が見たら「お前が馬鹿だから。」と口をそろえて言う事だろう。
頭がぼんやりした僕は、ゴブリンが襲いかかってくるのを他人事のように見る。
そんな中、さまざまな事が走馬灯のように脳内を流れた。

この世界に来なければ、迎えるはずだった誕生日のケーキ
両親と一緒に行ったレストラン（母の料理は期待できない代物（しろもの）だった。）
まだやりかけの、ドラ●エ？とＦ●？
好きなアニメ・マンガと小説の続き　ｅｔｃ…

・・・・どうでもいい事が思い浮かんでくるな・・・・・。

僕が脱力しかけている時、親友の真央の姿が思い浮かんだ。
彼は笑いながら「馬鹿な奴」と言っている気がした。

そうだ
僕は死ぬわけにはいかない
もう一度真央に会うんだ！（彼とは親友であって、決して変な関係ではない）

僕の意識が覚醒する。
ゴブリンは目の前に迫っていて、剣を抜くのは間に合わない。
僕は手も使い、蹲った状態から飛び上がり、木の枝をつかんでぶら下がった。
ゴブリンは僕を見失って、ドンと、そのまま正面の木にぶつかった。
僕はゴブリンの上に飛び降りで、足で潰す。
「ピギャァァ！！」
悲鳴を上げるゴブリンに、僕は素早く剣を抜いて貫いた。
ゴブリンから緑の血が出てきて、ゴブリンは痙攣してから動かなくなった。
「はぁ、はぁ、はぁ。」
僕は激しい戦いと緊張で息が切れる。
ぱちぱちと拍手が聞こえる。
「おめでとう、ワタル。少しは強くなったのかな？」
僕はルシファーを睨む。
ルシファーも僕の睨みに慣れたのか、にやにやしている。
「はぁぁ・・。」
僕はため息をついた。もう散々だ。
僕はまた山を登ろうとして、キリーがいない事に気が付いた。
「あれ、キリーは？」
僕が尋ねると、ルシファーは首を振った。
「ワタルが戦っている間にどこかへ行った。」
ルシファーもため息をついた。
キリーとはぐれてしまった以上、彼女と合流する事はもう不可能

だろう。
今頃、海底の古代遺跡や、天界で迷子になっているのかな？
ゴブリンと死闘を繰り広げた勇者ワタル、彼とルシファーはキリ―とはぐれてしまう。
彼らは・・・、いや、ワタルは無事に迷いの山脈から帰る事ができるのか！？

第8話　そして、勇者の御一行様は誰もいなくなった

僕とルシファーはルシファーと二人で山を登り続けた。
僕はルシファーを盗み見る。
ルシファー、・・・どこかで聞いた事のある名前だなぁ。
そう思いつつも、僕は何処で聞いた名前なのか思い出せずにいた。
（ルシファー、君はいったい何者なのだろうか？）
彼はキリーが居なくなってから、ますます不機嫌になった。残念な美少女も目の保養にはなっていたらしい。
僕は心を決め、彼の正体を問う決意を構えた。
「ねぇ、ルシファー・・さ、様。あ、あ、あなた、さ、様、まは。・・いったいな、何者なので、しょ、しょうか？」
僕は疲労のあまり、言葉づかいがおかしくなったようだ。けっして、緊張により、過呼吸になんてなっていない。
「えーっと、どうするかなぁ。このまま力を隠して行くのもメンドーだし。」
彼は少し迷っていた。
神との言いつけは絶対なのだ。
もちろん、彼が良い子ちゃんじゃ無いので、こうやってこの世界に堕ちたのだが。
「まぁ、いっか。メンドーだし。」
神の言いつけもどこ吹く風と、あっさり破る事にした。神様のお気に入りのくせに、罰を受けただけの事はある。
「あぁ、俺は完全無欠美男子な偉大なる天子長様だ。」
「て、天使様ですかぁ？」
僕の声が裏返る。これまでのルシファーの言動を考えても、とても天使には見えない。
唯一天使っぽい所は、ハンサムな所だけだ。
「疑っているのかぁ？はぁん！？」

「い、いえ、そんな事無いです。」
僕はあわてて否定した。
「で、でも。どうしてこの世界にいるんですか？」
僕は怒りを反らすため、話を促した。
「それはだな、恐らく嫉妬だ。」
彼は遠い目をして言った。
「し、嫉妬ですか？？？」
僕は頭の中がハテナマークだらけになった。
「あぁ、俺のボスであるイエスキリストは俺に嫉妬したんだ。俺は、美しい物を愛で、美味なる物を嗜み、わびさびで風情ある時間を過ごすのを愛した。」
僕は頭の中で、「美しいものを愛でる」＝「女の子たちをナンパ」、「美味なるものを嗜み」＝「酒池肉林」、「わびさびで風情ある時間を過ごす」＝「ゴロ寝」と変換した。あながちはずれでは無いかもしれない。
ルシファーは続けた。
「神は大変忙しく、そんな心豊かな俺様に嫉妬した。俺をこの世界に墜とし、勇者であるお前と共に魔王を倒す事を命じられたのだ。」
神様はそんなルシファーに腹をたてたのかもしれない。数日間一緒にいる僕には、神様の気持ちが分かったような気がした。
そんな話を聞きながら、僕はルシファーを聞いた事のある理由が分かった。キリスト教で地獄に堕ちた、堕天使ルシファー、もしくはサタンともいう。話を聞いているうちに、僕は疑問に思った。
「神様をイエス・キリストって言ったけど、この世界にもキリスト教があるの？」
「ふむ、お前はキリスト教を知っているのか。どこの世界から来たんだ？ミラージュドリームか？アラゲ●ジア？ジュエ●ランド？それともガイアか？」
ルシファーは珍しく興味ありげに聞いてきた。
「うーん、多分ガイアだと思う。僕達は地球って呼んでいるけど。」

「そうか、あそこは厄介だなぁ。」
何が厄介なのだろうか？分からないが僕はルシファーに元の世界に戻る方法は無いか聴いてみた。
「ねぇ、ルシファーは僕を元の世界に戻す方法を知らない？」
「さぁな？俺達天使には、神の命令無しには異世界に行けない。」
僕はルシファーの足にすがり着いた。ルシファーは嫌そうな顔をするが、ここで機会を逃すわけにはいかない。
「じゃぁ、神様にお願いしてくれない。僕を元の世界に戻すように・・。」
ルシファーは面倒そうな顔をして、頭を掻いた。
「それは、無理かもな。」
「どうして？神様でも無理なの？」
ルシファーは首を振る。
「いや、神様だからこそ無理だ。」
「どういう事？」
僕は絶望した声で尋ねる。
「神や俺達神の遣いはな、信仰する者がいてこそ力を発揮できるんだ。だから、信仰者の取り合いは昔から続いているんだ。この世界は俺達の神、キリスト教が支配できた世界であるため、神は俺をこの世界に派遣できたんだ。」
ルシファーは足にすがりついていた僕を蹴り飛ばし、話を続けた。
「ワタルの住むガイアは、さまざまな神々が自分の領土だと主張している世界である。仏教、イスラム教、ギリシア神話、北欧神話。後は忘れたが、さまざまな神の一派が領地を主張しているため、硬直状態の冷戦状態にあり、下手に手出しができないんだ。俺らがお前を元の世界に戻そうとすれば、他の神々から集中攻撃をくらう。他の神々の一派もガイアに干渉すれば、どうなるかは然り。まぁ、だから、神に頼んで元の世界に戻る事はあきらめた方がいい。」
僕はショックで頭が重たく、目の前が暗くなった。なんで、神様のくせに、日中領土問題みたいなのを抱えているんだ！！

「何とかならないのー！！！」
「こら、やめろ！！鼻水たらして、俺に近づくな！！殺すぞ！！」
再びすがり着く僕を蹴り飛ばした。
僕はしくしく泣くが、それはかなり控えめな表現かもしれない。
「はぁ、最初の目標通りに古代遺跡を調査したらどうだ。俺も魔王を倒したら、神に頼んでみるわ。だめで元々なんだから期待はするな。」
「はぁ、僕は元の世界に戻れるのかなぁ？」
僕は涙ぐみながら、かすれた声で嘆く。
「誰か、助けてー！！」と叫んで、都合よく助けてくれるヒーローを呼びたい。しかしながら、僕こそが、不運にも助けを求める声に引きずり込まれてしまった勇者なのだ。勇者は助ける側の立場なのだ。

僕とルシファーはまた歩き出した。
僕は未だに涙ぐんでいる。
しかし、いつまでも泣いたって、誰も助けてくれやしない。
ルシファーは可愛い女の子しか慰めないのだ。別に、ルシファーに慰めて欲しいわけではないけど。
僕とルシファーが歩いていると、突如、緑色のドラゴンが空から現れた！！
大きさは像3頭分以上はある。めちゃくちゃ大きい。
「ようし、ワタル。今度はあれで特訓だ！」
「無理無理、絶対無理！！！」
犬歯をむき出しにして笑うルシファーに鳴き叫ぶ僕は引っ張られた。
なんで、こんなに大きなドラゴンが現れるのさ！ゴブリンの次にドラゴン？ここの山脈はモンスターのレベルに波がありすぎるよ！！
ドラゴンが何かを吐こうとしている。炎かレーザーか、ギ●フレ

アかどうかは知らないけど。
僕はルシファーの手から逃れて、木の裏に隠れた。ルシファーは引っ張っていた僕の手ごたえが急に無くなったため、転びはしないが、少し態勢が崩れた。
緑のドラゴンが緑色の粘液を出した。
緑色の粘液はあちらこちらに散らばった。僕の目の前の木にも飛び散り、一瞬で目の前の木を溶かした。どうやら、毒攻撃だったらしい。
僕はその猛烈な毒にビビった。
果たして、直撃したルシファーは無事だったのだろうか？
毒により溶けた時に白い煙が大量に発生した。
白い煙の中に一つの人影が立っている。
彼の鎧はめちゃくちゃに溶け、服装も乱れている。しかし、彼には一つの傷も無く、皮膚も少しの赤みも帯びていない。
しかし、決して毒の影響が無かったわけではなかった。
それは・・・・
「この、毒、くさい。」
僕は鼻をつまみながら、呟いた。それはとてつもなく臭かったのだ。
俯くルシファーの表情は分からない。
彼が顔を上げた時、僕は後ずさりした。とても表情が分かりにくい顔をしているドラゴンですら、恐怖しているのが僕にも分かった。
「てめぇ、殺してやる！！完全無欠美男子天使な俺様をこけにしやがって！！」
ルシファーは一瞬で間合いを詰め、巨大なドラゴンを天空の遥かかなたまで蹴り飛ばした。まるで、ア●パンチを喰らったバイ●ンマンみたいだ。
「待ちやがれ、てめぇ、逃げるつもりかぁ、はぁああん！？」
「いえ、ルシファーに蹴り飛ばされただけですよ。」
僕のツッコミも彼は聞いていなかった。

「はぁぁあああ！！」
彼は大きな叫び声を出し、背中から金色の大きな一対の翼を出した。頭の上には金色の輪っかが浮かぶ。
彼は一筋の閃光となって、空高く舞い上がった。
彼は流星となったドラゴンを地の果てまで追いかけてゆく。
僕は一人だけポツンとその場に残された。
そして、勇者の仲間は誰もいなくなった。
「僕、どうしたらいいんだろうか？」
その疑問に答えてくれる人はいない。

仲間とはぐれてしまった勇者ワタル。彼はこの困難をどうやって乗り越えるのか！？
奇想天外万丈波乱！！彼の冒険はいかに！？

第9話　ダンジョンボスの居場所は？

キリーはどこかへ迷子になり、ルシファーも自分で蹴り飛ばしたドラゴンを追いかけて飛んで行ってしまった。
僕は迷いの山脈という超難関な魔物の巣窟でたった一人になってしまった。
ロープレだったら仲間が死んで主人公一人になるのも分かるが、仲間が勝手に何処かへ行くなんて、どんなゲームクリエーターでも考えやしないだろう。
「現実は小説より奇なり」と言うが、そんな馬鹿な事は無いと思っていたのに。自分がそんな状況に陥るとはなおさら思っていなかった。
願わくば、僕が目にしている世界は夢や本当に小説であって欲しい。本当にこの世界が夢なら、どれだけ良かっただろうか。
異世界トリップを望む人間なんて、現実世界においての不適応者だけだと思う。あるいは、異世界トリップの過酷さを知らずにいるだけの者か。ていうか、普通はその苛酷さを知るわけない。
僕なんて、スライムとゴブリンに殺されそうになるぐらいの強さだ。ゲームの中でポコポコ倒すモンスターに殺されそうになれば、誰もが泣いて、元の世界に帰りたくなるだろう。
「はぁ・・・」
僕はため息をついて、その場に腰をかける。今まで歩いてきて、もう足がパンパンで痛い。僕は足をもんでほぐす。靴の脱げてしまった靴下が、もうボロボロだった。
僕が今いる所は、標高８０Ｍ（メートル）ぐらいって所だろうか。我ながら、よくここまで登り詰めたものだ。運動会の徒競争で悩んでいた自分が懐かしくなる。どう頑張っても3位にしかなれなかった。
しかし、僕にはこんな所でくよくよしている暇は無い。
僕には魔王を倒すという使命があるんだ。

元の世界に帰って、親友とまた馬鹿騒ぎをするんだ。
と言うか、こんな所でくよくよしていたら、後ろから魔物に襲われてお陀仏になりそうだ。一刻も早く対策を考え、この先の方針を立てなければ！
とりあいず、状況を整理しなくては！！
魚の目師匠（アフロディテ）も言っていた。
「どんな時でも、どんな困難な時でも、状況整理は大事です。ここで整理を怠ると、王家から預けられた手紙を紛失したり、お弁当を忘れてお腹を空かせたり、魔法を使おうとして、杖と埃はたき棒を間違えて振ったりしてしまうのですよ。」

そう、どんな時でもきっと打開策はある。しかし、己の眼を濁らせてしまえば、見えるものも見えなくなる。心を鎮め、落ち着ける事が肝心（かんじん）だ。
状況整理だ。
僕は迷いの山脈で一人である。
武器は剣と王家の猟銃と魔法のタクトである。
持ち物は王様の餞別にくれた金貨十数枚に、王家の狩猟袋。
王家の狩猟袋は狩猟に必要な色々な物が入っているのだ。袋は両手サイズだが、中は空間拡張されていて、小さいタンスぐらいの広さがある。中には、弾丸と薬莢がたんまりあり、投げ網、ロープ、鶴の恩返しにでてきたような罠（名前は覚えていない）、それに何やらいかがわしい本（この袋は王様の隠し場所だったらしく、その題名は「タ‐ヘナルアナトミア」だった。杉田玄白らを愚弄するかのような代物だった。）。その本を見て、僕がどうしたかはここでは特筆するべき事ではない。健全なる男子ならば当たり前の事である・・・・・

状況整理をしている間に、もう日が暮れてしまった。世の中、罠とは思えない物が罠だったりするものだ。
僕は気を取り直して、考え直した。
「うーん、何か忘れているような気がするな？」
僕が悩んでいると、「グー！！」と僕のお腹が自己主張した。どうやら僕は、困難な状況に陥ったせいで、自分の体の状態が分かっていなかったようだ。
「そうか！！何かを忘れていると思っていたら、僕は食料を持っていなかったんだ！！」
ナルホドと、僕は手をポンと叩いた。
もう一度、「グー！！」とお腹が鳴って、僕は空(むな)しくなった。
「王様もエロ本なんかじゃなくて、お菓子でも隠してくれたら良かったのに・・・」
僕はうな垂れる。さっきまで夢中になっていたくせに、人は苦境に陥ると誰かのせいにしたくなるものだ。
僕は再考する。
すると獅子王(ライオン)師匠の言葉が頭の中に思いだされた。

「ワタルよ。世の中死んだらそこで終わりだ。それは誰もが知る事。ミミズだって、オケラだって、アメンボだって、死んでしまえばそこで終わりなのだ！　勇者ワタルよ、汝が少しでも苦境に陥ったのであれば、とりあいず逃げておけ。この世の平和の為に、何を為すべきか、逃げた後でゆるりと考えれば良いのだ！！」
獅子王(ライオン)師匠。あなたはライオンではなく、ウサギっぽい考えをしていますが、弱者な僕にはそれが正しいと思います。だから、僕は貴方の教えに従います！！
僕は獅子王師匠に感謝の念を胸に秘め、決意を固めた。
僕は迷いの山脈から下山し、ふもとの村で宿泊する事に決めた。どうせキリ―には、宇宙戦争の最前線や海底の古代遺跡に行かねば会

えないだろうし、ルシファーもこんな広い山の中で再会できるとは思えない。
つまり、僕が今とれる最善策は、魔物に殺されないように下山して、ふもとの村でルシファーと合流する事だ！
まぁ、ルシファーなら気がつかないうちに黒豚の魔物を倒しているかもしれないけど。黒豚よりもドラゴンの方が強そうだった。
そうと決まれば、「善は急げ」だ。
僕は登って来た山道を下って行った。登って来た時よりも足が軽い。依頼の魔物と戦う事を一時的に放棄したせいだろうか。
「ふん、ふん、ふーん♪ふ、ふん、ふん、フーン♪」
僕はカルメンの鼻歌を歌いながら、スキップして下って行った。
油断していたら、足が木の根に引っ掛かって転んだ。
少しベソをかいた事は誰にも内緒だ。

僕は下山している最中、何か動物を狩って食事でもしようとも思った。しかし、僕が動物達を見つける前に、動物達が僕を見つけて逃げられてしまった。
どうやら狙撃士の才だけでは、優秀な猟師にはなれないらしい。
帰り道は木にペケ印を刻んできたため、迷いの山脈でも迷わずに帰れそうだ。途中、キリ―が切り倒した木を見て、よく生きていたなと実感した。

僕はようやく迷いの山脈を抜けられそうだ。
もう夜は更け、空には満天の星が輝き、二つの月が空高く登っている。
「ようやく、こんな恐ろしい所から出れる。あ～あぁ。村でおいしいご飯に、温かいお風呂、ふかふかのベッドが待っているんだろなぁ♪」
僕は迷いの山脈から抜ける事ができた安心感ですっかり油断をし

ていた。
弱者である僕は、どんな時でも周りに満ちる危険に気を払わなければならなかったのに・・・。
「イタッ！！」
僕は小走りをしていると、足元の石に躓(つまづ)いて、盛大に転んでしまった。
「痛たたたた・・・」
僕が起き上がろうとすると、僕の背の上を熱気が通り過ぎた。
「へっ！？」
すると、僕の左の方でドカーンと何かが爆発する音が聞こえた。
「ナ、ナ、何？こんな所で魔物の襲撃か？」
僕はあたりを見渡しが、暗くてよく見えない。
「フン、運の良い奴め！」
遠くから誰かの声が聞こえてきた。
「だ、誰？」
僕の声が上ずる。
僕は声が聞こえてきた方向に目を向ける。
暗いから見えづらいが、その人物はこちらに歩んでくる。
声からして、恐らく彼らしき人物は２ｍ位の背丈であり、肌は黒いようだ。
彼は、武骨な黒い鎧と兜を身につけ、巨大な斧を片手に持っている。僕では持ち上げるのが精一杯だろう。
彼は不気味に笑いながら、こちらに足を進める。彼は僕を格好の獲物だと思っているようだ。
僕と彼との距離が５０ｍに縮まった時、月と星しかない空の下、ようやく彼の姿がはっきりと見えた。
「・・・・な、なんで、こんな所に！？」
僕は声を上ずらせて聞く。
そう、それは意外な人物だった。
彼はニ足歩行をする黒豚だった。

と言うか、キリ―が持っていた手配書とまったく同じ姿であり、僕らが探していた依頼の魔物であった。
なんで、ダンジョンボスがこんなダンジョンの入り口に居るんだよう！！
「フフフ、なんでお前達が探していた黒豚一族最強の俺様がこんな所にいるのかだって？冥土の土産に教えてやってもいいぞ！？」
黒豚は偉そうに語る。
「ハハハハ！我こそが、魔族最強の４人のうちの一人！四天王の一角、知将「暗黒の混豚とは我の事だ。ワハハハハ！！！」
最初の冒険でいきなり四天王の一角が現れたようです。僕ってかなり、大ピンチ！？
僕はぶるぶる震えて、声も出ない。
「それで、何で俺様がこんな所にいるか？だっけな？」
黒豚は聞いてもいないのに、もったいぶって話しだす。どうやら自慢したいらしい。
「俺様は結界を張り、俺様の城を隠していたのだ！！」
黒豚は自分の後ろの方を指、じゃなくてヒズメを差した。
小さな崖の下に、小さなログハウスが建っている。大草原の小さな小屋なのだろうか？
「えっ？な、なんで迷いの山脈の中ではなく、ふもとに小屋を建てているんですか？」
「小屋ではなく、城だ！間違えるな！！」
僕の問いに対して怒る。自尊心はとても高いみたいだ。
豚は心を落ち着けて、話を続けた。
「まぁ、良い。先ほどの問いに答えてやろう。お前は俺様を見つけるためには何処を探す？」
クルンと丸まった尻尾がゆれる。
「えっと、迷いの山脈？ですよね？」
「そうだ、愚かなる人間どもはあんなに高くて、登るのが面倒な迷いの山脈を探すだろう。そうして何日間か俺様を探しても見つから

なければ、ついにあきらめて下山してくるだろう？」
「えっと、そうですね。」
黒豚の言う事に僕は頷く。
「ならば下山してきた時は当然ヘロヘロだろう？」
「そうですね。」
「下山した奴は、当然気が緩んでいるだろう？」
「そうですね。」
「ならば、超強い俺様がそんな奴らと戦っても、もちろん瞬殺だろう？」
「そうですね。」
「もちろん、俺様だって、毎度毎度、下山して村を襲い、登山して帰るなんて面倒でかったるいだろう？」
「そうですね。」
「山で食糧を得なくたって、村で食い物を奪えば楽だろう？」
「そうですね。」
「フフフ、だから俺様は迷いの山脈のふもとに我が城を建てたのだ。」
「（小声）せこい。」
「はぁ？何か言ったか？そのせこい策略に引っ掛かった馬鹿は何処のどいつだ？はぁん？」
黒豚（くろぶた）さんは耳ざとく僕の呟きを捉えた。その言葉は正論で僕は耳が痛い。
えっちら、おっちら、一生懸命に山を登ったのに。迷いの山脈で3度も死にそうな目に合ったのに！（その内一回は仲間のせいで・・）目標がすぐ目の前にあったなんて、かなり気が萎えてくる。
チルチル達は自分の家で青い鳥を見つけて幸せを得たようだが、僕が山のふもとで見つけたのは僕を殺そうとする黒豚さんでした★なんちって。
って、全然笑えないし！？どうししたらいいの？助けてルシファー。

勇者ワタル、またまた大ピンチ！？
いったい彼の運命はいかに！？

第１０話　逆転、ぎゃくてん、ギャクテンテン！！

僕は世界で一番不幸な中学生に違いない。もちろん、現実、小説、あらゆる世界も含めて・・。

僕は長い、長い冒険を経て、ついに目標の黒豚の魔族を発見する事ができたが、僕一人だけで対峙（たいじ）する事となった。

ルシファーもキリーもいくら強くても、肝心な時に不在じゃぁ、その力も意味が無い。

「フハハハハ、ガキ、お前はもう終わりだな！」

黒豚が巨大な斧を持って、こちらに近づいてくる。

全く、あの黒豚が迷いの山脈のふもとに結界を張り、住んでいたとは・・・。

迷いの山脈に踏み込む前、ルシファーが「空間が歪められている」と言っていたが、その時にもっとよく調べておくべきだった。今さら、悔やんでも遅いが・・。

・・・でも、死にたくなんてない・・・。

「ハハハ、死ねぇー！！」

黒豚が斧を上から振り落とした。

「ヒ、ヒィィ！！」

僕はとっさに地べたを転がり、一撃で死ねるだろう攻撃をなんとか回避した。

「チッ！往行際の悪い奴め！！」

黒豚が忌々しそうに舌打ちする。

「往行際が悪いって・・・そりゃぁ、誰だって死にたくないでしょ！！」

僕は悲鳴を上げて抗議する。

「口答えしないで、とっとと死ね、ガキ！」

黒豚が地面に突き刺さった斧を抜こうとする。

しかし、思いのほか深く刺さったので、抜くのに手間取っている

ようだ。
僕はそれをチャンスだ、とばかりに、王家の猟銃を構える。
「チッ！！」
黒豚は一旦斧を抜くのをあきらめ、半身になって両手・・・じゃなくて、両のヒズメを腰の後ろに構えた。
「叉（チャ）～焼（シュ）～拳（けん）！！！」
両のヒズメの間に、サッカーボール大の火の玉が生まれ、僕の方に放った。決して、豚が使ってはいけないネーミングセンスだ！
「ヒ、ヒ―！！」
僕は慌てて、無様に横へ跳ぶ。無論、マンガみたいに前転バク転で避けるなんて真似はできない。生命の危機にそんな余裕ある行動をする奴は、徹底的なナルシストだけだ。
「ふん、我の力はこんな物だけではないぞ！！ハアアアアアア！！！」
黒豚は力を貯め出した。もの凄いコ●モ、じゃなくてオーラを感じる。
「そんな、まだまだ余裕なのか！？」
僕は力の差に愕然とする。僕のは拳大、黒豚のは頭大。僕のは小学生のキャッチボール程度、黒豚のはプロの野球選手並みのスピードだ。
本気を出されたら、どんな攻撃を繰り出されるか計り知れない！
黒豚がルシファーよりは弱いと言っても、元々ルシファーは雲の上の人だ（まぁ堕天使だし）。それでも、黒豚は僕の力を遥かに超えていそうだ。
絶対に防いで、この場を逃げなくては！！
僕は草食獣の意地を見せてやる。（注意；ホモサピエンスは雑食です。みなさん、野菜だけでなく、適度にお肉も食べましょう）
僕は魔法のタクトを3拍子で振る。
全ての生命の源よ　乾きし大地を潤すもの　　我、水の精霊に祈り

邪から守る盾となれ！

「遅い！叉(チャ)～焼(シュウ)～包(パオ)！！」

「水精の盾(タッチ・デ・ポン・レミア)」

黒豚の魔法と僕の魔法が同時に完成した。

解説しよう！！

勇者ワタルは、黒豚が火系統の魔法を使う事を予想し、水の玉で自分を覆う魔法を使った。

水の玉の中心に自分が浮かび、全方向からの火系統の魔法をガードできる。その上、象が突進してきても、壊れずに、水の玉ごとコロコロ転がって、物理攻撃も防げるのだ！！

無論、目が回るが、恐らく巨大な洗濯機の中に入ったような感覚だろう。

魔力もそれ程消費しないこの魔法だが、唯一の欠点として、呼吸不可能による時間制限のみがある。

がんばれ、勇者ワタルよ！！

負けるな、勇者ワタルよ！！

何やら謎の熱血なナレーションが、僕の魔法を解説したような気配がした。

妙に具体的な気配を無視し、僕は目の前の状況に注目した。あわてて呪文を唱えたため、十分に息を吸えなかったのだ。時間を無駄には出来ない。

視界は白く濃い湯気で満たされ、何も見えない。

どうやら黒豚は、僕を蒸し焼きにするようだった。僕を囲む水も、もうすでにお風呂並みに温度が上がっている。お風呂としては丁度いいが、戦いの最中では容赦なく体力を奪う。

「フフハハハ！何も見えないだろう？何も分からないまま、この斧の錆となるが良い！」

水を通した声が僕の耳に響く。
（クソ！どうしたら良いんだ！）
この水の盾は、炎を防ぎ、雷も表面を流れ、地面に受け流す事ができる。
物理攻撃も防ぐが、斬撃だけは少し威力が弱まるだけで、完璧には防げない。
黒豚の腕力をすれば、水の抵抗など無意味だろう。
しかし、それ以前に、息も限界にきている。
酸素不足で気絶するなど、戦場では死を意味する。
（もうだめだ！魔法を解いて、蒸し焼きにされる前に走って逃げるしかない！）
僕は魔法を解いた。
息が苦しく、思わず呼吸をしようとするが、熱気で僕の肺が蒸し焼きにされそうだ！！
走れずに、その場で跪（うずくま）ってしまった！！
しかし、神が不幸すぎる中学生に情けをかけてくれたのだろうか？
徐々に湯気が霧散し、呼吸が楽になって行く。
「ぜぇ、・・・・ぜぇ、・・・・ぜぇ・・・・」（どうしたんだ？）
僕は呼吸しながらも、疑問に思う。
晴れてゆく湯気の中、僕の目の前に黒い人影があった。
「ブヒィ・・・・ブヒィ・・・・ブヒィ・・・・」
黒豚も蹲っていた。ドテン！（僕は気分的にずっこけた！実際は、そんな余裕はないが・・・）
どうやら、黒豚はこの熱気の中で、斧を振り回してこちらに来たらしく、斧が近くに落ちている。
しかしながら、黒豚もさすがにこの熱気の中では動けなくなってしまったようだ。
黒い肌が真っ赤に染まっている。
もうすぐで、豚の蒸し料理が完成しそうである。僕的にはニンニク料理を所望する。

まぁ、人間ならとっくに蒸し焼きにされ、死んでいるだろうこの威力。
数秒だけあびた僕より酷いだけのダメージで済んだだけでも、彼は魔族として体が丈夫な事が窺(うかが)える。
「ぜぇ・・・ぜぇ・・・ぜぇ・・・」（お前は馬鹿か？）
「ブヒィ・・・ブヒィ・・・ブヒィ・・・」（無礼な人間め、八つ裂きにしてやる！）
僕と黒豚は同時に立ちあがった。
二人とも、生まれたての小鹿の様に足が震え、駅前の酔っぱらったおっさんみたいに、よろよろ歩き出した。二人とも顔が真っ赤なだけに、傍(はた)から見ると、酔っぱらっているように見えるだろう。
僕は震える手で王家の猟銃を構える。
黒豚も斧を構えようとするも、武器のはずの重さが仇となり、ズルズルと地面に斧を引きずってしまう。
僕らは、二人ともゆでダコになりながらも、戦いを再開する。
僕は3発撃ったが、狙いが定まらなかった。
二発はずれるも、一発は鎧に当たって、貫通はしなかったが、黒豚を仰向けに倒した。
僕は弾丸を装填しようとするが、上手く手が動かずに弾を落としてしまう。
黒豚はじたばたして起き上がろうとするが、鎧が重いせいで起き上がれずにもがく。
異世界から召喚された勇者と魔族を代表とする四天王の一角！誰もこんな情けない戦いを夢想だにしなかっただろう。
本当にこの黒豚は四天王の一角の知将なのだろうか？
僕はそんな事を考えながらも、なんとか弾を詰め、よろよろ黒豚の元へ歩いて行った。
「よ、よひ・・・くぉの、ヒョリなら・・・」
僕は震える手で銃口を鎧の隙間に当てた。
「ひゃ、・・ひゃめろ～！！」

黒豚の顔が恐怖に歪む。
「ヒね―！！」
僕が頭を揺らしながらも、引き金を引こうとした。
ドゴッ！！！
鈍い音がした、もちろんこんな音を銃が立てる訳がない。
どこからともなく飛んできた拳大の石が、僕の額に直撃したのだ。
「ひ、ひたい（痛い）！！」
別にギャグでは無いが、僕は声を上げて、後ろに倒れた。
（い、いったいどこから？）
後ろの方から2つの人影が現れた。
「大丈夫ですか、ボス！！」
「遊びが過ぎます、ボス！最初から私達にも戦わせて下さい！！」
「す、すみゃない。」
二匹のイノシシが現れた。どちらも鎧を身につけ、槍を手に持っている。僕と同じ位の背丈だが、体はとても太く、体重は僕の2倍以上ありそうだ。
片一方は頭にリボンを付け、女の子らしい・・・・・キモイけど・・・。
イノシシの方が黒豚よりも強そうだ。黒豚の方が値段は高そうだが・・・。
「さぁ！ボスを叉焼（チャーシュー）にしてくれた恨み、後悔させてやる。」
「全く、ボスにこんなにいい匂いを出させて・・・許しませんわ。」
あんた達もそれなりに失礼だと思うよ、仮にも自分達のボスを食い物扱いするとは・・・。黒豚というブランドは思ったよりも強力なのだろうか？
しかし、僕もピンチ、逆転、またピンチだ。まさに塞翁が馬だ！こんなに早く状況が変わるとは、孔子も予想しないだろう。
「もう・・・ここまでか・・・」
僕はもう心が折れ、あきらめかけていた。
「フン、人間のクセに、なかなか頑張ったがここまでだな！」

「フン、人間のクセに生意気ですわ。」
イノシシ達が僕を睨む。
僕は絶体絶命のピンチだった。
どうあがいたって、生き残れっこなかった。
僕が絶望して、仰向けに倒れていると、流れ星が見えた。
「助けて下さい、助けて下さい、助けて下さい、3回言えた。」
「フン、命乞いしたって、そうは問屋が大根を下ろさない！！」
恐らく、このイノシシは問屋が卸すという意味をしらないのだろう。
流れ星が僕の必死な願いを聞いてくれたのか？
そんな時だ！天から救いの手が伸びたのは！！
流れ星がだんだん大きくなる。
「へ、こっちに流れ星が向かってくる？」
「はぁん？」
イノシシ（雄）が空を見上げる。
「ありゃ、ホントだ！！」
どんどん流れ星が近づいてくる。
そのうちゴゴゴ！！という音が耳に届き始め、少しずつ大きくなる。
そして！！！
流れ星が黒豚親分の上に直撃した！！
ズゴ――――ん！！！！！
鼓膜が破れそうなほど大きい地響きがし、土埃が煙幕となって覆い尽くす。
黒豚親分の悲鳴は一切聞こえなかったが、・・・完全に死んだだろう。
「ボ、ボスゥゥゥ！！」
「きゃぁぁぁ！！」
二匹のイノシシが悲痛な声を上げる。
舞う土埃が晴れた後、そこにはとても半径5Mぐらいの大きさの

クレーターができた。
そのクレーターの中央で、黒い染みとなってしまった黒豚の上に、一人の人影があった。
それは、暗いよるでも彼女が空色の美しい髪を持っているのが見て取れた。
「キリ―！！どうして空から！？」
そう、黒豚の上に落ちた流れ星の正体はキリ―だった。
僕の呼ぶ声に彼女は気が付き、僕を見上げる。
彼女はそっと口を開け、話す。
「・・・・ここはどこ？」
僕は命の危機から脱したのに、とてつもなく疲労を感じた・・・。

第１１話　迷物語（まよいものがたり）

「キリー！！どうして君は空から降って来て、いったい今まで何をしていの？」
僕が驚いて尋ねる。
「・・・・私は、目標を探していただけだ・・。とおる、・・目標は見つけたか？」
キリーはその目標を足で潰しながら、僕に問う。
「えっと、・・・・君の足元なんだけどなぁ？」
僕はキリーの方を指差した。
「・・・・笑止、これはゴミだ。冗談も程々にしろ・・・・」
「そう言われてもね・・・、本当なんだけど・・・。」
キリーは自分が踏みつぶしたものが、黒豚の魔族であるどころか、それが生き物であった事にも気が付いていないらしい。
それより遥か上空から落下して、足も挫かないなんて、そっちの方が冗談みたいだ。
「お、おい、お前ら！！ボスを殺しておいて、俺達を無視すんじゃねぇ！！」
「あ、あんたたち！！ボスをゴミ扱いするなんて、絶対に許さないんだから！！」
黒豚をゴミ扱いしたのは僕じゃないよ。文句ならキリーにだけ言ってほしい。
キリーが無表情の瞳で二匹を見つめる。
「「ヒッゥ！！」」
二匹は自分よりも強者の視線を受けて、本能的に危険を嗅ぎ取ったようだ。
まぁ、大気圏から軽々と飛び降りてくる奴相手に、野生的本能なんてなくとも恐怖を感じられるだろう。
「・・・はぁ、・・キリー・・今まで何をしていたの？」

「・・・・短く言うと、「お前は真面目に頑張れば、元の世界に戻れる」という事だ。」
キリーの言葉に僕の頭は疑問符だらけになった。
「いったい、どういう事？」
「話せば長くなる、・・・・聞くか？」
キリーが無表情な目で僕を見る。
「んん～！？ちょっと気になるかな？」
「・・・分かった。長くなるが話してやろう・・・。
私は目標を探しつつも、いつの間にか消えてしまったお前達も探していた。（まぁ、キリーが僕たちを置いて行ったんだけどね・・・・。）
私は迷いの山脈を越え、人の石像が立ち並ぶ街にやって来た。
私が町を歩いていると、生きている人間を見つけた。
話を聞くと、この町の人間は呪いで石にされてしまい、元に戻すには聖なる泉の水を振りかけなければならないらしい。
しかし、その周りにいる魔物が手強く、自分では近づく事ができないらしい。
私がその話を聞き、倒すべき魔物の手配書を見た。
その泉にはそれらしき魔物がいないので、そのまま目標を探す事に決めた。」

「そんだけ冒険して無視するのか！！絶望している人なんて眼中に無し！？」
僕のツッコミを無視して、彼女は続ける。
「旅を続けるうちに、私は天空に浮かぶ城に、何でも知っているという悪竜の存在を知った。
私は海に沈む古代遺跡より、古代の遺物である飛空挺の存在を知った。
飛空挺はもうすでに、地底国に住むダークエルフ達に盗掘された後だった。私はダークエルフの軍団と戦い、飛空挺を手に入れた。

そして、私とジョニーは飛空挺で天空城を目指した・・・。」
「ちょっと待て、ジョニーって誰？」
「しかし、天空城を目前にして、悪竜の攻撃により飛空挺は壊れてしまった。脱出ポッドで天空城まで行けるのは一人だけだった。」
僕のツッコミはきれいにスル―された。
「ジョニーは言った、・・・・・
『キリ―！こいつはもう駄目だ！脱出ポッドでお前だけでも天空城へ行け！』
ジョニーは操縦桿を握りながら叫ぶ。
『（キリ―）・・・・・』
キリ―は沈黙したまま、ジョニーを見つめる・・。
『いいから、俺にかまわずに行け！俺は、俺は、この大空を眺められただけで満足だ。全てに絶望した俺にこの大空を見せてくれたのはお前だ、キリ―！だから俺に構わずに行け！！』
『分かった・・・』
キリ―は脱出ポッドに入り、操作した。
『えっと、そんなにあっさり行くの？ねぇ、俺が良いって言ったけど、それって無いよ。少しぐらい戸惑ってよ。おい、ちょっと待…』
・・・・そして、私はジョニーの尊い犠牲により、天空城で悪竜と対峙する事ができた。」
「ジョニー、憐れ。同じ男として同情する・・・。けど、キリ―。君って上空から落ちても大丈夫じゃん。脱出ポッドをジョニーに譲ってやれ！」
僕は男として声の限り叫んだ。
「私は悪竜を相手に苦戦し、倒すのに３０秒もかかってしまった・・・。」
もちろんクールに無視。
「短っ、苦戦した割には短っ！悪竜の扱い雑！！キリ―は大抵の相

手を瞬殺するだろうから、まぁ苦戦したんだろうけど・・・・。」
キリーは遠い目をして続けた。
「悪竜は息を引き取る前に言った・・・・
『グフ、この我が負けるとは・・・。我は地上の者達を散々苦しめた。しかし、それも必要な事だった。』
『・・・・』
キリーは黙ったまま聞き続ける。
『この星は危機に瀕している。化学という技術を発展させた奴ら、マールミエ星の奴らはこの星を征服しようと企んでいる。我は、奴らに対抗するため、奴らには無い、魔力という武器を貯めるために地上の者たちを喰らい続け、強大な魔力を手に入れた。』
悪竜はゴホッと、咳をする。
『奴らは何でも予測し、あらゆる事を知る事ができる技術を持っている。奴らを倒すには小細工など意味が無い！圧倒的な力で正面から叩き潰すしかないのだ！！』
キリーは考え込む。
『・・・・なる程、それがあれば目標を探す事ができるのか・・・・。』
『ん？何を言っておる？』
『・・・・そいつらを倒す・・・・』
悪竜は驚く。
『そ、そんな馬鹿な。・・・いや、我を倒したお主なら、できるやもしれぬ。』
悪竜は考え込み、決心したようだ。
『ならば、我が今まで蓄えてきた力、我が全てを汝に託そう！！最後の希望よ！この星を頼むぞ！！』
悪竜が光の粒子となり、キリーの胸に吸い込まれて行く。
・・・・そして、私は悪竜の力を使い、宇宙へと羽ばたき、マール

ミエ星人と争った。」
「・・・なんだか、ファンタジー世界を羽ばたいて、ＳＦ世界にまで手を伸ばしてるよ、この人・・・。」
僕は額に手を当てる。理解するのにも限界が近づいてきた。
「私は、マールミエ星人の大将と戦いになった・・・

『ハハハ、美しく屈強なる戦士よ！何故、人は争い合う・・・ぶくぅ！！』
キリーは二本のバスターソードで敵の大将を細切れにした。
キリーは宇宙船内を見渡す。
『・・・どれが何でも分かるという物なのだろうか・・・。』
目の前にはピカピカ光る物が沢山あり、押すことができそうな小さな出っ張りが無数にあった。
キリーは適当に押してみた。ポチっとな！
《警告！警告！これよりオーバードライブモードに入ります。これより超加速、急上昇、急降下をしますので、心臓の弱い方、妊婦中の方、気分の悪い方はご了承下さい。》
キリーの乗る宇宙船は、どんどん加速していき、ワープした状態で、ブラックホールに突っ込んだ。

・・・・・・・・・・・・。
私は長い時間気絶していたようだ。
私はゆっくりと目を開くと、５人の少年少女が私の様子を見ていた。
『あ、よかった。気がついたのね。』
少女が微笑みながら、私に声をかける。
『・・・・ここは？』
一人の少年がうなずく。
『ここは、地球って所だよ。翻訳の魔法も上手くいったようだね。』
私は彼らの顔を眺めた。

すると、驚いた事に一人だけ顔を知っている者がいた。少し、大きくなっているようだが、・・・・・

『・・・・ワタル・・・？』

『キリー、久しぶり、なのかな？そうだよ、僕はワタルだよ。まぁ、君の知っているワタルとは時間軸が違うけどね。僕は君が知る僕より、未来の僕なんだ。』

私は考え込む。

『・・・・よく分からない・・・・。』

ワタルはクスクス笑う。

『まぁ、そうだろうね。昔、君から未来の僕の話を聞いた時、「なんじゃぁ、そりゃっ」て、僕も思ったもん。』

先ほどの少年が話しかけてくる。

『君は、宇宙船で光速の１００倍のスピードでブラックホールに突っ込んだ事により、３次元世界に時間軸、世界軸を加えた５次元世界から飛び出したんだ。それで君は時間の制約、世界の制約を超え、この異世界である地球に辿り着いたんだ。』

ワタルは真顔になって話しかけてきた。

『それでね、キリー。過去の僕には、「真面目に頑張れば、元の世界に戻れる」って伝えて欲しいんだ。それで、元の世界に戻るには・・・・』

『駄目だよ、ワタル。過去に君は、未来の君からそれ以上の情報を得ていない。下手に教えすぎて、過去に、未来にどんな影響を与えるかは未知数だ。どんなバタフライエフェクトを引き起こすか分からない。』

『全く、ケチだな、真央。』

一人の少年の制止に文句を言う。

ちなみに、バタフライエフェクトとは。簡単に言うと、過去のわずかな誤差が未来に影響をもたらす恐れがある事という事である。

（※作者の勝手な解釈です。詳しく知りたい方はご自分でお調べ下さい）

『ハハハ、過去に、未来のお前が伝えようとしなかった事が悪い。まぁ、つまり自業自得だな。』
『全く、清水までそんな事、言わなくたって良いじゃないか。』
ワタルが口を尖らせる。
他のみんながクスクス笑い、ワタルが咳払いして、キリーに顔を向けた。
『と、言う訳で。過去の僕。恨むなら、お前に何も伝えなかった、未来の僕を恨め。』
『フフフ。それって、あんたの事じゃない。』
『うるさいな、渡辺さん。僕にとっては、僕よりも未来の僕が悪いんだよ。』
キリーを除いて、みんなが笑う。
一人の少年が話しかけてくる。
『さてと、キリーさんも、ここに長く居ない方が良い。異世界の住人である君は、この世界にも、君自身にも悪い影響があると困るから。』
『そうだね。偉大なる賢者のとおる、頼んだよ。』
『うん、任せて！』
とおると呼ばれた少年は頷くと、目を閉じて歌いだした。
とても優しい歌だった。
優しい眠りに包まれたようだった。
そして、気がつくと、

・・・・上空から落下していて、過去のワタルと再会していた。して、今に至る。」
僕の顔が変に歪む。
「なんじゃ、そりゃぁ～！！」
未来の僕が言ったとおりに、過去である僕が叫んだ。

１０分経過

僕は必死に頭の中を整理した。
「えっと、つまり・・・。キリーが迷子のすえ、未来の地球で未来の僕に出会ったという事か？」
壮大なる迷子の物語だ！たかだか黒豚を探すのにどれだけの冒険をしているんだ。
全く・・・・、これを迷物語と名付けよう。パクリっぽい名前だが・・・。
ていうか、すごいなぁ、キリー。僕とルシファーは、海底の古代遺跡、地下帝国、天空城、宇宙戦争の最前線で迷子になると予想していた。しかし、キリーはその全てを実践して、さらにその斜め上を行っている。未来の地球に行って、未来の僕に会うなんて・・・・。
「・・・私もよく分からないが・・・、恐らくそうだ・・・・。」
ナルホド、僕は頑張れば元の世界に戻れるのか。これで、これからも頑張っていける気がする。でも・・・、
「未来の僕！もっと教えてくれたって良いじゃないか！」
僕は未来の僕を恨んだ。

第１１話　迷物語（まよいものがたり）（後書き）

偉大なる賢者とのコラボです。そのうち、一つのシリーズにして、ラストの小説で４人の主人公が戦う物語にしたいです。（注意；作者も今のところどうなるかは分りません！）

第１２話　聖剣の手掛かり

キリーが空から降ってきて、四天王の一角らしい黒豚さんを踏みつぶしてしまった。
「現実は小説よりも奇なり」と言うが、黒豚さん達も女の子が大気圏から降ってくるとは思ってもいなかったようだ。
「大気圏から女の子が奇襲をしかけて来る可能性がある」。今日の事を魔物たちは、今後の教訓に・・・・、まぁ、今後一生役に立たない教訓になりそうだけど・・・。
壮大なる迷物語を語り終えたキリーは、その無表情な顔で僕に尋ねてきた。
「ワタル・・・、目標は何処だ・・？」
僕は頭を抱える。
「だ・か・ら！君がさっき踏みつぶしたんだよ！」
僕とキリーはさっきから同じような会話を繰り返している。
ちなみに、黒豚の部下であるイノシシＡとイノシシＢは、僕とキリーが食い違った会話をしている間に、トットコ逃げるよ、イノ太郎だ。僕があいつらだったとしても、こんな無茶苦茶な人間を相手にしたくなど無いだろう・・・。
「だから・・、目標は・・？」
「あぁ、もう。黒豚は死んだんだよ。圧殺だか、鈍殺だか、撲殺だか、打殺だか、ガサツだか、知らないけど。」
僕は面倒になって、そう言い放つ。恐らく、黒豚は世界で一番ガサツな殺し方をされた。
「とにかく、目標達成、依頼達成。もう、村に戻って、ふかふかベッドで眠りたい。」
「・・・そうか、なら良い。私も、変な物を踏みつぶしてしまって、足の裏が気持ち悪い・・・。」
黒豚、憐れなり・・・。顔も合わせた事も無い少女に踏みつぶさ

れ、殺されたあげく、気持ち悪いとの一言しかないとは・・・。
僕は憐れな敵に黙祷を捧げてやる。
「じゃ、村に行こうか。ルシファーは何処にいるか分からないけれど、そのうち村に戻ってくるよ。」
「・・・あいつなら、問題無い。」
僕の提案にキリーは頷く。
満天の星空の下、僕とキリーは村に向かって歩いて行った。
・・・・が、
「キリー！そっちじゃないよ。こっちだよ。」
「そっちじゃ分からん。」
「指差しているでしょ！・・・、てっ、そっちじゃないよ。こっちだよ。」
ドラ●エ？のあの敵、ラ●アンじゃなくて、キリーだったら、誘導にとても苦労するだろうな・・・・。キリーは空●ぶ靴を手に入れられなかった。第一章　宮廷騎士；完。なんて・・・、

僕とキリーは大地の向こうを眺めていた。
真っ暗だった空が白ばんで行き、星は徐々に姿を消してゆく。赤々と燃えあがる朝日がゆっくりと動いているように見えるが、意外と早く登って行き、赤く染まった空がすぐに蒼くなって行く。
どこからか、鳥の鳴き声が響き渡り、一日の始まりを告げる。
美しい朝の光景を見ながら、今日は清々しい天気になりそうだと思った。
だけど・・・・。
僕は目を擦り、心臓が脈打つたびに走る頭痛に顔をしかめる。
キリーは相も変わらずの無表情。
僕は美しい朝日を眺めたが、その美しい光は僕の頭痛を促進させる。まるで、僕は吸血鬼になったかのような感覚だ。

僕は一生懸命にキリーが迷子にならぬように先導するものも、キリーがあっちこっち向かおうとするので、僕はひっきりなしに彼女を正しい道のりに乗せなければならなかった。
おかげで、僕達は一晩中歩いて、ようやく村に着いたのさ・・・、トホホ。

「はぁ、キリー、ようやく着いたね。君のその迷子になる才能は、もうすでに、神の領域にまで達していよ。」
「・・・褒めても何も出ない・・・。」
「皮肉なんだけどね・・・。」
僕は軽口をたたきながら、宿屋の扉を叩く。
中には朝早くから宿のおばちゃんは働いているようだ。
おばちゃんはテーブルを拭いていた。
「あれ、・・・おばちゃんは・・、僕がこの村に来た時、僕に箒で叩いてきた人だ。」
そう、おばちゃんは僕が子供を泣かしたと決めつけてきて、僕を箒で叩いてきた人だった。
おばちゃんがテーブルを拭く手を止め、僕の顔を見上げた。
「あれ、・・・坊やは・・・、誰だっけ？」
おばちゃんは箒で叩きのめした僕を忘れているようだ。
全く、やるせない気持ちだ。きっと、キリーに倒された黒豚も、天国で僕と同じ気持ちなのかもしれない。僕はかつての敵の気持ちに勝手に共感した。
「いや、僕は貴方に箒で・・」「あぁ！迷いの山脈の魔族を倒すと言ってた坊やか！もう2週間経ったから、魔物に食われたのかと思ったよ！」
おばさんは僕の言葉を遮るかのように言った。
ちなみに、僕達は迷いの山脈を丸一日しか探索していない。ほとんどが、迷いの山脈までの道のり、キリーの迷子に付き合わされ、かなりの日数が経っただけだ。読者の方はお忘れかもしれませんが・

・。
「それで、あんた達。迷いの山脈の魔族を倒したのかね？」
おばさんは目を輝かせて尋ねる。
「えっと、一応倒しました。」
「・・・倒したらしい・・・。」
僕は口ごもる。キリーは未だによく分かっていないらしい。
「一応倒したって、どういう事だい？」
おばさんがいぶしげに聞き返した。
「えっと、その、・・・彼女が踏みつぶした・・・。」
おばさんは、見た目は普通の体格の女の子であるキリーを上から下までジト目で眺めた。
「それ、何かの冗談かい？」
「いえ、そういう訳じゃないです・・・。」
僕もその出来事を目の前にしなければ信じないだろう。
「ふーん、そうかい。・・・まぁ、特殊な魔術を秘匿する人はいるからね。余計な詮索はしないよ。」
おばさんは、僕らが貴重な魔術を隠したがっていると解釈したようだ。
「でも、あの魔族を倒してくれて、本当に助かったよ。」
おばさんは詮索する目を引っ込めて、感謝の言葉を表した。
「おばさん、あの魔族にはとっても困っていたんですか？」
おばさんは憤慨したように話をまくしたてた。
「もう、聞いてよ！あの魔物が来てからもう散々な目に会わせられたよ。それ以前はさ、普通にのんびり暮らしていたのに。私達が考える事なんて、作物を作ったり、猟にでかけた男達が獲物を持って来られるかとか、いい男がこの村に来たりしないかとか、そんな事しか考えなかったんだよ。全く、困っちゃうよ！あの魔族が来てから、もう滅茶苦茶！豚の新しい料理方法を考えたり、夫がビビっちゃって、夫婦の営みも上手くいかなくなったり。全く、嫌になっちゃう！あぁ、そういえば、マッカ―王国で半年に一度の商売フェス

ティバルがやる時期よね。村の心配ごとも減ったし、今度行こうかしら？でも、遠いのよね。マッカー王国に行くだけの賃金を支払うだけで、何も買えなくなっちゃうしね。ｅｔｃ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・

ｅｔｃ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

一時間程、おばさんのマシンガントークが炸裂！勇者の精神力をガンガンと削ってゆく。まるで猛毒に犯されたようだ。

ちなみにキリーは勝手に空いている部屋に入り、ベッドの上で熟睡中だ。・・・ずるい。

・・・・ところでね、ここの村の出身のエミリーはね、マッカー王国の学者の所に嫁いだのよね。羨ましいわ、あそこで買い物できるなんて。その学者は８年前まで、聖剣の研究をしていたらしいわよ、まぁ盗まれたらしいけど・・。あの夫婦には４人の子供がいて、長男はイケメンだそうよ。下の子も将来イケメンになりそうね。全く、エミリーの旦那さんはどれだけ強靭な物を持っているのかしら。うちの旦那にも分けて欲しいわ。」

「えっ！聖剣！？」

聖剣の話に、僕は闇に沈みそうになった意識を取り戻した。意識が闇に沈みそうになる程、おばちゃんのマシンガントークは凄まじい威力だった。

「あら、嫌だ。あなたはまだ子供だけど、そんな事に興味があるのね。えぇ、エミリーの旦那さんは強靭な剣を一振り持っているわ。一発で２度斬る事ができるらしいわよ。」

・・・一発で2度斬るって、どういう話だ・・・。秘剣！ツバメ返しでハッスル！なんてね。
良く分からん、・・・まぁ、分かりたくないけど・・・・。
「いや、そういう話じゃなくて・・。その旦那さんは聖剣の研究をしていたって、どういう話なの？」
おばちゃんのマシンガントークには超重要なキーワードが隠されていた。もし、これがゲームならば、僕はおばちゃんのマシンガントークを読み飛ばして、キーワードを見落としていただろう。
「何！一発で二度斬る、だと！くそ、世の中にはそこまで極めた男がいるのか。俺も、「胃の中の蛙」という事か。」
いつの間にか、ルシファーがマシンガントークに介入していた。
「ルシファー、その蛙は死んでいそうだけどね。ちなみにルシファーはどこに居たの？」
「あら、そちらのイケメンさんは昨日の昼に来て、ここで仲間を待っているんだって。仲間って、そういえばあなたの事だったのね。」
おばちゃんの言った衝撃の事実に僕は腹を立てた。
全く、ルシファー・・。君はあんな危険きわまりない所に僕を置いて行って、自分はノホホンと宿に泊まっていたのか・・・。
自分だってルシファーの事を気にかけないで村へ向かった事を忘れて、僕はルシファーを恨めしいと思った。例え、同じ事をしても、不幸な人間は他人を恨めしく思うものだ。
「一発で二度斬る技かぁ・・、いったいどうすれば習得できるのだろうか？」
「さぁ、マシムのスープでも飲んでみたらぁ、効くらしいわよ。あんたいい男だし、彼女が喜ぶんじゃないかしら？」
「いや、あのさ！そろそろ聖剣の話に戻して欲しいんだけど・・・。」
僕は眠気で頭痛のする頭を抱えて言った。どれだけ、その話を引っ張るんだ！早く話を聞いて、すぐに寝たい！
「いや、私も詳しい話は知らないのよ。エミリーと旦那さんはマッ

カ―王国に住んでいるってぐらい。ちなみに、マッカ―王国の特産のマシムが怪しいと思うわ。」
「もう、その話はいいって！それより聖剣の事を教えて！せ・い・け・ん！！」
　僕が大声を出すも、おばちゃんはうるさそうに顔をしかめ、耳を押さえる。
「それ以上は知らないわよ。マッカ―王国に行ってきたら？」
「そうするよ。」
　おばちゃんから重要な情報が聞き出せただけで、とても満足だ。
「ところで、迷いの山脈にいた黒豚の魔族はどんなようすだったのかしら？」
　僕が部屋を借りて寝ようと思ったが、おばちゃんがまた話し始めた。
「あぁ、なんとか倒しましたよ。」
　僕は一刻も早く寝たいが、おばちゃんはまだ話を続けるつもりらしい。
「実はね、あの黒豚の魔族が村に食べ物をよこせって言って暴れるのね。それで、毒を盛った豚肉を「人間の子供の生贄です。」と言って食べさせてきたわけなの。もう2カ月近くの間、毒を盛っていたんだけど、なかなか死ななくてね。私達が盛った毒は効果あったかしら？」
　人間の子供と騙されて、ブタを食べさせられて共食いさせられ、毒を盛られるとは・・・。
　あいつ相当なバカだったらしい。
　しかし、なるほど、僕があの黒豚の魔族相手に善戦できたのは、その毒のお陰かもしれない。結局はキリ―が倒したけど・・。
　さすがにあの情けない戦いぶりで、四天王の一角を名乗れやしないだろう。
　あれ、でも・・・、あの黒豚が馬鹿な真似をしなければ、僕に余裕で勝っていたような気もするけど・・・。

それはきっと、僕が弱すぎるのか、あの黒豚が馬鹿すぎるかのどちらかだろう。
僕はそんな事を考えているうちに大あくびをだした。もう限界だ。
「おばちゃん、僕、一泊するね。」
僕がおばちゃんにそう言って、適当な部屋に入ろうとした・・が、ルシファーに襟首を掴まれた。
「ワタル、もう太陽が十分に登っているぞ。こんな時間になっても寝るなんて、グータラがする事だ。時間は待ってくれやしない。世界平和のため、俺が天界に戻るため、時間を一刻も無駄にはできない！」
ルシファーが熱血に、なにやら自分勝手な事も言っている。
「あの、僕、一睡もしていないんだけど・・。ほら、キリーも寝ているし、今日はここで・・・。」
すると僕達の後ろで足音がした。振り返ってみると、寝ていたはずのキリーの姿があった。
「問題無い・・・。私は先ほどもベッドの上で寝て、ここの村に辿り着くまでも眠りながら歩いたから大丈夫だ。」
「キリー！この村まで歩くのに、君はとんでもない方向に歩いてゆくから、おかしいなとは思った。どうして、そんな眠りながら歩いていたなんて器用なまねをするんだ。おかげで僕は村に向かうのに苦労したんだぞ！」
僕は悲痛な叫び声を上げた。
「・・・というわけで、次の町を目指して出発だな！」
ルシファーが僕の襟首をつかみながら言った。
「僕ってば、一睡もしていないのに、出かけないといけないの！ルシファーの鬼！」
僕は目を赤くしながら言った。
「さぁ、出発！」
ルシファーが僕を引きずりながら歩き出し、キリーが後ろをついてくる。

僕は仲間に振り回される星の元に生まれたらしかった・・・。

無事に四天王の一角を倒したワタル達。
彼らを待ち構える試練とは？
聖剣とはいったい、どこにあるのか？
勇者ワタルについてくるキリーの目的とは一体何か？
万乱？盛、奇奇怪怪。
勇者ワタルの冒険はいかに！？

第１３話　狩りの鉄則

勇者の御一行様は次の国を目指して歩く。目的地である「商業国；マッカ―国」は、南の港町へ行き、船に乗る必要がある。飛行機も、モーターボートも、車も、自転車も、三輪車もないこの世界、瞬間移動の魔法を使えない以上、地道に歩くしか手段がないのだ。

「も、……もう、だめ……」

この世界で、最も有力な移動手段である二本足も本人に体力がなければあてにならない。現代っ子で、もやしっ子な僕には、体が万全の状態でも大変だというのに、昨日から一睡もしないで歩き通せば無理もでるのである。

僕らはスタッカート村を出発し、次の目的地の「トンノ・ロッソ王国」を目指している。トンノ・ロッソ王国まで続く母なる大地こそが、僕の目の前に立ちふさがる大きな壁だった。

歩いても、歩いても、終わりが見えず。歩いても、歩いても空の色だけが変わって行くような気がする。僕は同じ草原をグルグル歩かされているかと錯覚するが、ようく目を凝らせば見つけられる風景の違いにより、僕らが徐々に進んでいる事が分かる。

「はぁ、……もう無理！」

僕が草原の上に倒れ込む。首に草がチクチク刺さるが、そんな事も気にならない程だ。

ルシファーが面倒くさそうに僕を見降ろす。

「おい、ワタル。ここで野宿するつもりか？　次の国まであと少しだぞ」

「んもう…。あの村で少し寝させてくれれば……Ｚｚｚ」

僕はいびきをかく。異世界から召喚された勇者にだって、労働基準法が適用されないといけないと思う。こんなの人権侵害と過剰労働だ。危険手当だって絶対に適応されるはずだ。

「はぁ、仕方ないな。ここで野宿するか。キリ―、お前はいいか？」

「……問題無い」
キリーは無表情のまま同意した。
ルシファーとキリーも、三人で頭をつき合わせ、ミツバのクローバーのようにして寝っ転がる。空から見ると、よくありがちな絵になるが、ハンサムと美少女と死にかけのもやしっ子ではなんかビミョーな絵になりそうだ。
そんなの誰も見ていないのではないかと思うが、実はそうでは無い。

光あふれる真っ白な世界。上は完璧にまで澄んだ青空で覆われている。
足元を覆うのは真っ白い雲。そして、とある場所には蒼空を映して、蒼い湖がある。
その蒼い湖のそばには一人の人間、いや、天使が座っていた。
そう、ここはルシファーが堕とされる前にいた世界、つまり天界である。
湖のそばに座っている天使は呟いた。
「ルシファー、本当に旅は順調なのか？」
ルシファーの双子の弟にして、天使副長のミカエルである。彼は寝っ転がっている3人を見つめていた。
彼は天界の湖から下界を見下ろしているのかと思いきや、彼は自分の手元にある水晶玉を覗きこんでいた。
実は、天国もまた一つの異世界であり、雲の下を行けばルシファーがいる「ファンタジア」に行ける訳ではない。キリスト教一派はファンタジア以外にもさまざまな異世界にまで勢力を広げているのだ。ちなみに、今さらだが「ファンタジア」とはワタル達が旅をしている世界である。本当に今さらだが……。
ミカエルはため息をついて、水晶玉の映像を消した。

「こりゃ、ルシファーが帰ってくるのに時間がかかりそうだなぁ」
ミカエルはこうみえても兄の事を気遣っている。兄が「あれ食いたい」と言えば、彼はそれを作ってやり、「仕事サボりたい」「女をだきたい」と言えば、あれこれ世話をやいている。もしかしたら、ルシファーの駄目っぷりには、ミカエルにもその責任の一端があるのかもしれない。ひょっとすると、神がブラコンなミカエルからルシファーを引き離すために、彼をファンタジアに送ったのかもしれない。
ちなみに天使の役目は神からの遣いとして、人間達に干渉することである。そのほとんどは人間の観察である。
ワタルはファンタジアで言葉が通じる事に驚いていたが、それには訳が在る。人間が発する意思は天界を経由し、翻訳されてから他人に送られる。天使たちが人間の観察をしやすいように、天界で翻訳される時に天使達が人間達の意思を読み取っているのだ。簡単に言うと、通訳と盗聴を同時にこなしているのだ。地球ではそれができないのは、他の神々の一派達がけん制し合っているため、干渉できないのだ。
天界の都合で言葉が通じあい、常に天界に話が筒抜けなのをワタルは知らない。知っていたとしても、どうしようも無いが……。
もちろん、天使たちも一つの世界に取り掛かれるほど暇では無く、ほんのわずかの会話しか盗聴しないけど……。

ファンタジアのとある草原では三人は深く眠っていた。彼らには見張りという概念は存在していないようだったが、運良く魔物には襲われなかった。しかし……、
「く、首が痛い。ケツも足も痺れてる……。」
僕は堅い地面で寝たため、体中のあちこちが痛む。おまけに、ギ

ュルギュルっと、この世にあるとは思えないほどの腹の音が鳴り響く。僕は一昨日の朝から何も食べず、ずっとお腹が鳴り続けている。美しい朝日を眺めるが、それを美しいと思うわびさびの心を持つ余裕は僕に存在しない。

僕が起きて暫くしても、ルシファーとキリ―は寝ているので、僕はうさぎか何かを狩ろうと思った。

「さてと、王家の猟銃の出番かな？　フフフ、我が銃は血に飢えている……、って、僕にはそんなセリフ似合わないなぁ……」

飢えているのは、銃ではなく僕の胃である。このままでは萎んで、しぼんで消えてしまうのではないかと思うほどである。もやしっ子と言えど、食べなくては死んでしまう。霞を食べて生きるなんて器用なまねはできないのである。

僕は眠る二人を放置し、王家の猟銃を脇に構える。ここまでお世話になった王家の猟銃がその真価を発揮する時がきたのだ。元々は猟銃だし……。

草原からちょっと歩けば、林があるのでそこに向かう。

狩りの鉄則その一

林に入った僕は、まず地面に目を凝らす。動物の足跡など、生活の痕跡を探しだし、巣穴などを見つけるのが狩りの鉄則だ。

僕は、用心深く地面を睨みつける。

「……よく分からない……」

たかだか中学二年生にうさぎの足跡を見つけられる訳が無い。ラッキーパンチを狙うしかないのだ。

狩りの鉄則その二

不用心に音を立てない事。動物達は人間よりも遥かに耳が良く、こちらが音を立てて近づけば逃げるに決まっている。そうして、獲物を見つけられずに終わってしまう。

僕は一歩一歩を丁寧に、静かに歩む。

そう、そっと、そっと……

「グギュルルル！！」

僕のお腹が盛大に鳴り響く。
……僕のお腹の裏切り者……。
狩りの鉄則その三
狩りは、空腹で次の狩りに支障が出る前に行う事。僕はもう遅いが……。
僕はやけっぱちになって、ギラギラした目で獲物を探す。
ウサギを探すも、全く見つからない。
「はぁ、何でもいいから出てこい！」
空腹は人を短気にさせる。僕はギュルルと鳴るお腹を押さえて叫んだ。
「ギャオオォォ！！」
するとお約束なのか、僕の後ろから二メートルを超えるクマが現れた。
「ヒッ！！」
現れたのは魔物のクマで、名前は「テディベア」。かわいい名前とは裏腹に、一流の猟師として名をはせた「テディさん」が油断した所を襲い、殺した事から名前を付けられた。以前に僕が遭遇して、追われた事のある種だ。
そいつを見た時、僕は一瞬怯えたが、今の僕は以前の僕ではない。スライムを殺し、ゴブリンを蹴散らし、自称四天王の一角の黒豚さんと激戦を繰り広げたのだ。
僕は必死の形相で王家の猟銃をクマに向ける。
しかし、クマに至近距離まで接近されたため、銃をクマの大きな鉤爪に弾き飛ばされた。
あっけなく飛ばされる銃を諦め、僕は走りながら剣をクマに投げつけた。僕の剣術ではクマにやられてしまうだろうという考えだ。
剣は鋭くクマの首元に飛んでいき……、クマの牙にガチリと挟まれた。
「魚飛（ギョヒ）〜！！」
背を向けて走り続ける僕を追って、クマは剣を加えたまま四足で

走る。
「勇者さん、お待ちなさい。ちょっと、落し物。白い刃渡りの、手軽な片手剣〜」
もちろん、そんな事をクマは言わずに、僕に襲いかかってくる。
僕は走りつつ、魔法のタクトを腰から引き抜き、三拍子で振る。
全ての生命の源よ　乾きし大地を潤すもの　我、水の精霊に祈り
邪から守る盾となれ！
「水精霊の盾（タッチ・デ・ポン・レミア）」
僕は水の守りの魔法を、慌てていたために、間違えてクマにかけてしまったようだ。タクトの先が蒼く光、次の瞬間に水の玉がクマを包み込んだ。
クマは驚いてもがくも、水の玉の中心に浮いているため、足が地面に届かない。
そこでクマは泳ぎに出た。しかし、前に泳いでも、泳いでも、水の玉もクマの動きに合わせて動くため、クマは水から逃れる事ができない。クマは泳いで僕に近づいて来るが、クマの泳ぎよりも僕の全力疾走の方が少し速かった。クマの泳ぎの速さに、僕は怯えながら走ったのだが……。
数分後、クマはようやく溺れ死に、僕は荒い息を整える事が出来た。
「ひょっとして、これは守りの魔法ではなく、僕の使える最強の魔法なのかなぁ」
黒豚さん相手にこれを使えば良かったかもしれないと、僕は改めて思う。
僕は水の玉の中で溺死したクマを見つめる。
「こんな大物、どうやって運ぼうか？」
僕は自分勝手な二人の仲間をあてにする事はできない。

僕は水精霊の盾を維持し、水の玉を移動させた。結構便利だが、途中で集中力が尽きてしまい、結局引きずる事になった。
ようやくルシファー達の所に戻れた僕は、クマを食べる準備をする。
二人はぐっすり眠っていたが、僕が薪を集め終わった所で目を覚ました。
「おぉ、ワタル。お前がこんな大物を仕留めてくるとはやるなぁ。俺も腹が減った所だ。」
「……上々」
三人で調理する事になった。と言っても、調理器具が無い以上、ただ焼くだけになってしまうが。
クマを切り分ける時に、少し困った事になった。僕の持つナイフではとてもじゃないが、切り分けるのが大変だ。獅子王師匠(ライオン)からもらった剣も、戦いとクマに噛まれた事でボロボロになっている。
「……私が切り分けよう」
キリーが二本のバスターソードを引き抜き、高らかに構える。キリーが剣を目にも止まらない速さで振りおろすも、クマの手前でピタッと止めた。重たい剣を寸止めするのは難しいが、なんでそんな事をするのか僕には分からなかった。
「どうしたの？　キリー」
「……私の剣はバジリスクの牙で出来ていて、斬った物に猛毒を与える。クマを切ったら、毒で食えなくなる……」
僕とルシファーはズッコケそうになる。キリーの所為で命を落としかけたのは何度目だろうか？　所でキリー、そんな危ない物を初対面の僕に突きつけたのか。
僕達は再び考え込んだ。クマを食べるにはどうしたら良いのか？
「そうだ、俺にはこれがある！」
ルシファーが何かを思いついたようで、彼は立ちあがった。

ルシファーが両手をパンッと叩くと、両手の間から金色の光が溢れた。
「ま、まぶしっ！！」
光が治まると、ルシファーの手には神々しく輝く金色の剣が握られていた。
「どうだ、カッコいいだろう？」
ルシファーが自慢げに剣をブンブン振るう。
「ルシファー、その剣を魔法で作ったの？」
僕は興味津津で尋ねた。
「あぁ、これはなぁ。ミカエルの奴からパクッてきた剣だ」
ルシファーが子供みたいな顔で笑う。
「えっと、それっていいのかなぁ？　まぁ、仕方無いか、今すぐ返せないだろうし」
僕は微妙な顔をする。僕だって、曖昧にだが神話についてしっている。大天使ミカエルから剣を盗み、クマを切り分ける為に使う事を許されるのか疑問に思うも、空腹の方が目先の問題だ。僕が探し求めている聖剣よりも格が高そうな剣でルシファーがクマを切り分けるのを黙って眺める。
僕はありがたい剣で料理されたクマの肉を、ありがたく頂戴する。塩すら無く、ただ焼いただけの肉だったが、飢えに勝るスパイスは無いのだ。

カーン、カーン、カカーン、カーン。
天界のとある鍛冶家から金属を鍛える音が響く。炉ではミカエルが鬼の形相で、金槌を振りおろしている。
「全く（カーン）、ルシファーめ（カーン）。人の剣を（カーン）、盗むとは（コーン）」

ミカエルが兄のルシファーに振り回されるのはこれで何回目だろうか。腹が立つにも程がある。
「これでは（カーン）、部下の前にも（コーン）、出られんではないか（カーン）。私の剣を（カーン）、よりによって（コーン）、包丁代わりにするとは（カーン）」
剣を失くしたなんて、天使副長の沽券に関わるので、こっそり代わりの剣を用意しないといけない。
「全く、兄さん！　少しは大人しくしていてくれ！」
ミカエルの苦労はまだまだ続きそうです。

間幕　魔王は闇で笑う、だコロン

翡翠のような色をした壮大な草原が風にざわざわとゆれる。空で止まっているかのように浮かぶ白い雲も、じっと目を凝らせば風に流れてゆくのが見え、時々眩しい程に輝く太陽が隠れたり、覗いたりする。

その草原に囲まれるように巨大な街が広がる。街路は石畳が敷き詰められ、建物はレンガが組み合わされていれ、色とりどりの屋根から伸びる煙突から、のんびりと薄い煙がちらほら覗いている。

タコ；街で一番の早起きさんは　タコのパン屋さん♪

（とあるパン屋のウィンドウの中で、大きなタコが八本中六本の腕でパンを一気にこねるパフォーマンスをしている。）

犬の子供たち；今日も楽しい　学校行こう！　友達沢山だ～♪

（三人の犬の顔を持った子供達が鞄を手に持って、くるくる踊るようにして学校へ向かうっている。）

黒ヤギ；駄目だ　止まらない　手紙食べるの！　手紙　運ぶ！　私の役目なのに！♪

（黒い山羊の頭を持ったおじさんは、ポストの前でむしゃむしゃ手紙を食べながら嘆く）

牛男；奥さん！　奥さん！　またたびはいかが？　今夜！　旦那と！　燃え上がる夜♪

猫の女性；あらら　嫌だわ　恥ずかしいわ～。お口　お上手　その気になっちゃう♪

（二本足で立ち、牛の頭と牛の体を持った男が、三角耳としっぽを覗かせ、猫の顔を持つ女性に香水を勧めている。）

街のみんな；今日も平和だ　楽しい一日が始まる～♪

（街の住人が踊っている）

（シーンが城の玉座の間に移る）

兵士たち；この国で一番偉い　魔王陛下　おな～り～♪

（兵士たちは胸に手を上げ、膝をついて歌う。）

（身長は三メートル近くで、神々しく輝く黄金の甲冑で身を包んだライオンの顔を持つ魔族が、玉座に悠然と歩いて向かう。歩くたびに、黄金色のたてがみが揺れる）

ライオンの魔族；陛下、お姿！　ご拝見できて～　部下は、とても！　名誉で歓喜♪

（ライオンの魔族が玉座の隣に立つ。ライオンの魔族の背が大きすぎて気が着かなかったが、身長１５０ｃｍ位で、黒い仮面とマントを身に付けた少年が玉座によじ登る。少年が小さいわけではなく、城の全てが大きすぎるようだ）

魔王陛下；皆の、衆よ！　出迎え御苦労～　今日も、一日！　仕事に励め～♪

部下全員；陛下　嬉しき　ありがたき御言葉～　今日も尽くさせて下さい　貴方様の元で～♪

そう、読者の方もお気づきのように、ここは魔族たちが住む国。『キャロット平原』の中央に位置する、『アンダーギー国』である。

アンダーギー国は、巨大な街に囲まれて、天高くそびえ立つ、巨大な城が鎮座している。その城は『モン・ブラン城』と呼ばれ、魔王はここを拠点にしている。

金色の甲冑を身に付けたライオンの魔族は魔王の右腕が務まるほどの力を持ち、黒づくめの魔王を常に護衛している。二人と初対面の人であれば、ライオンの魔族を魔王と勘違いしてしまいそうである。

黒い仮面をかぶった魔王は、見た目だけは人間の少年のようであるが、その正体はごく一部の者しかしらない。

巨大な城と城下町から成り立つ、このアンダーギー国、実は歴史が３６年と浅い。魔王が現れたのも、実にたったの５年前だ。何から何まで、他国にとっては謎につつまれた国である。

魔族はあらゆる獣の姿を持った、人間みたいな姿をしている。ワタルと戦った黒豚さんも同じだ。

大きすぎる玉座で足をブラブラさせている魔王陛下にフクロウの魔族が近づいてきた。

彼は魔王陛下に向かって膝をつき、頭を下げる。

「魔王陛下、ご報告したい案件が五つ程あります」

「ふむ、報告せよ、アウル宰相よ」

魔王が頷いて、報告を促す。

「は、では申し上げます。一つ目は新たな用水路の建設の予算の目途が立ちました。二つ目は、手に職を持てなかった者達に、救済処置として与えた仕事が順調です。魔導書、学術書の写本を書かせま

したが、それなりの出来具合でございます。」
「ふむ」
アウル宰相の報告に魔王陛下は頷く。
アウル宰相は苦い顔をして報告を続ける。
「三つ目に、魔王陛下には誠に申し上げ難いのですが、古代遺跡に眠る時空間魔法の解析は滞っているようです。」
「うむ、仕方あるまい。我も簡単に事が運ぶとは思っていない。根気良く続けるしかあるまい。優秀な研究班ならば時間の問題であろう」
「はっ、ありがたき幸せ。研究班も陛下の御言葉を励みに努力するでしょう。」
彼はさらに深く頭を下げた。
「四つ目の報告ですが、バーサーカー将軍の消息が依然と不明のままでございます。」
「ふーむ、あの者が我らを裏切るはずが無いと信じておる。きっと、任務に手こずっておるのだろう。あの者の人格と実力を信じておれば良い」
かしずくアウル宰相は「はっ」と返事をし、最も重要な案件について魔王陛下に報告する。
「五つ目の報告ですが、四天王の一角である知将が人間に殺されたそうです」
「なんだと！　あいつの事はどうでもいいが、あいつを倒すほどの人間がいるのか！？」
ライオンの魔族が驚き声を上げる。
「レオン将軍、落ち着け」
魔王が偉そうに、玉座の手もたれに肘を立て、頭を手で支えている。玉座が大きいために肘かけが高く、傍から見ると、彼の腕と首が痛いたしい。足も床に着かない所為で、長時間座る時はエコノミー症候群に気を付けなければならないようだ。
「あいつは勝手な行動が目立ちすぎた。人間に殺されなければ、い

ずれ始末していた存在だ。その点ではその人間に感謝する事にしよう」
魔王は頭を支えていた腕を下ろした。格好をつけるのは良いが、腕が存外にしびれたらしい。
「しかし、その人間については十分に調べる必要がある。アウル宰相よ、その人間について調べよ」
「はっ、かしこまりました」
アウル宰相は頭を下げて退出した。扉が閉まるやいなや、レオン将軍が魔王陛下に話しかけた。
「魔王様、知将を倒した人間についてどうお考えですか？」
魔王は思案げに自分の顎をなでる。一番やり安い格好の付け方のようだ。
「ふむ、興味深いな。できれば殺さずに会ってみたいものだ。」
魔王は顎をなでる手を止めた。
「所で、レオン将軍」
「はっ、何でしょうか魔王陛下」
魔王は何かを思い出すような顔をしながら、彼に問いかけた。
「知将はどんな名前だったかな？　黒豚って事しか覚えていないのだが……」
彼も頭をひねって考える。
「なんでしたっけ？　通り名が『暗黒のコットン』だったような、違うような？」
「もう、あいつなんて『恥将』とか、『畜生』とかで良いんじゃねぇ？」
魔王が笑いながら言い、レオン将軍は苦笑する。
「なら、『きちしょう』とかはどうでしょう？」
「「……クックック、フッハッハッハ、ワーッハッハッハ！！」」
魔王とレオン将軍は互いに目を見合わせ、こらえきれずに大きな声で笑い出す。
あの世で黒豚さんは「ちきしょう！！」と叫んでいる事だろう。

嫌われ者は裏で笑われるものだ。

間幕　魔王は闇で笑う、だコロン（後書き）

「よう、心の相性よりも体の相性を大事にするルシファー様だ。まぁ、ここで第一幕は終わりって所だろうな。実際にこの小説を章分するかどうだか疑問ではあるが。実際どうよ。美男子で完全無欠な俺様をさしおいて、トオルの奴が主人公ってマジありえなくねぇ。俺が主人公でよくねぇ、って思う訳よ。さぁって、次回予告は……って、なんだよ作者。はぁ？　何プラカード持っているんだよ。何なに、まだ次話はできていない？　次回予告すんな！？　俺様に指図すんな！　次回予告をしときゃぁ、それが次話になんだよ！　と言う訳で次回予告だ！　港町だよ！　港町と言えばあれだ、ポロリしかねぇだろう！？　何！？　そんなの無茶だぁ？　無茶だと思う奴は、テメェの目ん玉でもポロリしとけ！」

第１４話　港の王国　トンノ・ロッソ

「ふぁ～、ようやく着いた」
僕は大きくあくびをした。ここまでの道のりはとても長かった。もうすでに夕日が沈みかけている。
トンノ・ロッソ王国は大きな港を持ち、レンガ造りの町には常に潮風の匂いが漂ってくる。漁業や貿易が盛んで、街は活気に溢れている……はずなんだけど……。
「なんだか、しけた街だなぁ」
ルシファーが眉をひそめてはっきりと言う。
そう、夕日が沈みかけているとは言え、人が見当たらず、閑古鳥が鳴いている状態だ。
「う～ん、どうしたんだろう？」
僕も首をかしげる。
「……道に迷って戻れないのでは……」
「「それはお前だけだ！！」」
僕とルシファーは同時にツッコム。キリーの迷子は僕らの中で悪夢になっている。
「まぁ、どうしてかは分からないけど……、とりあいず、冒険者ギルドで依頼の成功を報告しようか。その時に何か分かるかもしれないし」
僕は少し悩んでから決めた。
冒険者ギルドは互いに連携し合い、常に魔法で連絡を取り合っている。多少は手数料として依頼料から差し引かれるが、他のギルドでも報酬を受け取る事ができるのだ。
「そうだな、何よりもまずは行動だ。女を口説く時も、細かいプランを練るよりも、まずは声をかける事が大事だしな。」
「……行動する事が大事なのは認めるけど、なんでもかんでもナンパを基準にしないで欲しいな」

僕はあきれつつも、冒険者ギルドを探す。
僕が辺りを見渡すと、よぼよぼの老人が杖をついて歩いていた。
「すみません、冒険者ギルドはどちらでしょうか？」
しかし、老人は僕の呼びかけに気がつかないようで、そのまま素通りしようとする。
僕は老人に近づいて、先ほどよりも大きな声で問いかけた。
「すみません、冒険者ギルドはどちらでしょうか？」
しかし、老人の耳には効果がいまひとつのようだ。
僕は少しだけイラッとして、老人の耳に怒鳴るように声をかけた。
「す・い・ま・せ・ん！！　冒険者ギルドはどちらでしょうか！！」
「やかましいわ！！」
「兎屁（うへ）ッ！」
老人はくわっと目を見開き、僕の耳を引っ張って、大声で怒鳴りこんだ。僕の耳に痛恨の一撃だ。
僕は思わず耳を押さえた。耳鳴りがなかなか治まらない。
「全く、人に怒鳴るなんて最近の若者は礼儀を知らん。全く、嫌な世の中になったものじゃ。どうして、最近の若者は年寄りを敬おうとせんのか。わしらが若い頃では考えられんことじゃ、嘆かわしい。だいたい最近の若者は怠け者で、大の大人になっても親に面倒を見てもらうなんぞありえ話じゃ。二十も過ぎれば、親の面倒を見始めるものじゃろうに。くど
…………………………………………………………………………………
……………………」
老人の「最近の若者は」と始まるお説教攻撃！　勇者の精神力をガンガンと削って行く。
「ぼそぼそ（うざいな、ただ道を尋ねただけなのに）」
僕はお説教が続く中、思わず愚痴をかすれるような小声で呟いた。
「なんじゃと！！　うざいだと！！　それが説教を受ける者の態度か！？　冒険者ギルドへの道を尋ねたかったのであれば、もっと礼

儀正しく聞かんか！！」
老人が鬼の形相で怒る。
「き、聞こえているくせに。どうして耳の悪い振りをするんだよ」
僕だって腹が立ってくる。こんな老人を敬いたくは無い。
「いーや、さっきは聞こえんかったわ」
老人は偉そうに答える。
「いや、だって、さっき冒険者ギルドへの道を尋ねているって理解していたよ」
「ふん、初めお前さんは何て声をかけたか？」
「『冒険者ギルドはどちらでしょうか』と尋ねましたよ」
「わしが聞こえなかったのはその前じゃ」
老人は威張り、僕もさらに腹を立てる。
「『すいません、冒険者ギルドはどちらでしょうか』と、確かに尋ねました」
「馬鹿者！　わしが聞こえなかったのはさらにその前じゃ！！」
「えっと……」
僕は頭にハテナマークを浮かべる。その前は何も訊ねていないはずだが……。
「『こんにちは、素敵な御紳士様。大変申し訳ないのですが、どうか私の頼みを聞き受けてはいただけないでしょうか。』という言葉が聞こえなかったんじゃがなぁ」
「そんな事言ってねぇし、言う訳無いだろう！！」
海より広い僕の心も、ここらが我慢の限界だ！！　ぶん殴りたい！！
ルシファーは僕の様子を面白がって見物しているだけだが、どうやらキリーは僕と老人のやりとりに見るに見かねたようだ。
「……冒険者ギルドは？」
「あっちじゃ」
キリーの問いに老人はあっさり答えた。
老人はキリーの顔を見て、だらしなく鼻の下を伸ばしている。

「この通りにそって行くんじゃよ、御嬢さん」
「……」
僕は怒りのあまり、何も言えなくなった。何か話そうとすれば爆発しそうだ。これ以上この老人と関わりたくない。
「所で御嬢さん、わしの家でお茶でもせんかのう」
僕達はいやらしい顔の老人をがん無視して、すぐさま冒険者ギルドに向かった。
通りは緩やかなカーブを描いていて、僕達はその通りに沿って進むが……
ドゴーン！！
キリーが民家の壁を蹴り破った。
「な、何してんの、キリーさん」
僕はあわててキリーに声をかける。
「……通りを真っすぐに進んだら、目の前に壁があったから蹴り飛ばした……」
「じじーは通りに沿って進めって言ったんだよ。直進しろって言わなかったよ。人の家の壁を金輪際蹴り飛ばさないで！」
僕はキリーの手を握り、走り出した。美少女の手を引いて走るのは映画のワンシーンのようである。
「なんじゃこりゃー！！」
怒りを爆発させた雄叫びがなければ、映画のワンシーンのようだったかもしれない。
パッパラ、パッパパーン！　勇者の逃げ足スキルが上がった。勇者は「とんずら」を覚えた。
〜勇者絶賛逃走中〜
僕らは冒険者ギルドのトンノ・ロッソ国支部に逃げ込……じゃなくて、辿り着いた。大きな港を持つ国なだけあって、冒険者ギルド

もセイルーン王国よりも一回り大きい。
僕達はギルドの扉を開くと、建物の大きさとは対照的に、人が少なかった。
「全く、だらしない若者ばかりじゃ。ここはわしがなんとかせねば」
何やら息巻いている御老人が一人、優男風の青年が一人、おばちゃんが一人いるだけだった。
「なんじゃこれ、冒険者っぽい人が全然居無いじゃん……」
「誰一人居ないとは……」
唖然とする僕と、嘆くルシファー。僕は茫然としながらも、ルシファーの嘆きに聞き返した。
「ルシファー、戦士はいないけれど、一応人は居るみたいだけど？」
「ふん、俺は美女以外を人として認めねぇんだよ」
それはかなり酷い発言だよ、ルシファー。ひょっとしたら、神の言いつけで僕に付いて来ているだけで、僕の事も人として認めてないって事は無いよね？
僕はルシファーに肯定されるのが怖くて、その疑問は口にしなかった。
僕はそんな恐ろしい考えを振り払ってから、報酬を受け取るために、誰もいない受付に近寄った。
「すいません、誰かギルドの方はいらっしゃいませんか？」
「なんじゃ！」
「うわっ！」
すぐ近くで息巻いていた老人が返事をして、僕は少しビックリした。
「わしは、ここのギルド長のサルモーネじゃ」
またもや不機嫌そうな老人と会話する事になってしまった。射て座の人は老人に近づいてはいけないという占いでも出されたのかな？　万年不幸な僕は、見てもいない星座占いに難癖をつけた。
僕はギルド長におずおずと声をかけた。
「あの、スタッカート村の南にある迷いの山脈に出没する謎の魔族

を退治しました……」
ギルド長は僕とルシファーとキリーに目をやる。
「ふん、優男と少女とガキにこんな事ができるはず無いだろう。嘘もたいがいにしろ！」
ギルド長は頭ごなしに否定する。
僕がタジタジになっていると、ルシファーも参戦してきた。
「はん、盲録したジジーになにが分かるんだ。ジジーは大人しく寝ていればいいんだよ」
ルシファーが冷ややかに言う。どうやら、優男扱いされた事に腹を立てたようだ。
「なんじゃとぉ！」
ギルド長が顔を真っ赤にさせ、手をプルプル震わせている。
「あ、あのぅ……」
ギルド長もルシファーもお互いに怒りを納める気はないようだ。
僕は弱弱しく声をかけるも、二人を止める事はできなさそうだ。
僕は助けを求めるべく、キリーの姿を探した。しかし、キリーはギルドに用意されているテーブルの上で居眠りしている。こんな喧騒の中で居眠りするなんて、とんでもない程の昼寝スキルだ。
二人を止める事はできなさそうだ。老人はルシファーに殺され、僕達は逃亡しなければならなくなる。勇者のくせに逃亡ばかりなのも情けないけど……。
しかし、女神は僕らを見捨ててはいなかった。
「こら、お父さん。せっかく来てくれた冒険者の方々に失礼でしょ！」
スパン！　ギルドに居たおばちゃんがギルド長の頭を殴る。
「痛いな……、急に何をするんじゃ！」
「いつも、いつも、「若者は礼儀がなっとらん」と言ってるくせに、ちょっとは自分も礼儀作法を学んだらどうなの！？」
おばちゃんはどうやらギルド長の娘のようだった。
「本当にごめんなさいね、冒険者の方々。……アリーチェ！　冒険

者の相手をして！」
　おばちゃんは階段に向かって呼びかけた。
「はーい、ただいま！」
　どたどた足音がした後、「きゃっ！」という声と大きな音が響いた。ギルド全体が揺れたような気がした。
　しばらくすると、半ベソをかいた金髪美少女が姿を現した。ギルド長の孫でおばちゃんの娘らしいが、この血筋でどうやったら美少女が生まれるのかが、とても不思議だ・
「イタタタ……、えっと、冒険者の方。今日はどのような御用時でしょうか？」
　腰をさすりながら尋ねる彼女に、僕は心配する。
「あの、大丈夫ですか？」
「はい？　何の事でしょうか？」
　彼女は笑みを作っている。
「だから、その腰……」
「はい？　何の事でしょうか？」
　どうやら今の事を無かった事にして欲しいらしい。
　僕は意識を自分の用事の方に向けた。
「えっと、迷いの山脈の依頼の報酬を受け取りに来ました」
「分かりました。これより確認を行います。まずはギルドカードを見せて下さい。」
　僕はしぶしぶギルドカードを渡す。
「いつの間にギルドカードなんて持っているんだ」との疑問をお抱えのみなさん。僕とルシファーはセイルーン王国の冒険者ギルドでギルドカードをもらっていたのです。しかし、僕の名前と冒険者番号、そして、「レディーの見方」という恥ずかしいチーム名が書かれていれば、その存在を忘れたくて仕方ないのも御理解して下さい。
　彼女はギルドカードに書かれたチーム名を見て噴いた後、別の部屋に入った。すると、何やら物凄い物音や、「きゃっ」という叫び声が聞こえて来たり、剣と剣がぶつかり合うような音が聞こえてく

る。
しばらくすると、彼女は水晶玉を持って受付に来た。
彼女は乱れた髪を整えながら、説明を始める。
「この水晶玉は触れた方の記憶を映しだす事のできる魔道具です。こちらに手を触れて頂き、依頼達成の確認と魔物についてのデータを取らせて頂きます」
「へぇ、凄い魔法だね」
「えぇ、昔は魔道士ギルドでしたから」
僕は感心する。確かに、これでデータを集めれば、魔物の対策とかに困らないかもしれない。
「でもさ、これで人の記憶を覗いたりとかって、できちゃうの？」
彼女は首を振る。
「いえ、これは触れた方が思い浮かべた記憶を映しだすだけです。触れた方が拒否すれば、記憶を映しだす事もできないですよ。おまけに、経験していない事を想像しても、それを映しだす事はできません」
どうやら、プライバシーは守られ、虚偽の報告もできないようだ。
「では、どちら様がご報告をなされますか？」
「あ、じゃぁ、僕が」
僕は黒豚の魔族と戦った時の事を思い浮かべて、水晶玉に触れた。
僕は黒豚と戦い、逆転して、逆転され……、最後に黒豚がキリーに踏みつぶされる所が水晶玉に映し出された。
「……」
ギルド長とおばちゃんは驚いて黙りこむ。
「……」
アリーチェも黙りこむ。
「……」
さすがのルシファーも目を丸くしている。
「Ｚｚｚ……」
当事者のキリーは眠り続けている。

祖父、子、孫の三人は眠るキリーを見つめる。
「……とても、お強いんですね……」
なんとなく、話をするような雰囲気ではなくなってしまった。

港の国、トンノ・ロッソ国に辿り着いた勇者御一行。この国を脅かす影はいかに！？
万丈波乱、奇奇怪怪。わたる達を襲いかかる敵は？

第１４話　港の王国　トンノ・ロッソ（後書き）

わたる；「やぁ、贅沢な外食と言えば、サイゼリアが思い浮かんじゃう亘（わたる）です。しかし、前回のルシファーの会話は酷かったよね。この「最弱勇者とチートな勇者の御一行様」の主人公の僕の名前を間違えるなんて……。「偉大なる賢者」の主人公の名前と間違えて欲しくないよ。全く、読者の方はとっくに気づいていたよね？」

読者；「……」

わたる；「……あれれぇ？　読者の方の三点リーダーが多すぎるなぁ、なんて。……ひょっとして、気づいてもらえなかった？　な、な訳無いよね？……さてと、今日はここまで、さよなら～」

（泣きながら走り去る）

第１５話　魔物が来りて家壊す

嫌な態度のギルド長、サルモーネが、胸糞悪いじじーがキリーに土下座をする。

その娘のおばちゃんも、キリーの前に美味しそうな料理を並べる。

さらにその娘のアリーチェも、キリーに涙を流して懇願する。

「お願いします。どうかこの国を御救い下さい！」

「……」

美少女のお願いにキリーは沈黙を守り続ける。

「どうか、この国を救って下され！」

「……」

僕達をこけにした老人が額を頭にすり付けも、それでもキリーは沈黙を守る。

「どうか、これで手を打ってくれないかねぇ。私からもお願いするよ！」

「……」

おばちゃんは、牛のステーキ、ブリのステーキ、キャビアのステーキを並べるも、キリーは鼻をピクピクさせるが、それでもかたくなに沈黙を守り続ける。どうやら、三人の中で一番効果があるようだが、あと一歩足りない。

「キリー……」

僕は困ったように眉を曲げ、彼女の名を呟く。

「バクバク、もぐもぐ、むしゃむしゃ、がつがつ、ズルズル、ふーふー、シャキシャキ、ちゅるちゅる、ズーズー、ばきばき、バシュバシュ、ギコギコ、ドキューンドキューン」

ルシファーは、おばちゃんがキリーに運んで来た料理を、次から次へと胃袋に収めていく。読者に不快な思いを強要してしまうだろう。食事の様子を描写するのは、テーブルマナーを大いに逸脱しているので割愛させてもらう。

「……」
キリーは一生懸命に頼み込まれるも、相も変わらず沈黙を守っている。
「どうか……、どうかお願いします」
アリーチェの涙がぽとぽと床にこぼれる。そんな彼女達に対して、キリーは……、
「……Ｚｚｚ」
まだテーブルの上で居眠りをしていた。
「すまんが、わしらの話を聞いてはくれないかね」
ギルド長がキリーの肩に触れようとした。次の瞬間、キリーの手が動いた。巨大なバスターソードが目に見に留らぬ程の早さで抜かれ、剣が閃光となって空中に軌跡を描く。
「うわぁ！！」
ギルド長が後ろに尻もちをついて、危うく剣を避ける事ができた。キリーの剣もいつの間にか鞘に収まっている。寝っころがったまま剣を抜き、振って、鞘に納めるなんて神業をどうやって行っているかは分からないが、それを遥かに超える程すごい事は……
「Ｚｚｚ……」
「……寝ているんだ、キリー……」
僕はぽつりと呟いた。
そう、一連の動作をキリーは眠ったまま行ったのだ。どこのドイツの欧州の殺し屋か、はた又はセイントかと叫びたくなってしまう。
「ははは……」
僕はごまかすように笑い、キリーと頼み込む三人を眺めた。三人は隠れてしまったアマテラスを外に出すかのように、キリーの気を引こうとしている。腹を立てたアマテラスの方が、虫けらを相手するように、完全完璧に興味無いキリーよりマシかもしれない。
キリーに頼み込む三人の様子を見ると、とてつもなく面倒でやっかいな頼みごとだと思われる。頼み事を引き受けるか、ここは逃げようか、僕は本気で迷う。キリーとルシファーはどんな敵が相手で

もどこ吹く風だが、僕にとっては死活問題だ。ちなみに、ルシファーはどこ吹く風と言うような顔をして、食後のデザートに手を付けていた。
僕は真剣に悩んだ。
この場から逃げ出すべきか、色々と言い訳をつけてこの場を去るか。
前者は彼らに嫌な思いをさせ、後者は彼らに嫌な顔をさせるだろう。
例え他人を見捨てても、……それでも、僕には、守りたいものがある！
もちろん、自分の命だ。誰だって我が身がかわいいはず。生存欲求は生物の根本にあるものだ。
「すみません、彼女は疲れているようなので、日を改めて伺います。それで、えっと、その、…失礼します」
僕はキリーを起こそうとして、寝ぼけた彼女に危うく剣で切られそうになる。ルシファーに彼女を起こしてもらおうとするも、デザート中の彼に振り払われて転ぶ。
アリーチェはそんな僕を見て、今度は僕にすがりついてくる。
「すみません、屈強なる戦士の従者様。どうか、どうか、この国を助けていただけるように御説得して下さい」
乙女の涙の攻撃！　デルデルデン（効果音）　勇者は良心に縛られてしまった。
勇者はとんずらをしようとした。
しかし、勇者は動けなかった。
「いや、…その、…僕は……」
「それは、つい半月前の事です……」
乙女は勇者を無視して語り出した。
勇者は良心に縛られて動けない！
「以前のこの国は、各国との貿易の窓口となって、世界最大の貿易国として賑わっていました。みんな、みんなとても幸せでした。あの日までは……」

乙女は語り続けている。
勇者は逃げ出した。
しかし、勇者は良心に縛られて動けなかった！
「半月前に、突然港の近くの海に巨大な魔物が現れたのです。その魔物は、私達の船も、他国からの船も全て飲み込み、多くの人が犠牲になりました。もう、私達の国では、貿易どころか、魚一匹も手に入りません。沢山の冒険者が挑み、帰り打ちに会いました。いくら歴戦の戦士達も、船の上からでは矢を放つしか方法はありません。しかし、矢は海の表面までしか届きません。魔物は簡単に船を沈めてしまうのです。このままでは、この国はお終いです」
彼女は顔を覆った両手の隙間から涙が流れている。関係はないが、ドラ●エでは海のモンスターとどうやって戦っているのやら。普通に剣や拳が届くのだから、ゲーム内の海のモンスターは丁寧に甲板まで上がって来てくれるようだ。船艇に穴を開けて沈没させれば勇者パーティーを全滅させられるのに……。上手く助かっても、新たに船を手にいれるのは大変そうだ。そう、現実はゲームと違って厳しいのだ。死にたくなければ、なんとしても断らなければならない。
「いや、その、僕は……」
勇者は言い訳を唱えた。
しかし、勇者は良心に縛られて動けなかった！
「お願いします、どうかこの国を救って下さるように御説得して下さい」
勇者は命の危機を感じた。
勇者は良心の縛りをふりほどいた。
「すみません。申し訳ないですが、海の魔物はたいして魔法の使えない僕らには荷が重いようです。遠距離の風・雷の魔法や、空を飛ぶ魔法がない……と……」
僕は言葉を濁らせ、キリーとルシファーに目をやる。
ルシファーは神に使えている天使、もしくは堕天使。ついこの前は光の翼で飛んでドラゴンを追いかけた。

キリーはこの前、天空の城に住む悪竜を倒した。その時に手に入れた力で宇宙へ飛んで行った。
たしかに、ルシファーとキリーならば海の魔物を倒せるだろう。しかし、僕が生き残れるかは分からない。ルシファーは自分が戦って、僕だけ戦わずに待っている事を許さないだろうし、キリーに一人だけで行かせても迷子になるだけだ。二人に戦わせる事は、必然的に僕も死地におもむく事になる。正直に言って戦いたくない。
僕が言い訳を考えていると、どたどた足音が近づいてきた。
「サルモーネさん！　大変だ！」
玄関のドアが大きな音を立てて開かれ、一人の中年男性が入って来た。漁師でもしているのか、中年になっても体はがっしりしている。地球の現代人の中年男性女性が見れば、羨ましがるだろう。男性は自分の体と、女性は旦那の体と絶対に見比べる。
「どうしたんじゃ、ガッビアーノ」
どうやら、何やら問題が発生したようだ。この混乱に乗じて一旦退却するべきか……。
僕は三人の気がそれたすきに、ルシファーとキリーを連れて出ようとした。
「そ、それが、ついに街の中まで魔物が現れたんだ！」
「な、なんじゃとぉ！！」
ギルド長は悲鳴をあげ、おばちゃんとアリーチェはショックで口も開けないようだ。勇者である僕も、街に現れた魔物の話を聞いて足が止まってしまった。
「な、何があったんじゃ！」
男はおばちゃんから水を受け取り、喉をうるおしてから話を続けた。
「それがついさっき、妻と息子の三人で食事をしていたんだ。すると突然、家の壁が破壊されたんだ！　もう、家は半壊さ！　恐らくたったの一撃でそれだ！　苦労して立てた家なのに……、仕事も無いこの状況でどうやって生きてけって言うんだ！　」

男が嘆く。でも、あれ？　ついさっき、家の壁が壊された？　どっかで聞いたような……。
「衛兵には知らせたか？　どんな魔物だったのか？」
男は首を横に振る。
「衛兵には知らせたが、残念ながら魔物の姿は見ていないんだ。あっと言う間に去って行ったのでな」
男は怯えながらも悔しそうに言う。ギルド長は考え込んで話の続きを聞いた。
「何か無いのか。些細な事でもいいんじゃ」
男は首をひねりながら思い出すように言う。
「……そういえば、少年と少女の話声みたいなのが聞こえたような？」
僕の額に冷や汗が滲む。ものごっつい心あたりがあるような、持っているような……。
心中で焦る僕をよそに、キリーもついに起きておばちゃんの料理を食べ始め、今度はルシファーが居眠りを始めた。
「そっと……、そっと……」
僕は二人を連れだす事をあきらめ、一人でもこの場から逃げ出そうとした。
しかし、ギルド長はこちらをじっと見ていて、勇者に向かって目から不気味な光を放った。ギルド長はキリーの戦う姿を水晶玉で見た。そして、少年の僕と少女のキリー。そこからどんな答えが導き出されるか、鋭い人間ならば答えは決まっている。
勇者はギルド長の視線により、体がマヒして動けなくなった。
「そうか、こちらでも冒険者に知らせ、話を聞いてみる。うちもかつかつで養ってはやれないが、住む場所の目途が立つまでうちにいるといい」
ギルド長は話しながらも、男の頭越しに僕へ不気味な光を放ち続けている。勇者はマヒが続いて動けない。
「ありがとう、サルモーネさん。さっそく妻と息子をつれてくる」

男は外に出て行った。
「さ、さてと。僕らも邪魔でしょうし、帰ります。失礼しま……」
僕はぎこちない動きで歩こうとするが……、
「すみませんが、冒険者の方。先ほどのお話ですが……」
ギルド長の丁寧な頼みごとが再開した。しかし、今度は先ほどと違ってどことなく威圧感を感じる。
「は、はい……」
僕は硬直したまま返事する事しかできなかった。

僕らは宿屋で三部屋とった。これからの旅を考えると、できるだけ安く済ませたい。しかしながら、キリーと同じ部屋で眠るのは身の危険を感じるし（けっしてエロい意味ではなく、先ほどのギルドでの様子を見ると、単純明快に命の危機である）、ルシファーは美人な女性をひっかけるため、相部屋は却下らしい。
「はぁ、結局…、依頼を引き受ける事になってしまったなぁ……」
僕は深いため息をついて、ギルド長との会話を思い出す。

『それでじゃなぁ、ここはお互いのために…、ここはお互いのために、海の魔物を倒すべきだと思うのじゃが』
くそジジーは、「お互い」を強調しながら僕に話しかける。
『いや、その僕らは飛べないですし、遠距離魔法も……』
『大丈夫じゃ、ここから西へ行った所に「迷いの森」がある。そこに優れた魔法使いがいるという噂じゃ。彼に協力を頼むのじゃ』
『あの、それなら何でもっと早くその魔法使いに頼まないのですか？』
『迷いの森へでかけた冒険者と近衛兵がいたが、みんなその魔法使いを見つけられなかったのじゃ。お前さん達ならばきっと見つけら

れるじゃろう』

「はぁ……、やっかいな事になったなぁ……」

僕はため息をつく。ジルド長の遠まわしに脅され、二日後に迷いの森の魔法使いを探す事になった。

もちろん、ルシファーとキリーならば海の魔物を倒せるだろう。しかし、あの二人の実力は認めているが、人格は認めていない。二人の気まぐれに自分の命を預ける事が不安なのだ。命綱は多ければ多い程良いのだ。まぁ、こんがらがらない限り……。その魔法使いも、ルシファーやキリーみたいに自分勝手でなければ良いのだけど……。

僕はさらに深いため息をつく。これからの事を思うと頭が痛い。まぁ、魔王を討伐するために異世界へ連れてこられた事を考えると、あまりの頭痛で倒れそうになるが……。

僕はこれからの計画を立てている最中、なにか大事な事を忘れているような気がした。

「そうだなぁ……、ぼろぼろの剣の代わりを買わないと行けないなぁ……。この町では王家の猟銃以上の銃は期待できないだろうしなぁ……。はぁ、武器を買うお金をやりくりしないと……んっ！？」

僕は大事な事を思い出し、ベッドからがばっと身を起こした。

「そういえば、黒豚討伐の報酬をうやむやにされた！！」

海の魔物を討伐するため、ここから西の迷いの森へ魔法使いを探しに行く事になった勇者わたる。彼とこの国の運命はいかに！？

万世？盛、危機壊会

勇者ワタル、次回も生き残れるのか！？

第１５話　魔物が来りて家壊す（後書き）

「……、どこかへ向かうと、いつも世界が広く感じるキリー……。

……次回また……

…」

第１６話　勇者ピンチを切り抜ける

窓から暖かい太陽の光が僕の顔を照らす。どこからか聞こえてくる鳥の鳴き声が目覚まし代わりになる。僕はふわふわのベッドの中でぼんやりと目を開く。

「ふあ～。ふかふかで暖かぁ～い」

僕は枕に頬ずりする。この至福の時にもう少し浸っていたい。

「はぁ～。人生の至福だなぁ～」

僕はベッドをべた褒めするも、この宿屋は決して高級な宿屋ではないし、ベッドも家にあるせんべい布団より固めかもしれない。

しかし、城を出発してから2週間、僕は野宿ばかりで一度たりともベッドに指一本も触れる事ができなかったのだ。人の価値観なんて相対的な物である。地球の裕福な国と比べると見劣りするが、硬い地べたの上と比べたらこのベッドは天国である。これを相対性理論と言う（※真っ赤なウソです）。

しかし、心残りがあるも僕はベッドから起き上がる。

「うーん…、い、いててぇ」

僕は手足を思いっきり伸ばすも、ふくらはぎがつってしまい、ベッドの中に再びうずくまる。つった方向と反対方向に足を曲げれば良いとは分かっているが、いざつってしまうと痛くて動かせなくなるものである。

数分後、足をさすりながらも僕はようやくベッドから出る事ができた。

何といっても、旅の準備を整えなければならない。獅子王師匠（ライオン）からもらった剣の代わりとなる武器を探したり、携帯食料を準備したりしなければならない。僕は王家の猟銃をメインウエポンにしているが、近接武器も用意しておいたほうが良い。

「はぁ～。僕の手に合う武器があるといいけどなぁ」

お金がもったいないので、聖剣を手に入れるまでは大事にしよう

と思っていたのに。世の中上手くいかないものだなぁ。
セイルーン王国では鍛冶家を国が管理していたが、この国でもそうなっていたら困る。この国の現状ではたいした武器をあてにできないかもしれないが、自分の身を守る程度の物が欲しい。
僕は階段を下り、宿の食堂に向かった。
「お客さん、おはようございます」
宿のおばちゃんが笑顔で挨拶してくれる。
「……おはようございます」
僕は一瞬涙ぐみそうになった。温かい好意を受けるのはひさしぶりだ。
僕が食堂に辿り着くと、すでに先客がいた。
「よう、嬢ちゃんよく食うな」
「ばくばく、もぐもぐ、がつがつ」
キリーは料理にがっつき、テーブルの上に皿が積み重なっている。
「あら、ルーちゃん素敵よ」
金髪でボインな美女と、
「えぇ、こんなにワイルドでカッコいい男は初めて。ベッドの中でもかなりワイルドだったわね」
黒髪でバインな美女がルシファーの両隣を占領していた。
「だろう？」
ルシファーが気分よさそうに笑う。さっそく美女をひっかけたようだ。両手にメロン……じゃなくて、両手に花とはまさにこの事だろう。
僕が立ちつくしていると、金髪ボインがこちらを振り向いた。
「ねぇ、地味な子がこっち見てるわよ」
「あら、いいじゃない。初々しくてかわいいじゃないの」
黒髪バインが馬鹿にしたような顔をして褒める。おそらく、皮肉っぽい。
「おぉ、ワタルじゃねぇか。俺の連れだよ。おぉい、ワタル。金を借りたぞ。キリーの分も払っといてやったからな」

「うおぉっとっと」
ルシファーに投げつけられた皮の財布をあわてて受け取る。中を見ると、金貨一枚と銀貨数枚しか残っていない。これじゃぁ、一週間分の宿代、又は剣一本分のお金にしかならない。
「……ルシファー、どんだけ派手な遊びをしているんだ！」
「あぁ？　そんな事で目くじらたてんなよ！　みみっちぃ奴」
ルシファー達は僕にあきたらしく、三人でどこかへでかける。今まで死にかけた事は何度もあるが、経済的に追い詰められるのはこれが初めてだ。
僕はため息をつく。キリーの前に積み上げられた皿を見ると、彼女にも原因があるのだろうが、半分以上はルシファーのせいであることは自明の理である。

僕は自分の部屋に戻って考える。ベッドが気持ちよくて眠りそうになるが、ベッドから起き上がる事は却下である。
僕らは一週間分の宿代はすでに払ってあるので、一週間の生活は保障されている。
しかし、僕には武器が必要だ。武器を買い、ギルドで依頼をこなすしかないが、依頼に失敗すれば後がないのだ。もの凄く困る。
普通なら、危険な仕事を受ける事を理由に、ギルド長から報酬を前借したり、ここの王様に口を聞いてもらう。
しかし、キリーが家を壊した弱みで、それが難しくなっている。あのジジーは手を貸してくれないだろう。
「これは、八方ふさがりか？」
僕はため息をつく、何か良い手は無いものか……。
僕は意味も無く自分の荷物を探る。無意味な事でもわずかな間の現実逃避ぐらいはできる。
中の空間が小さいタンスぐらいに拡張されている猟銃袋の中には、

色々ながらくたがあった。落とし穴作りキット、本当に戻ってくるのか不安な程いびつな形の手作りブーメラン、麻酔薬も麻痺薬もない吹き矢、作りかけのロープ、犬笛などなど。全て狩猟関係ではあるが、役に立ちそうにない。

僕がさらに探っていると、何故王様が持っていなのかは分からないが、エッチな下着（妙に胸が小さめの女性用だと思うが、僕にはおかま用かどうかは判断できない）も見つかった。

改めてＲＰＧゲームについて考えると不思議である。なぜ、エッチな下着の上に旅人の服とか重ね着しないのか。ゲーム内だと普通の装備だが、裸に鎧を着るのも十分に変態である。

もしかすると、鎧という装備は下に着る服とセットになっている可能性も否定できなが、それならばエッチな下着＋旅人の服＋鎧の方が断然防御力がありそうである。

僕は猟銃袋に入っていたエッチな下着を丁寧に部屋の暖炉にくべようとした。なんたって王様が着用していたとしたら気持ち悪い、あの王様ならばその可能性を否定できず、とても怖い。

しかし、現在は金欠なので恥ずかしさを我慢し、キリーを連れて売りに行こうと思う。キリーが着用したと嘘をつけば値段を釣り上げる事ができるだろう。彼女は見た目だけは良いし、世の中の男の半分はエロさで出来ているのだ。

さらに荷物を漁った。

「あっ、これがあった」

僕は袋の中でぐしゃぐしゃになった紙を取り出した。そう、セイルーン王国の王様からもらった仲間募集の紙である。ぐしゃぐしゃになっているも、きちんと王家の紋章が印されている。

「これを見せれば、この国の王様に武器をおねだりぐらいできるかもしれない」

そうと決まれば善は急げ。お昼までベッドで寝っ転がり、その後キリーをつれて道具屋とお城へ向かう。

えっ、どうして今すぐ向かわないかって？　それはだね、キリー

に何かを頼むのにはお昼をご馳走するしか手は無く、朝ごはんを食べたばかりのキリーを食べ物で釣る事は難しいからだ。決して、僕がお昼まで眠っていたい訳ではない。

「ねぇ、キリー。いらない物を売るのに、ついて来てくれない？」
「……」
お昼には早すぎる時間に、僕は宿屋でキリーに頼み込が、キリーは面倒くさそうな顔をする。
「ついて来てくれたら、何か御馳走するからさ」
「分かった……」
僕が御馳走の事を話に出すと、二つ返事で答えた。キリーの頭の中には戦う事と食べる事以外の全てが抜け落ちているらしい。

僕達はまず、お城に向かった。良い武器がもらえると良いけれど……。
トンノ・ロッソの城は、セイルーン王国の城と違って華美ではないが、その全てが実用的な感じが在る。
城の門から見える庭園には、花の代わりにブロッコリーとか野菜が沢山植わっている。
城の門から見える、城の中央に見張りのための高い塔が一つだけあり、その他は二階建てで平べったくなっている。これならば、足腰が悪くなっても移動が楽そうだ。
城の門から見える兵士や馬の飾り付けも、小さく紋章がついている他に飾りっけがない。
城の門から見える家根は……、えっ？　どうしてさっきから城の門からの景色描写ばかりかって？　それはだね……
「お前達みたいな子供が、セイルーン王国からの勇者だって？　嘘

もたいがいにしろ！」
厳つい門番が怒りまじりに僕らを門前払いにする。
「いや、あの本当です」
僕も困った顔で言い返す。
「あぁ、はいはい。ぼうや、小さいのに偉いですねぇ。今度来る時は両親と一緒に来てくれるかなぁ？」
もう一人の門番が僕らを馬鹿にしたような声で追い返す。
「本当です。ここにセイルーンの国王の親善書があります」
僕は袋から仲間募集の紙を取り出す。
「くしゃくしゃだな。ふむ……、『魔王を倒す仲間』だと……、王家の紋章をまねるなど、不届き物め！！」
「はいはい、おじさん達は忙しいから、友達と一緒に遊んでね」
厳つい門番が怒りだし、ふざけた門番が「しっしっ」と僕らを追い払うように手を振る。
「……ワタル、世間は鬼ばかりだ……。気にするな」
落ちこむ僕をキリーは微妙な慰め方をしてくれた。
あぁ、お金が足りないよ。同情するなら本当に金をくれ。

僕らは城から引き返す。
「仕方ない、他をあたるか……」
僕らは街の武器屋ではなく、武器になりそうな物を売っていそうな店を探す。
ここの国でも、武器を作る鍛冶家は国が管理しているらしい。街にも鍛冶家はいるが、生活雑貨を作る程度らいし。
なかなか見つからないので、先に物を売る事にした。
「キリー、あまりしゃべらないで、適当に頷いていてね」
「……（こくり）」
僕達は、すけべそうな男が店主の服屋を探し、そこに入った。
「いらっしゃい」

店主が僕を見て、次にキリーを見て顔を少し緩ませた。
「すみません、古着を買ってほしいのですが……」
「どんな御品でしょうか」
僕は店主の元に歩いていき、エッチな下着を出す。
純情そうな少年がエッチな下着を出すとは思わなかったのだろう、店主は目をまん丸にする。
「これ、君？　……なわけないか。お母さんのかい？」
「いえ、これは彼女のです」
「……（こくり）」
僕はキリーに少しだけ視線を向け、キリーが頷く。
ちなみに、僕はちらりとしかキリーに視線を向けていない。はっきりとキリーを指差して「彼女のです」とは言っていないのだ。例え遠くにいる女性の事を「彼女のです」と言っても、嘘はついていないはずだ。だって、「彼女」とは自分と相手を除く、第三者の女性を指す言葉なのだから。
ただ、この理論を用いる時、この下着を王様が愛着していた場合、僕は嘘をついた事になる。お互いの為にも、その恐ろしい可能性がはずれている事を心の中で切実に祈ってやる。
「そうか、そうか」
店主は少しだけいやらしい笑みをもらす。「知らぬがほっとけ」だ。
「では、金貨二枚程でどうかな？」
単なる下着に金貨二枚は破格だと思ったが、僕はとりあいず値段を釣り上げてみた。
「いえ、適正な価格で買って下さい。売る所によってはその倍を余裕で超えるでしょう」
僕は当てずっぽな値段を言う。
「ぐぬぬ、相場を知っているって事か……。なるほど、彼女のつきそいに来ただけの事はある」
えっ？　本当に値段がつり上がるの？　この世界の男達は、どん

な頭の構造をしているのだろうか？
　僕は心中で驚くも、ポーカーフェイスを保つ。興味のないキリーは元々ポーカーフェイスだ。
「ならば……、金貨１０枚でどうだ！　これ以上は無理だからな」
　店主のいやらしい笑みが厳しいものに変わる。どうやら、本当にこれ以上は無理見たいだ。
「それでお願いします」
　僕は思わぬ幸運に喜び、店主から金貨１０枚を受け取る。まさか、五倍にまでつり上がるとは思わなかった。
　店主が下着をにやにや受け取る様子を見て、急に思い出した事があった。
「あの……、これも買ってもらえませんか？」
　僕は王家の狩猟袋から王様が隠したエッチな本を取り出す。黒豚討伐の旅をした時に見つけたものだ。
「そ、そ、それは！　五年前に絶版になった「ターヘナルアナトミア」！　スギャータ・ゲン＝パークが監督した超レア物！」
　店主が目を輝かせる。
「た、頼む！　金貨五枚、いや、金貨八枚で手を打とう！　ぜひ売ってくれ！」
　店主が血走った眼で熱烈に頼み込んでくるので、僕は少し怖くなった。そうやら、王様が所有する物はどんな物でも一流らしい。
「わ、分かりました」
　僕は店主から金貨八枚も受け取り、店主は本を大事そうに抱える。
「ありがとうございました！」
　ほがらかに礼を言う店主から逃げるように僕達は店を出た。
　僕は王様から二十枚の金貨を受け取ったが、それに近い金貨を得る事ができた。王様の馬鹿さ加減には感謝したぐらいだ。
　なんたって、そのおかげで経済的ピンチを切り抜ける事が出来たのだから。

第１６話　勇者ピンチを切り抜ける（後書き）

「例え、火の中、水の中、ベッドの中。いつでも、どこでも、どんな時だって、どんな場所でもワイルドに吠えるルシファーだ。全くよ、ワタルの奴はだめだな。その本は売る前に俺にも見せろよな！

むかつく野郎だ。さてと、次回の予告だ。」

「これは……、どれだけ残酷な武器なんだ。この血に塗られた武器を手にしろって言うのか……」

新たなる武器に恐れおののく勇者ワタル。

万里長城！　喜気回会！

彼の冒険の旅はいかに！？

第１７話　呪われた武器

　食物連鎖という言葉が在る。
草は草食動物に食われ、草食動物は肉食動物に食われ、肉食動物は死んで土に帰る。
雲は雨を降らして川となり、川は海へと流れ込み、海は蒸発して雲となる。
国民は働いて社会から金を得て、一部の議員は国民から税を得て、その議員は特別接待費として社会にお金を還元する。
そう、全ては巨大な因果で巡り回っているのだ。
僕は目の前の光景を見てそう思う。
「がつがつ、むしゃむしゃ、もぐもぐ（×１００％）」
　キリーは巨大な丸焼きにかぶりついている。その肉はグゲルという豚に良く似た生き物で、額に角が生えているのが特徴的だ。ゲルはとても凶暴で、戦士や魔法使いでなければ狩るのは難しいらしい。食物連鎖の中で、ゲルを食べる動物は、人間か、白い亜熊（※熊によく似たという意味）のダムガンだけである。
「……キリーは食物連鎖の頂点に立つ存在なのかなぁ」
「全く、お客さん、すごいね……」
　食堂のおばちゃんが目を丸くしている。
　次々にゲルの丸焼きがキリーの胃袋の収まるのを見ているだけで、僕は胸やけしてくる。ゲルの丸焼きは、大人１０人ぐらいで食べる、パーティー向けの料理なのだ。
　キリーを虎に例えると、僕はミドリムシぐらいかもしれない。ミジンコに例えないのは、ミドリムシの方が役に立つという僕のなけなしの誇りゆえである。
　僕はお茶をすすりながら、キリーの食事が終わるのを待っていた。キリーのおかげでお金が手に入ったとはいえ、たったの一食で、銀貨５０枚（又は金貨１枚の半分）は飛んで行ってしまいそうだ。

あっと言う間にキリーは丸焼きを食べ終えてしまった。まぁ、僕はキリーのあまりの食べっぷりに、声一つだせなかったが……。
「さてと、キリー。武器を探しに行こうか」
僕は席から立ち上がった。
「……ダムガンの肝焼きで最後にする……」
キリーが物足りなさそうな顔で言う。
「……すみません、ダムガンの肝焼き一つ」
僕はため息をついて追加注文する。もしかしたら、金貨一枚使ってしまうかもしれない。

「はぁ、なかなか武器が見つからないね」
「……」
僕は愚痴を言い、キリーは無言で返す。こんな時に無言の描写をする必要は無いと思うが、三点リーダーがなければ、キリーが食べる、戦う以外の描写がなくなってしまう。ヒロインとしての存在感を出すためには、無駄に見えで、必要不可欠な物なのだ。
僕らは武器を探し求め、やけに人の少ない街中を歩いていると、何やら喧騒が聞こえきた。
「たっく、動くなよ！」「むかつくんだよ！」「がらくた売りやがって！」「おらおらおらー！」
４人の男が、たった一人の人間を足蹴りにする。必死に耐えている人は長い髪を乱し、服もスカートもぼろぼろにしている。
勇者である僕は、きびしい視線を真正面に向け、足早に歩く。
キリーも無表情な視線を真正面に向け、颯爽と歩いてゆく。
「あっ？」
僕らが近づいて来るのに、四人のうちの一人が気付いて視線をこちらに向けたが、気が付くのが一瞬だけ遅かった。
カツカツと、僕らの靴音が石畳の上で小さくも、早いテンポで鳴り響く。

僕とキリーは彼らに足早に近づいてゆき……、彼らの横を通り過ぎ、……遠ざかりはじめた。
「ちょっと待って下さい、そこの方！　どうか助けて下さい」
足蹴りにされていた人が、僕らに助けを求める。
常に無表情のキリーですら、面倒臭そうに顔をしかめた。
足蹴りにされていた人は、長い髪を乱していて、膝上までのスカートもぼろぼろ、片
方のハイヒールも折れている。けれど、一番特徴的なのは剃られていても目立ってしまう青い髭である。つまり、彼は女装した中年男性なのだ。
「幻聴が聞こえるなんて、どうやら僕らは疲れているようだ。どこかで休もうか？」
「……」
キリーは静かに頷く。
勇者はさらにスピードを上げ……「待って下さい！　お礼はしますから！」
「キリー、僕らは依頼に備えて、今日中に武器を手に入れなくてはいけない」
「……」
勇者とキリーは己の使命感に燃えあがった。
「う、うちは武器を売っています。1割引にしますから！」
「……弱者は生きてゆけない、この世の真理……」
勇者一行はスピードを落とさずに歩き続ける。
「は、半額、半額でいいですよ！」
勇者一行はわずかに歩みを緩めるが、足を動かすのをやめない。
「ただ、ただでいいですよ！」
変態男が必死に叫ぶ。
「弱きものを虐げる悪漢よ！　そこの人を離せ！」
「……よわちもののしいただるあかんよ！　そこにょしとをはにゃせ！」

勇者一行は体の向きと態度を百八十度変えて、悪漢A・B・C・Dに言い放った。キリーも僕のまねをするが、普段の無口っぷりが災いとなり、復活の呪文っぽい台詞を言い放った。それとも、彼女はきちんとした台詞を言うのが面倒だったのかもしれない。
「なんだとぉ！　ガキ二人に何ができる」
悪漢Bが怒鳴り声を出す。
―ガチャッ！！　シャララーン（×2）！！―
勇者は腰にかけていた王家の猟銃を構える。
僕は腰にひもで輪を結び、そこに猟銃をさして歩いている。これなら外套（マント）で隠れるし、いざという時に腰だめで構える事が出来る。
キリーも背中にある二本のバスターソードを抜く。毎度毎度、どうやって巨大なバスターソードを背中から抜いているのか、とても不思議な程だ。
「お、お前ら……、そんな事をしてただ済むと思っているのか！？
衛兵に捕まるぞ！」
怯えたように悪漢Bが怒鳴る。少年よりも銃を警戒し、そして剣よりも、その重たい剣を軽々と扱う少女に怯えた。
勇者はため息をついて、タコ殴りにされた変態男を指差す。
「……人の事言えるの？」
「ちっ！　帰るぞ！」
悪漢A・B・C・Dは逃げ出した。
悪漢たちはいなくなった。
「あ、ありがとうございました」
変態男は息絶え絶えで礼を言う。目の周りに青いあざができているのが、なんともコントっぽい感じがある。
「いえ、僕は当たり前の事をして、当たり前の物をもらうだけです」
僕は露骨に催促した。目の前の女装したおっさんをまじまじと見ていたいとは思わない。
「は、はい。……えっと、店までついて来てください。……あっ、申し遅れました。わたくの名前はカンタロです」

僕とキリーは無言で変態男について行く。無言のままついて来る僕達に変態男は重圧を感じたらしい。
「あの、この格好を見て勘違いをされているのではないかと思いますが……、私は女装趣味ではありませんよ」
「どの口が言うんだよ」
キリーも無言ながら同意見らしい。こくこく頷く。
「いえ、この服は……、妹の形身なのです……」
男は悲しげな顔をし、海の方角を眺める。
僕はその表情を見て、少しだけ憐れみと罪の意識を感じる。
キリーは相変わらずの無表情だ。
「……この港の付近に突然現れた魔物の話はご存知ですか？」
「……もしかして、海の魔物に殺されたのですか？」
男は涙をこらえるように目を閉じ、静かに頷いた。
「えぇ、妹はマッカーサー王国へ向かう船に乗って、その船が魔物に……」
男の閉じられた目からちらりと光る涙が流れだした。
「……それは……御気の毒に」
男は袖で涙を拭った。
「えぇ…、賭博で…、首が回らなくなって。…一発当てたら、ヒック…、必ず帰ると…ヒック、…何十年かかるか分からないけど、…待っててねと、…言い残したまま……」
―それって、借金を押しつけられたんじゃないのか？　絶対それ夜逃げしようとしていたよ。もしかして、さっきの男たちは借金取りだったんじゃぁ……―
僕はだんだん微妙な気持ちになってきた。
しかし、男は話しているうちに、感極まったようだ。激しく嗚咽をもらす。
「……も、もう。…勝手に、服を着られて、……怒る妹は、……もういないんだ……」
「……」

元々、妹の服を着る変態だったんじゃないか。
僕は同情する気が失せてしまった。さっさと武器をもらって、おさらばだ。
僕らはめそめそする男の後を黙ったままついて行った。

「着きました」
少し歩くと、小さくボロボロの店に辿り着いた。看板を見ると、金物屋らしい。
僕の家の近くには、古くて小さい建物だが美味しいラーメン屋みたいな隠れた名店があるが、この店も隠れた名店？……の期待は出来なさそうだ。
僕は嘆息する。ろくな武器を手に入れられなさそうだ。包丁とかおなべとか貰って、どっかでお金にしようかな。
僕とキリーは変態男の後に続いて店の中に入った。
店の中にはおなべとか、フライパンとか、色々な雑貨が乱雑に並べられていた。ごっちゃごちゃに並べられているため、お店では無くゴミ屋敷と間違えられそうである。
「さぁ、なんでもいいですよ。遠慮なく持って行ってください」
変態男は笑って僕らに勧めて来る。
「はぁ、何が在るかねぇ……」
僕は鎌をつまみあげる。残念ながら、くさりつき鎌ではなく、くさかり鎌だ。
「これなんて、どうですか？」
変態男は僕にショートソードを差し出してくる。その剣は新品なくせにどこかくたびれていて、刃紋は直線と波の中間ぐらい……つまり、刃がめちゃくちゃである。両刃の剣であるが、左右非対称にも程がある。
「これ、自信作なんだ。無名だけど、なかなか良い線いっていると思うよ」

にこにこ顔の男の自慢に、僕は無口になる。
「さぁ、振ってみていいよ」
男が勧めて来るので、僕は試しに八分ぐらいの力で振ってみた。
ビュン！！　ザクッ！！
剣の刃が良い音をたてて空気を裂く。それは良いのだが、今刃のある位置が大問題である。
「ははは……、良い素振りだね」
変態男が床にかがんでいる。男が立っていた胸のあたりの壁に刃だけが突き刺さっている。剣の刃が柄からすっぽ抜けたのだ。
「それは、……えっと、……そうだ、それは『飛影剣（ひえいけん）』と言う名でね。斬撃が飛ぶんだよ？」
「それ、今考えたよね？　あきらかに、ただ柄から刃が抜けただけだけど」
これが自信作ならば、現在も未来においても、この変態男に鍛冶家の才能は無いらしい。
聖剣が手に入るまでの間に合わせがあるかなぁ？　と思って来たのだが、これでは荷物になるだけかもしれない。どこかに売って金にする事もできないかもしれない。
僕はため息をついて、再び物色を始めた。何か探さないとくたびれ損だ。
キリーは僕と反対側を探していて、何かを見つけたようだ。
「……これはなんだ？」
キリーは二本の折れ曲がった細い鉄の棒を両手に持っている。
「あぁ、それは、宝物を探す占い道具ですよ。面白半分に作ってみたんです」
それは、あきらかにダウジングだった。
「片手に一つずつ持って、宝のある場所で交叉したり、開いたりするんだ」
キリーがダウジングを受け取り、この金物の山に向けていく。なんと、胡散臭いダウジングはひとつの金物の山で交叉した。

キリーは無言のまま、いらない金物を後ろに放り投げ出した。
ゴーン！！
「痛っ！」
キリーの投げた金物が僕の頭に当たる。
「ちょっと、キリー！」
ガゴーン！！
僕の頭に大きな金たらいが被さり、視界が暗くなる。
「まったく、もう！」
僕が金たらいを取ろうとしたら、カツーンと鋭い音がした。僕の手はビクッと震えて止まる。キリーの様子が収まるまで被っていたほうが良さそうだ。
僕は飛んでくる金物が収まってからたらいを取った。僕の周りには金物が散乱している。
「全く、やめてよね、キリー……んっ？」
僕は文句を止めて、足元に落ちている包丁を拾った。恐らく、さっきの鋭い音の正体らしい。金たらいが無ければ、僕の脳天に突き刺さっていたかもしれない。
「何！？　この包丁は！」
その包丁には、ドラゴンの美しい彫物がほどこされ、刃は銀色の刃紋が波打って輝く。試しに少し伸びてきた自分の爪先に刃を入れてみると、たいした抵抗もなく刃が通った。
「そ、それは、死んだオヤジの力作！　名刀秋雨だ。こんな所にあったのか！」
変態男がわななく。どうやら相当な一品らしい。って言うか、父親の力作をがらくたの中に埋もらせていたのか。あの金物の山の中で、刃こぼれしなかったのが奇跡だ。
僕は名刀を守るため、遠慮なく猟銃袋の中に入れる。
「……でも、これでは魔物と戦えないねぇ……」
「そ、そうですか……」
金物の山の中で腐らせていたし、なんでも好きなだけあげると言

った以上、「父親の形見だからやめて」とか言い出せないのだろう。キリーはダウジングが気に入ったらしく、無表情な顔を少しだけ緩めて再び宝を探している。
「では、こちらはどうでしょう？　槍に近い物ならばありますよ」
変態男は別の部屋に行き、すぐに戻って来た。
それは長い鉄の棒で、先に三又に分かれている。三又の槍にしては、妙に細すぎるが……。
「……それって、銛？」
「そうですよ、父の力作なんです」
変態男は満面の笑みを返す。彼は銛をなでながら、思い出すように語り出す。
「父は、『これはまだ、未完成だ』って言っていました」
「未完成？」
「えぇ、父が言っていました。この世界の何処かに、神のレシピで奇跡の品を作る事ができる『錬金の溶炉』があると。鍛冶家にとって、それは夢であり、父はそれを作り出そうとしました……。もちろん失敗だったようですが……」
彼は悲しげな笑みを浮かべる。
「それで、お願いします。これで旅をして、連金の溶炉を見つけたら、父の作った銛を完成させては頂けないでしょうか？」
「え、えっと……」
「約束してくれなくても結構です。難しい事は承知です。しかし、ここにあってもいずれ朽ちてゆくだけです。」
―うん、ここにあれば朽ちてゆくだけっていう事は認めるよ。―
「お願いです。……夢を見させてはいただけませんか？　ただ、父の作品が人の役に立つだけでも嬉しいんです」
「わ、分かりました」
「あ、あ、ありがとうございます！」
僕は勢いに負けて、思わず頷いてしまった。
男は本棚から一冊の本を取り出して、銛と一緒に差しだしてくる。

「これは、父が残した連金レシピです。あくまでも理論上ですが、父の夢を確認してください」
デルデルデーン♪　勇者は『未完成の銛』と『連金レシピ』を手に入れた。
デルデルデーン♪　勇者は『駄目ダメだめで、どうしようもない女装好きの鍛冶家の男の父の夢』のクエストを引き受けてしまった。
（まぁ、ゴミになったら後で捨てれば良いか……）
「さて、こちらもありがとうございました。僕らも帰る事にします」
未だにダウジングを続けるキリーの手を引っ張って鍛冶家を後にする。キリーの袋はパンパンに詰まっていた。色々と気に入った物があったらしい。
「ふぅ……、なんか疲れた」
武器を探すのにだいぶ手間取ってしまい、もうそろそろ夕食の時間だ。依頼の日まで、あと一日猶予があるが、この銛がだめなら、色々と面倒だ。
「宿屋に着いたなぁ。夕食までちょっと横になるかな……」
宿屋についてもキリーはダウジングを続けている。宿屋のお金にまでダウジングしないといいけれど……。キリーならば宿屋のお金も物品も、ダウジングが交叉すればゴミでも何でも持って行ってしまうだろう。泥棒行為に発展しなければいいけど。
僕は自分の部屋のベッドに横になる。隣から、「ルーちゃん、激しすぎ」「あぁん」とか、「まだまだぁ！」とかいう声には耳を塞ぐ。現在の地球では、プライバシーについて厳しくなっているが、プライバシーを知らされてしまう方も迷惑を被っているのかもしれない。
僕は喘ぎ声から意識を反らすため、先ほどもらった連金レシピに目を通す。
「えっと、銛の連金レシピは、っと！」
僕は銛の連金レシピを読む。

達人の銛　　達人が振るう銛。トビウオをも貫く。
＝未完成の銛＋達人

名人の銛　　名人が振るう銛。マグロをも貫く。
＝達人の銛＋名人

鉄人の銛　　鉄人が振るう銛。サメをも貫く。キャビア、ふかひれが食べたい人には必須。
＝名人の銛＋鉄人

人間国宝の銛　　人間国宝が振るう銛。クジラをも一突きで仕留める。
＝鉄人の銛＋人間国宝

天上の銛　　天使達が振るう銛。海竜をも一突きで仕留める。
＝人間国宝の銛＋天使

神々の銛　　神々が振るう銛。海神をも一突きで仕留める。
＝天上の銛＋神

「……」
僕は沈黙した。なんだか、これは、練金レシピではなく、悪魔のレシピなのでは？
達人の銛とかさ……、練金材料が『達人』ってなんなのさ。人を武器の材料にするの？達人の銛とかに意味不明な石を使うよりは、武器名と材料名が一致しているけど……。これって、かなりまずくない？　って言うか、これは最終的にけものの槍や、賢者の石になるんじゃないの？
「こんな武器を完成させろ、って言うのか？　……これは……、ど

れだけ残酷な武器なんだ。この血に塗られた武器を手にしろ、って言うのか……」
勇者は新たなる武器に恐れおののいた。
僕は部屋を飛び出し、宿屋にある大きな窯に向かった。
「どうしたんだい？」
窯の前にいたおばちゃんを無視し、銛と練金レシピを突っ込んだ。
「はぁ、はぁ、す、すみません。一緒に燃やさして下さい」
僕はおばちゃんの返事もまたずに、部屋へ戻った。
「はぁ……、これで大丈夫かなぁ……」
僕がベッドに倒れ込むと、何やら硬い感触があった。
「ん？　何だろうこれ？」
僕は毛布をめくると、捨てたはずの銛と練金レシピとご対面した。
「な、なんじゃこれ！？」
デルデルデーン♪　装備が呪われている。勇者は装備を捨てる事ができない！
「う、う、う……、うそーん！！」
とある夕方、町中に情けない叫び声が響いたとさ。

第17話　呪われた武器（後書き）

「やぁ、こんにちはみなさん。普段の食事は冷凍食品ばかりの現代っ子な主人公です。僕ってば、最近悩み事ばかり抱えてさ、もう大変なんだよね。みんなは壁に行き詰った時はどうしてるの？　僕は一旦ファンタジー小説に現実逃避して、落ち着いた後、問題に向き合うようにしているんだ。まぁ、その頃には問題を忘れているんだけどね。忘れるくらいなら、それは大した問題ではないっていう証拠だよ。みんなも試してみたら」

「ちょっと！　とおる！　勝手に人のあとがきを横取りしないでよ。君は自分の小説のあとがきで話せばいいでしょ！」

「だって、賢者の方は作者が行き詰っているんだもん。でも大丈夫！　君と僕のキャラは被っているから、名前さえださなきゃ、読者にばれないって」

「僕の出番を取るな！」

「波乱万丈！　奇寄怪怪！　では、次回の最弱勇者とチートな勇者の御一行様をお楽しみに！」

「僕の台詞を取るなぁ！」

第１８話　魔法使いの試練

僕はあれから何度か、あの変態から受け取ってしまった銛を捨てようとしたが、どこに捨てても僕の手元に戻ってきてしまう。川に投げても、いつの間にか僕の手に握られていた。土の中に埋めても、宿屋の部屋に立てかけられていた。商人に銀貨八枚で売った時はようやく捨てられたと思った。しかし、数時間後に王家の狩猟袋を整理していると、「元々ここに居ましたが何か？」とでも言っているかのように、しっかりとそこに収まっていた。

僕は銛を捨てられない事を嘆いたが、明日の出発に備えて、仕方なくその銛を使う事にした。銀貨八枚は僕のポケットにしっかりと収めたままだ。商人に、せっかく銀貨八枚で買った銛を失くしたという残酷な事実を知らせるのがしのびない。

◆◆◆◆

翌朝、僕はベッドの中で目を覚ました。僕はしばらくボケっとする。

（ウゥ……なんか、また寝ちゃいそうだな）

僕は大あくびしながらゆっくり背を起こし、僕は宿の食堂で朝食しながら二人を待つ。

「ふあぁぁ……。まだかにゃぁ…」

僕が朝食を終え、机に突っ伏していると、ルシファーが来た。

「ルーちゃん、今日出発なのぉ？　私、超～寂しい～」

「ルー君、大丈夫？　依頼は危険なんでしょ？」

「大丈夫よ、ルーちゃんにとっては、あんたを満足させるよりもたやすく魔物を倒しちゃうわよ」

ルシファーが美女をひきつれて現れた。昨日に加え、蒼々とした

草原色の髪をした美女も増えている。
「大丈夫だ、心配するな。むしろ自分達の心配をしたらどうだ？
戦いの後は気分が高まっているからな、体力を整えた方がいいぞ。
俺と過ごす夜のために、な！」
「「「キャー！！」」」
美女ＡＢＣはピンク色の悲鳴を上げた。
勇者のテンションはどん底に落ちた。
「よぉ、とおる。キリーはまだ起きていないのか？」
ルシファーが僕に話しかけて来る。彼と一緒に僕まで周りの視線にさらされるが、なんだか慣れてきてしまった感じがする。慣れとは怖いものだ。
「そうみたい、キリーを起こしに行こうか？」
「おぉ、起こしてこいよ。こういう時はお約束通り、着替え中に出くわすのがセオリーだな。もてないお前にゆずってやるぜ」
「はぁ、……そうする」
ルシファーの馬鹿にした態度にあきれて言葉が出ない。いったい何のセオリーだって言うんだ。
僕はキリーを起こしに、彼女の部屋へ向かう。彼女の部屋の戸をしっかりノックする。僕にはルシファーが言うように、ラブコメ展開があるとは思わない。しかし、急に部屋へ踏み込めば、敵と間違えられて剣で斬り付けられそうだ。キリーと比べたらゴルゴ●なんて、目じゃないのだ。
「キリー！　朝だよ！　起きてる！」
僕はノックするが、返事がない。ただの扉のようだ。
「キリー！　迷いの森に向かうよ！　ごはん食べられなくなっちゃうよ！」
僕はノックするが、返事がない。ただの部屋のようだ。
「おかしいなぁ。ぐっすり眠っているのかなぁ？」
僕は扉を開けた。しかし、ベッドはすでに、もぬけの殻だった。
「あれ？　キリー、どっかに行ったのかな？」

僕は部屋を見渡すと、小さなテーブルの上に手紙が置かれていた。
「えっと、なになに。『お昼に昨日の所へ行きます。夕飯までには帰ります』だって？」
どうやら、キリーはいつでもどこでも必ず迷子になるというセオリーがあるらしかった。

◆◆◆◆

僕とルシファーはトンノ・ロッソ王国を出発し、西にある迷いの森に居ると言う噂の魔法使いに会いに行く。
キリーが行方不明になったと言ったら、『言い訳しても無駄じゃ。どんな手を使っても、依頼をこなしてもらうぞ！』ギルド長のサルモーネは、頑固な老人らしく聞く耳を持たなかった。
「はぁ、迷いの山脈の次には迷いの森か。次に冒険する所は、迷いの山林とかっていう名前じゃないよね？」
「しっかし、森の魔法使いね。どうせなら、泉の精霊とかならいいのに。魔法使いって言ったら、たいてい男かしわくちゃのばあさんだからな」
僕とルシファーは文句を言いながらも、迷いの森に辿り着いた。
迷いの森を見たルシファーは顔をしかめた。
「おい、とおる。……この森は空間が歪められているぞ」
「そう……、歪められているね……。どっかで聞いたような……」
たしか、迷いの山脈でも同じ事をルシファーから聞いた。あの時は、黒豚が山の中ではなく山のふもとに居た。
「もしかして、今回も魔法使いは森の近辺に居たりして……」
「おい、とおる？」
僕は森の近辺を探り始めた。同じ手には二度と引っ掛かってやらないぞ！
「おい、どうしたんだよ、とおる？」
ルシファーは突然の僕の行動を不思議に思ったようだ。彼は黒豚

がどこに居たのかを知らなかったのだ。
僕は茂みをかきまわして、魔法使いの住処を探す。絶対に何かあるはずだ。
茂みを探る僕の手に何かが触れた。
「ん？　むにゅ？」
しっとりとしていて、なめらかな手触り。独特なフレーバーな香りが僕の鼻を刺激する。手にとって見ると、なんとまぁチョコレート色のご立派な「Ｆｅｃｅｓ」でした。「何何？　いったいそれは何だって？」と、疑問をお持ちの方々。Ｆｅｃｅｓとは、肛門から排出される、食物のかすや腸粘膜からの分泌物などのかたまり。便もしくは糞（講談社出版　日本語大辞典より）　Ｈｉ，ｒｅｐｅａｔ ａｆｔｅｒ ｍｅ！「Ｆｅｃｅｓ」，ｏｎｃｅ ｍｏｒｅ「Ｆｅｃｅｓ！」 例文１； Ｔｈｅ ｄａｕｇｈｔｅｒ ｏｆ ａｇｅ ｔｅｌｌ ｈｅｒ ｆａｔｈｅｒ ｎｏｔ ｔｏ ｄｅｆｅｃａｔｅ． Ｂｅｃａｕｓｅ ｔｈｅ ｓｍｅｌｌ ｏｆ ｈｉｓ ｆｅｃｅｓ ｉｓ ｔｈｅ ｍｏｓｔ ｓｔｉｎｋｉｎｇ ｉｎ ｔｈｅ ｗｏｒｌｄ．

「うぎゃぁぁ！！」
僕は●んこを放り投げたが、それは粘り気があったため、コントロールがとんでもないことになった。
「わっ！」
ルシファーが慌てて飛び退く。彼の足元に●んこが落っこちる。
「あ……」
驚きに染まっていた彼の顔がだんだんと怒りに染まって行く。
「……と・お・る！！」
ルシファーの体から金色の光が漏れだし、彼の背に光が集まって光の翼が形成しかかっている。
「ま、ま、まじ！」
彼は鬼の形相をしていて、土下座ぐらいでは許してもらえそうに

ない。
「ご、ごめんなさい！！」
勇者はとんずらした。
「待ちやがれ！！」
しかし、ルシファーは親の敵を追うかのように駆けて来る。
「ゆ、ゆるして！！」
僕が森に逃げ込んだ。すると、何やら妙ちくりんな音が聞こえ出した。
ポワワワーン！
急に僕の視界がオレンジ色の光に包まれて、周りの景色は絵の具をかきまわしたかのように崩れ始めた。
「くそ野―…まち…が……」
直前まで迫っていたルシファーの手も、出来の悪いところ天のように崩れていった。
「な、なんだ！」
景色がよりいっそうぐるぐる回り、いくつものの線となる。
大地がなくなったかのように足元がおぼつかなくなり、頭の中はぐらぐらする。
ぐるぐる、ぐらぐら、ぐるぐる、ぐらぐら……。
「うっ、……おえっ！」
僕自身は回っていないのだが、回り続ける景色を見ていると気持ち悪くなってきた。胃液が喉元までせり上がってきて、ひりひりする喉を手で上から抑える。
叙除に景色の回り方はゆっくりになっていき、木でできたログハウスのような部屋が目に入って来た。
僕は立ちあがろうとするも、まだ景色はかすかに回り、足元もふらふらして再び座り込む。
「すみませんね、あなたにはこちらに転位していただきました」
幼い声の方向に目を向けると、くらくらと回る僕の視界に黒っぽい人影が見えた。

「あ、あなたは……？っ、おぇっ！」
僕は酔いに勝てなくなり、思わず吐く。
「ありゃー、きちゃない！盛大に床を汚してくれまちたね」
声に少し嫌そう感情が混じっている。
「しかし、仕方ありませんね。ちちんと手順と礼儀を守らなかった僕にも責任がありましゅ」
声を聞く限り、彼はかなり幼いようだ。
「お客さんをもてなすに、自己紹介が遅れまちたね。えぇ、僕の名前は……」
「み、水……」
「むっ、仕方ありまちぇんね。……『精霊さん、水ちょうだい』。……どうぞでしゅ」
彼は魔法でコップに水を満たし、僕の口元まで運んでくれた。僕はコップを受け取り、ノドでひりひりする胃液を流し込んだ。
「では、自己紹介でしゅ。僕の名前は……」
「き、気持ち悪い」
僕は床に倒れ込んだ。こんなにも木の床が気持ちいいと思ったのは、これが初めてだ。
「はぁ、自己紹介は後でしゅ」
彼はぷりぷりして、机の上の水晶玉を見つめる。
「さてさて、予言の勇者さん。あなたの実力を見せて頂きましょうか。あ、そうでちた。あくまでも勇者さんの実力を測るのに、従者の方にはこちらで待機していただきましゅよ。……まぁ、聞いていないようでしゅが……」
ちなみに、「勇者→転位魔法に酔って倒れ込んでいる情けない少年」です。しかしながら、どうやら彼は、ルシファーを勇者と間違えているようでした。僕には訂正する気力もないけど。
「試練は心知体を試すものでしゅよ。フフフ……。まず一つ目の試練は、いくつものの幻の道を見せるでしゅ。しかし、そのうち本物はたった一つ。間違えれば、最後の審判の時まで永久にさまよい続

けるでしゅ」
　物凄い恐ろしい試練を、黒い人影はいたずらを仕掛けた子供みたいに目を輝かせてみている。
「な、な、なんと。周りの木々を吹き飛ばして、正しい道を見つけたでしゅ。凄いでしゅ！」
　どうやら、ルシファーは力技でクリアしたらしい。
「ふふふ、しかし、二つ目の試練はそう簡単にはいかないでしゅよ。濃い霧に包まれたそこは一本道で、一歩でも横に歩けば崖に真っ逆さまでしゅ。しかーし、霧の中には勇者の助けを求める人々の幻影があぁぁぁ！！　これは心を鬼にしても進む事が求められる恐ろしい試練でしゅ！！」
　ハハハと、笑う黒い人影をぼんやりと僕は見る。ようやく頭がはっきりしてきた。黒い人影は１３０ｃｍぐらいの背丈で、声は五歳ぐらいに聞こえる。
「な、なに～！！　助けを求める幻影をがん無視でしゅ！　幻影を見事に見破ったのでしゅか！？　それでも、動揺一つ見せないとは凄いでしゅ、恐ろしいでしゅ！！」
　あぁ、多分、ルシファーは幻影だろうと本物だろうとがん無視しただろうさ。ルシファー、本当に恐ろしい子……。
僕は心の中で呟きながら、わななく黒いローブの男の子を見る。背丈が１３０ｃｍぐらいに見えたが、彼は厚底の靴を履いていて、実際は１１０ｃｍぐらいだった。
「まだまだ、次は大きな鉄球が襲いかかるでしゅ。一度、これをやってみたかったでしゅよ。やはははは！」
　目がギンギラギンに輝いている。小さな子供がサディストに笑う様子は結構怖い。
「わおぉぉぉ！！　巨大な鉄球を軽々と蹴り飛ばしたでしゅ！！」
　野球を見る子供みたいに大はしゃぎだが、見ているものはかなりきつい。相手がルシファーでなく僕だったら、今頃バタンキューになっている。

「さて、次は天井が下りてきて押しつぶしちゃう部屋でしゅ。謎を解かないと部屋から出られましぇーん！」
いつの間に建物内に入っていたのか、辺り一面、森しか見えなかったが。
僕の思考が終わるよりも早く、ルシファーはその試練をクリアしたようだ。
「おぉ！！　謎を解かず、普通に部屋を壊しまちた。凄いでしゅ！！　しかぁし！！次は甘くありませんよ！！」
いや、今までの試練は、恐らく人間には無理だと思います。
「この試練は今までに自分が犯してきた罪を見せる部屋でしゅ。自分の罪の重さにひれ伏すといいでしゅよ！　ははは……うわぁぁ！！　水子の霊が一杯でしゅ！怖いでしゅ！！　この男、どれだけの罪を犯して来たんでしゅか！？　しかも、これまたがん無視でしゅ！！『パパ、パパ』と呼ぶ怨霊も眼中に無いのでしゅか！？」
どうやら、水晶玉の向こうは大変な事になっているらしい。僕は床に倒れていて正解だったようだ。もし水晶玉を覗いていたら、しばらく夜中にトイレへ行かれないだろう。
「まぁ、勇者はすごい精神力の持ち主なんでしょうね……」
「ルシファーはすごい精神の持ち主なのは確かだよ……」
めまいが治まってきた僕が呟く。
水子の霊に怯えまくっていた幼い魔法使いだが、気を取り直して不敵に笑う
「ふふふ。だけど、あと最後の試練が残っているでしゅ！！」

第１８話　魔法使いの試練（後書き）

「全く、なんだよ！　今回の話は！！　ワタルがヒ―ヒ―言っているシーンはナシで、俺ばっかが苦労してるじゃねぇか！！　おい！　作者ぁ！！　キリスト教一派が地球を支配下においた暁には。貴様をぶっ飛ばしてやるからな！　覚悟しろよ！！　破濫蛮情、鬼鬼潰潰。　次回の最弱勇者をましに書かなきゃぶっ飛ばす！！」

第19話　魔法使い、最後の試練！

「全く、腹立たしい。いったい全体、なんだって言うんだ、ここの魔法使いは！　こんな下らない罠を仕掛けやがって、腹が立つ。絶対、ここの奴をぶん殴ってやる！」

俺は掌にもう片方の拳をぶつける。この俺の拳が唸って叫ぶ。全てをぶっ殺せと轟き叫んでいる！！

何かを忘れている気もしないではないが、多分そんな重要な事ではなかったのだろうが。（重要で無い事＝勇者ワタルの事）

俺は乱暴に足を進めながら、次の部屋に向かった。

「うわっ！　なんだ、これ！？」

扉を開けると、少し眩しい光が目を刺した。俺は目を覆った手の隙間から部屋を見て目を慣らす。

そこの部屋は、全て巨大な鏡で覆われていた。

「なんだ、なんだ？　カンフー映画か？　素手で敵を倒せっていう試練か？　まぁ、俺は熊を食う時以外は全て素手で倒してきたが……」

鏡の中でいぶかしげな表情の俺が、なんと二コリと笑った。

「なんだ？　ポケットに手を突っ込んで、赤い石でも取り出すのか？」

鏡の中の俺はそんな事はせず、鏡の中から飛び出して実体化した。

「ほう、鏡の俺と戦え、って事か……。最近手ごたえのある相手がいなかったからな。まぁ、俺以上に強い奴なんているわけがないが……」

俺は凶暴な笑みを浮かべて、戦いのために身構える。今までで最強の相手だ。

？？？？？？？？

「ふふふ、鏡に映った人物と正反対の偽物を作るのでしゅよ。力も同じ、魔力も同じ、頭脳も同じ。しかし、本人とは正反対、つまり本人と必ず敵対するのでしゅよどうやって切り抜けるでしょうかねぇ。やはははは！」

「……世界で一番かわいくない子供だなぁ……」

僕はそんな事を思いながらも、ルシファーがう●この一件を忘れていてくれる事を僕は切実に願う。

？？？？？？

鏡の中の俺はほほ笑み、こちらに近づいて来る。

「よし、どんな相手だろうと瞬殺だ！」

俺は鏡野郎に殴りかかろうとした。

「話し合おうじゃないか！　お互いの事を知りあって、ほほ笑み合えば、世界中の誰とだって友達になれるはずさ！」

「うおっ！！　なんだ、このキラキラさわやか美好青年は！！　本物の俺よりも違った意味で輝きまくっている！！」

俺は明けの明星（ルシファー）なのに、こいつは太陽みたいな輝きだ。

鏡の俺がほほ笑み歯を輝かせる。

「さぁ、共に手を取り合おう！」

「鳥肌立つんだよ！！　消えろ！！」

俺は天使の力の一部を開放して、背中から伸びる光の翼で加速する。ぐっと力をためたて輝いている右手を伸ばし、相手の頭を握りつぶす。

鏡の俺は最後まで輝く笑みを浮かべながら、俺の正面にある鏡と共に、パリーンという音を立てて崩れていった。

「ふぅ、つまらぬ所で必殺技的なものを使ってしまった」

俺はガンマンっぽく、右手で銃の形を作り、指先に息を吹きかける。

「さてと、とっとと魔法使いをぶっ飛ばすかな」

『魔法使いの力を借りるはずなのに、いつの間にか目的が変わっているじゃないか！』と、勇者はツッコム。しかし、残念ながらそれは水晶玉越しで、ルシファーに届く事はなかった。
「しっかし、どうやって外に出るんだ？　これまたぶっ壊せばいいのか？」
正面の鏡が割れても、そっけない壁しか見えない。俺ならば簡単に壊せるだろうが、トオルみたいに軟弱な人間では絶対に壊せそうにない。
「よぉし、覚悟しろ」
俺は肩を回す。準備体操が必要な程ではないが、気分的な物だ。
俺はステップを踏んで、壁を思いっきり蹴飛ばそうとしたが……
「あなたは、ガサツで単純な思考には頭が痛くなります」
突然の声に俺の蹴りは空を切る。
「何のために鏡は一枚では無く、部屋の六面全てに鏡がはめられている理由について、論理的に考えないのですか？」
とても男前で天上の美声が聞こえてくるが、それはとても理知的で硬く、俺はこの上無い程鳥肌が立った。
左側の鏡から出てきた美青年は、なぜか下縁メガネをかけた俺だった。
「鏡一枚一枚から、自分の分身が現れるだろう事は、火を見るよりもあきらかでしょう。あなたは、そんな簡単な……ぶごっ！！」
俺は即効でインテリの腹に拳を叩きこみ、インテリと鏡は粉々になった。
すると今度は右側の鏡から俺の偽物が出てきた。
「す、すみません……。あ、あの……、暴力は…よくないと、思います……。」
おどおどして、へっぴり腰の俺が現れた。
「ふん！！」
俺はアッパーで弱気な俺を砕いた。
すると、後ろからコツコツと、タップを踏む音が聞こえてきた。

「愛、それは男と女が魂で繋がる事。自分の分身を強く乞い、何よりも強い力で惹きつけられる。外見の美しさなど、相手のほんのうわべにすぎない。本当の美しさとは、相手の真心、内面にこそある！」

ロマンス・ルシファーは背後にバラを散らして、高らかと真実の愛について語る。

「うざい！」

俺は拳で、奴の愛についての演説を中断させた。

「あぁ、君は真実の愛を知らない……。可哀想な人……」

ロマンス・ルシファーは無駄にキラキラと輝いて砕けて散った。

「やぁ！　やぁ！　やぁ！　我こそが、偉大なる天使長、ルシファーなり！」

右側の鏡から、やけに暑苦しいルシファーが現れた。

「婦人をかどかわし、弱者（ワタル）を踏みにじり、自堕落な生活を送る愚かなるものよ！　貴殿が行った数々の悪行を、今ここで成敗して…ぶごぅ！！」

俺は暑苦しい俺がセリフを言っている途中でぶっ飛ばした。

「はぁ、はぁ。これで終わりだろうな！？」

俺の中の何かが爆発しそうだった。

「あら、あら、まだよん！　私を忘れないで、ほ・し・い・わ！」

床に敷き詰められた鏡から、鏡の俺が現れ、腰をくねらす。

「あら、良い・お・と・こ？　ムードがいまいちだけど、ここで食べちゃ……いやん！」

俺は無言で、マッハを越えた拳、数千発を当てた。

パタン！

六人の鏡の俺を倒した後、いつの間にか壁に扉が現れた。

その扉を見て、俺は急におかしくなってきた。

「……クックック、アーッハッハ、ハーッハッハ！！」

俺は手を顔に当て、盛大に笑う。

この世に、悪魔の王が君臨した。

？？？？？？？？？？？？？？？

『魔法使い！！　テメェをぶち殺す！！』

「「魚飛（ギョヒ）～！！！！」」

ルシファーに水晶玉越しで睨まれたお子様魔法使いと僕は悲鳴を上げた。

「こ、怖いでしゅ！」

お子様魔法使いが怯える。

「な、な、な、な、ならなんでこんなことをしたんだよ！」

ルシファーの力を知っているがために、僕の怯えも半端じゃない。ルシファーの怒りが魔法使い一人に向けばいいが、う●この一件を覚えていたら、僕も殺される。

「だって、だって……、魔法使（ちゅ）いが、力を貸ちゅ時…、ヒック……、試（ち）練を与えるものでしゅよ」

お子様魔法使いが恐怖のあまり涙を流す。

「ドドドド！！」と、小さなログハウスの床が、小さく振動する。まるで、バッファローの群れがこちらに向かってくるかのようだった。

僕とお子様魔法使いは互いに抱き合いながら、床にへたりこんだ。

床に座り込んだ事が功を奏したのだろうか。

足音が小屋の前に迫った次の瞬間、壁と屋根がきれいにすっ飛んだ。

「「馬逆（まさか）！！」」

ログハウスは床と隣の部屋への扉だけ残され、コントの舞台や、ドールハウスのような形になってしまった。

青空の下にさらされた僕らは、鬼の形相で立つルシファーを見上げた。

「魔法使い様よぉ。どうしても、お礼をさせていただきたいのですがぁ」

ルシファーは鬼々(きき)とした笑みを見せて、優雅にお辞儀をした。
「ゆ、ゆ、勇者よ……。よ、よ、よくぞ、この試練を乗り越えまちた。ぼ、僕、魔法使いマーリンは、あた、あなたに、力を貸ちましょう」
お子様魔法使い、改め魔法使いマーリンは、歯をがちがちさせながらほほ笑んだ。
「……」
ルシファーも無言でほほ笑む。両者のほほ笑みは天と地程の差だ。
「そ、それで、あにゃたの、お望みは……？」
「ひとまず、お礼をしたい」
マーリンは汗を滝のように流している。
「あ、あ、あの……、最後の試練(ちれん)でしゅ。先生(ちぇんせい)、先生(ちぇんせい)！！」
マーリンの呼び声と共に、もう意味をなさないだろう、隣の部屋への扉の向こうから、ルシファーと同等の殺気が漏れてきた。
「クッ！？」
ルシファーが驚き、隣の部屋……、というか扉の裏から生まれる殺気に身構えた。
そして、扉……の残骸が開いて、殺気の主が現れた。
彼、いや彼女はレザーの鎧を身に纏っている。
背中に下げられた二本の巨大なバスターソードが特徴的で……、それが扉の縁に引っ掛かり、部屋の仕切りの壁が音を立てて倒れ、僕とマーリンは転がって避けた。
彼女の髪は空よりも青く、瞳は澄んだ海の色をしていた。
「キ、キリー？」
僕は思わず彼女の名を呟いた。
「へ？　君(ちみ)は、先生(ちぇんちぇい)とお知り合いでしゅか？」
「おう、キリー。奇遇じゃねぇか。どうしてここに居るんだ？」
僕がマーリンの疑問に答えるよりも早く、ルシファーがキリーに声をかけた。
「……話せば長くなる……」

キリーが遠い目をする。
今朝、お昼を食べに行くと置手紙があったが、お昼に迷子になった話だろうと、僕は予測する。彼女には黒豚の時の前科があるのだ。
僕はキリーの話が長くて、話の間に、ルシファーが落ち着きを取り戻してくれる事を祈る。彼は落ち着いても、僕らを半殺しにしそうではあるが……。
「私は昨日、お昼を食べに行く途中、一昨日の変態鍛冶家が借金取りに襲われているのに出くわした」
（また来たか！　変態鍛冶家！！）
「……もちろん、私は無視して、お昼を食べに行った」
僕でも同じ事をするだろうと思い、こくこく頷く。ルシファーとマーリンはよく分からなかったみたいだった。
「私は道中で、いくつかの壁をぶち抜いて、ようやく食堂に辿り着いた」
「ちょっと待って、壁にぶつかったじゃなくて、壁をぶち抜いたなの！？」
不幸な御家族方、ごめんなさい！！
僕はギルド長にますます顔を合わせられなくなった。
「迷わずに食堂へ辿り着く事ができた私は、食事をし、いくつかの壁をぶち抜いて、無事に宿へ辿り着いた」
「どこが無事なの？　どこらへんが無事なの？　町を滅茶苦茶かきまわしているよね！？　しかも、色々と問題がてんこ盛りだけど、君がここに居る理由と直接関係ないよね！？　できればそんな話、聞きたくなかったんだけど！！」
僕のツッコミでは処理が追いつかなくなってきている。
キリーは僕を綺麗にスルーして、話を続ける。
「宿で暇を持て余した私は、昼に見かけた変態鍛冶家から、ダウジングの事を思い出した。」
「あ、一応、そこで繋がってくるんだ……」
僕はかすかに納得する。

「ダウジングをしていると、いつの間にか、ここに辿り着き、魔法使いに会った……。それで私は勇者への試練を引き受ける代わりに、手配書に描いてある魔物の居場所を占ってもらう事になった」
キリーは魔物の手配書の束を見せつけた。どう考えても、胸の谷……いや、懐に収まるような量じゃなかった。
「……そこは、海の魔物退治に手を貸してもらうんじゃ、…ないんだ……」
僕は愚痴をこぼしながらも、視線をキリーの胸からあわてて床に落とした。
ルシファーはなんとなく顎を触る。
「……なるほどなぁ」
彼は顎をなでる手を止め、にやりと笑った。
「……なぁ、知っているか？　魔法使い」
「な、なんでしゅ？」
ルシファーの笑みに、マーリンは怯える。
「お前の隣で震えているガキが、勇者ワタルだぞ」
「えっ、何でしゅって！？」
マーリンは小さな首が折れそうなぐらいの勢いで回し、僕を凝視する。
「こ、こ、こんにゃ、弱そうにゃのが勇者でしゅか？」
「……それに関しては、何も言えないけど……」
マーリンが世界の終りを見たかのような顔をしている。
「で、でも、僕は水晶玉で未来を占ったでしゅ。こんな奴（やちゅ）、映っていなかったでしゅ。てっきり、金髪の美形で心の広いお兄さんが勇者だと思ったでしゅ」
マーリンは少しでもルシファーの怒りを鎮火するため、さりげなく褒める。
「本当か？　お前の占いがいい加減なんじゃねぇのか？」
ルシファーは怖い笑みを浮かべたまま、マーリンを疑う。どうやら、マーリンの褒め言葉は無駄だったようだ。

「そんな事ないでしゅ！　見てみるといいでしゅ！」
マーリンはムッとして、水晶玉に手をかざす。
「水晶玉よ　時を紡ぐ者よ！　世界の命運を握る者達を映しだしぇ！」
マーリンが呪文を唱える。
水晶玉は白く曇った後、三人の人影が現れた。
「あれ？　ワタルが映ってねぇぞ？」
「……」
「ほら、この人は映ってないでしゅよ！」
ルシファーは首をかしげ、キリーは元よりがん無視、マーリンは自分の言った事が正しいとばかりに頷く。
「おい、お前の占いが外れているんじゃねぇのか！」
「ふん、そんな事ないでしゅよ！」
マーリンも自分の魔法の腕を疑われ、腹を立てる。
「……」
僕は沈黙して、水晶玉をじっと見る。
水晶玉の右下にはキリーが、その左には見た事のない猿みたいな男がいる。二人の後ろにはルシファーが堂々と立っているが……。
「ねぇ……、ここに立っている人が見えないの？」
僕は、三人が三角形を作るように並んでいる中心を指差す。
「ん？　誰かいるんでしゅか？　白い霧が見えましゅが……」
「んぁ？　よく見えんが」
マーリンとルシファーが水晶玉を間近で目を凝らす。キリーは目を凝らし、石つぶてで鳥を落とそうとしている。
僕が指を差した所には、白い霧に覆われた、僕の情けない顔が映っている。
「嘘！　なんでこんなにも、目立たないで映っているのでしゅか！？」
「おぉ、流石はワタル！　目立たないスキル全開じゃねぇか！！」
二人の驚きに、僕は声もでなかった。

マーリンはわなわなへたり込んだ。
「なんてことでしゅ、勇者を間違えるなんて……。もっと、勇者らしくして欲しいでしゅ」
少しだけ僕の心が傷つく。そんな事を言われたって、僕にはどうにもならないよ。
二人して落ちこむ僕とマーリンに、ルシファーは最高の笑みを浮かべた。その笑みは、世界崩壊（ハルマゲドン）の前の静けさだった。
「これで、そいつが勇者だって分かっただろう？」
「わ、分かったでしゅ……」
マーリンの股間が少し湿っている。……もっの凄い汗をかいていると言う事にしておく。
「さてと、キリー！」
ルシファーが彼女を呼んだ。キリーは、片手に三メートルを超える怪鳥を引きずってくる。地面には軽く溝が作られている。
「キリーは勇者への試練として雇われたんだよな？　ワタルに試練を与えてやれよ」
「……一度頼まれた依頼は必ずこなす……」
キリーがバスターソードに手をかける。
「魚飛（ギョヒ）！！」
僕は座ったまま、後ずさる
「さてと、俺も魔法使い様にお礼しなければなぁ」
ルシファーが指を鳴らし、マーリンは恐怖で歯を鳴らす。

風景描写を楽しみながら、しばらくお待ちください

迷いの森は自然が溢れた所です。
青い空は、羊の群れの様な雲がゆっくりと風に流されて行きます。
耳をよく澄ませば、どこか遠くで、「死ねぇ！」「試練を…・・」とか、爆発音が……、ではなく、鳥の美しいなき声が…「たすけて

くだしゃい！！」「許して！」……聞こえてきます。
目を閉じて、風に顔を向ければ、土煙の匂……じゃなくて、花や木々の良い香りが漂います。
緑で一杯の木々は……「や、山火事になっちゃうでしゅ！！」……、赤々と紅葉が目立ってきました。
さぁ、みなさんも、迷いの森にハイキングしに来ましょう！

みなさま、大変長らくお待たせいたしました。

？？？？？？？？？？？？？

「……ねぇ、勇者ワタル、でしたよね？」
「……うん」
勇者とちびっこ魔法使いはボロボロだった。クレーターだらけの地べたに、大の字で転がっている。空はどこまでも青かった。
「……僕らは、あれだけの試練に、よく生き残りまちたよね」
「うん……、そうだね」
僕のまぶたや頬が腫れて、一言話すだけでも大変だった。マーリンも同じようだ。
「生き残れた事で、勇者の試練を合格した事にしましゅ……」
彼の言葉に僕は小さく頷いた。
「……ありがとう」
森のどこかで、怪鳥が美しく鳴いていた。

第１９話　魔法使い、最後の試練！（後書き）

「勇者ワタルの、日本語コーナー！！　今回は「魚飛（ギョヒ）―！！」についてです。これは、僕らが驚いたり、悲鳴を上げたりする時に使います。語源は、「魚が空を飛ぶなんてありえない」という事から、驚きの悲鳴として使われると、勝手に考えました。波乱万丈、奇奇怪怪！　次回をお楽しみに！」

第２０話　勇者に眠りし力

迷いの森のとある場所に、魔法使いが住んでいましがた、ルシファーの手によって、小屋は瓦礫の山になってしまいました、とさ。
「はぁ、あなた達に力を貸しゅ前に、新しい家を建てるでしゅ」
魔法使いはポケットから、いかにも毒々しい、赤と白の水玉模様の傘と、人の顔のように見える茎を持つキノコを取り出した。
「ねぇ、マーリン。それって、食べると、体が大きくなる幻覚でも見るキノコかな」
僕が尋ねると、彼は僕を馬鹿にしたように笑った。
「そんなおもしろいキノコでちたら、僕も食べてみたいでしゅよ。残念ながら、幻覚は見ましぇん。ひょっとしたら、走馬灯を見るかもしれましぇんね」
「それって、かなり危険なんじゃ……」
僕は手で口鼻を覆い、彼から数歩後ずさる。
「大丈夫でしゅ。僕みたいに、優れた魔法使(ちゅか)いは、へまをしましぇん」
マーリンは、キノコを地べたに置き、呪文を唱え始めた。
『母なる大地とその子らよ！　おうちを作(ちゅく)って！』
キノコはむちむちと大きくなり、ルシファーが壊した小屋よりも、一回り大きくむっちりとした形になった。
キノコの茎にある人面の形もむちむちと大きくなり、かなり気持ちの悪い外観である。
「できたでしゅ！」
マーリンは手を叩いて喜んだ。
キノコの顔の後ろには扉があり、耳に位置する場所には二つの窓がある。傘からは小さな煙突が伸びている。
「へぇ、まるで妖精とか小人のお家みたいだね」
人面を気にしなければ、可愛くファンシーな家だ。

『それは、それは。光栄でございます、お客様。どうぞ、中へお入りください』
「へっ……」
人面の口が動いて、言葉を発した。前言撤回、かなり気持ちの悪い家だった。
「えっと、君は……」
『私は、この家の執事であり、この家そのものでもあります、お客様』
キノコは誇らしげに言った。誇らしげな顔も気持ち悪かった。
「……マーリンは、こんな魔法も使えるんだね……」
「そうでしょ、そうでしょ！　僕は天才でしゅ！」
僕は嫌そうな顔で皮肉を言うのにも気がつかずに、マーリンは手を叩いて、自画自賛する。ちなみに、ルシファーとキリーは捕まえた怪鳥の丸焼きを頬張っている。
『ところで、ご主人様。私の名前を決めては頂けませんでしょうか？』
「うーん、そうでしゅね……」
マーリンは腕組みをして名前を考える。
「これは、超〜優れ物のキノコでしゅ。だから、名前はスーパーキノ…「却下！！」…」
僕は彼の提案を途中でばっさりと切る。
ルシファーが丸焼きから口を放して、提案してきた。
「じゃぁ、形が似ているから、ペニ…「もっと却下！！」…」
僕は激しく否定する。そんな名前で呼びたくない！
「じゃぁ、ワタルは何が良いんでしゅか？」
否定する僕に、マーリンが聞いてくる。
「えっと……、僕は……」
僕はちょっと焦って考える。
「えっと……、キノコーン？」
「なんでしゅか？　ちょれ？」

「ふん、エロいな……」
二人もまた微妙な顔をする。
「なんで、キノコーンがエロいの？」
なんだか凄く理不尽だ。僕はいじけて、キリーに話を振る。
「ねぇ、キリー。君はなんて名前が良いと思う？」
キリーは最後の一口を頬張ってから、もごもご言った。
「もぐもぐ……、ごくん、……セバスチャン……」
「えっ、セバスチャン？」
「ん、……執事と言えば、セバスチャン……」
なるほど、キノコからではなく、執事方面から攻めてきたのか。
僕はキリーの答えに納得する。
マーリンも手を叩いて、頷く。
「良いでしゅね！　『セバスチャン』。ファーストネームを『セバスチャン』、ファミリーネーム（家としての名前）を『キノコーン』にしてはどうでしょ？　セバスチャン・キノコーンって、なんだか似合ってましゅね！」
『ありがとうございます。ご主人様とお客さま方。私は、セバスチャン・キノコーン。良い名前です』
キノコが礼を述べる。嬉しそうな顔も気持ち悪かった。
名前が決まった所で、マーリンがパンパン手を叩く。
「さぁ、みんな！　入ってみるでしゅよ！」
マーリンが手招きして、キノコの家に興味津々の僕と、怪鳥を頬張るキリーとルシファーは家に入った。
「へぇ！　なかなかな出来栄えじゃん」
僕は感嘆の声を上げる。もちろん、一部屋しかないが、中央のテーブルと小さな台所、そして部屋につるされたハンモックがある。とってもファンシーなデザインだった。ちなみに、御通じや御小水は街の外に捨てに行くのがこの世界のエチケットで、部屋の隅に人が座れそうな壺が在る。
「ふあぁ～！　俺は少し横になる」

「……」
食事を終えたキリーとルシファーは、さっそくハンモックで眠る。
「ふふん。なかなか好評のようでしゅね」
マーリンが椅子に腰をかける。僕も正面に腰をかけるが、マーリンの顔はテーブルに隠れ、彼の帽子だけがテーブルの上に覗ける。
「ふぅー。少し、体が休まるなぁ」
僕は背もたれに寄りかかり、天上を見上げる。すると、部屋の中央の天上からぶら下がる、一本のひもが目にとまった。
「ねぇ、これって何？」
まるで、部屋の明かりをつけるひもみたいだ。この魔法使いの家には、蛍光灯でもあるのだろうか？
「ま、待ちゅでしゅ！！」
「えっ？」
マーリンが慌てて止めようとするが、僕はすでにひもを引っ張ってしまった。
「セバスチャン！　戸締りは大丈夫でしゅか！？」
『大丈夫です、ご主人様。このセバスチャン、抜かりはございません』
セバスチャンの答えに、マーリンはほっと一息つく。
「えっと、何かまずかったの？」
「……あぁ、窓の外を見てみるでしゅ」
僕が窓の外を覗いてみると、白い霧のようなもので覆われていた。
「何これ？」
「それは、セバスチャンの胞子でしゅ」
目を丸くする僕に、マーリンは答える。小さな窓の向こうでは、周りにある木々が一斉に枯れ出したのだ。葉は茶色くなって枝から落ち、幹はしおれて地面に倒れそうである。草も茶色くなって枯れ、地べたが顔を覗いている。それが半径五十mに達しても、まだまだ影響が続いているようである。
「セバスチャンの胞子は猛毒で、十メートル以内にいるドラゴンも

イチコロでしゅよ。窓やドアにわずかな隙間でもあれば、僕達も即死でしゅね。あっ！　ちなみに、煙突など、ただの飾りだ！　でしゅよ」
　こんなのと比べたら、人間の化学兵器なんてゴミの様だ。
「はぁ。なんで、こんなに強力なんだよ」
『お褒めに預かりまして光栄でございます』
「いや、褒めたわけでは……」
　セバスチャンが嬉しそうにするが、僕はげんなりしてくる。
「今日一日は、外に出られなくなってちまいましたが、問題はありましぇん。セバスチャンは自分でエネルギーを作る事ができ、僕らに御馳走をふるまう事ができましゅので、一週間は外に出なくても大丈夫でしゅよ」
「キノコは光合成できないはずだけどなぁ……」
　マーリンの言う事に僕は首をかしげる。
「さてと、状況も落ち着きまちたね」
「これって、落ち着いているのかなぁ？」
　木々は枯れ、鳥は墜ち、魔物達はひっくり返って行く。もし、これがＲＰＧゲームならば、レベルアップのファンファーレが鳴り続けるだろう。それに、風向きが変わって、トンノ・ロッソ王国に胞子が流されれば、海の魔物以上の被害が生まれるのは確実である。
「おや、どうやらワタルしゃんは、魔物２千体を毒殺した事により、『毒の貴公子』の称号を得た様でしゅよ」
「なんだよ、その嫌な称号は？　というか、称号なんて初めて聞いたんだけど、なんか意味あるの？」
　僕は眉をひそめる。
「ありましゅよ。魔物せん滅の依頼が増えたり、その依頼料に色がついたり、その道で開業する事ができましゅよ。称号を集めておいて、損はありましぇんねぇ」
　セバスチャンは天上から植物の根のようなものを伸ばし、テーブルにティーセットを用意する。

「なんだい？　能力が上がるとかさ、なんかないの？」
「おかしな事を言いましゅね？　有名な称号に『ドラゴンキラー』の称号がありましゅが、ドラゴンを殺せる能力があるから強いのであって、『ドラゴンキラー』の称号を手に入れたって強さは変わりましぇんよ。ただ、人間としてのブランドがつくだけでしゅ。まぁ、ようするに、その人が成し遂げた事や、その人が持つ能力を表すんでしゅよ」
　マーリンは椅子の上に立ち上がり、セバスチャンが入れたお茶に砂糖を山盛り入れる。
「ハぁ、英検や漢検と変わらないじゃん」
「えっと、あなたは、『逃走の韋駄天』とか、『危険への超感覚』、『逆境での強運』、『地空海を又にかける猟師』、『サルでもできる交渉術』など、レアでユニークな称号を沢山持っていましゅね」
　マーリンは、お茶をすする。
「最後のは、本の題名じゃないの？」
　なんだか、どの称号も名前からして微妙な感じがした。
「しかし、あなたには、何か隠れた能力があると思うのでしゅ。それが、僕の予知を妨げたと思われるでしゅ」
　マーリンは興奮して拳を握る。予知で失敗した事が、相当悔しかったみたいだ。
　ハンモックで寝ていたルシファーが大きくあくびをして、こちらを向いた。
「ふあぁ～！　それは、ワタルの影が薄かっただけじゃねぇのか？」
「そうでしゅ！　それなんでしゅ！」
　マーリンが大はしゃぎでしゃべる。彼の唾が僕の方に飛んできて、甘すぎる紅茶の薫りに僕は顔をしかめた。
「つまり、僕の影の薄さは、ある種の能力の現れって事？」
　マーリンが興味深そうに頷く。マーリンは椅子の上で帽子を脱ぎ、そこに手を突っ込んで水晶玉を取り出す。
「その可能性がありましゅ。それで、あなたを水晶玉で調べてみた

いとおもいましゅ」
マーリンは椅子の上でつま先立ちになり、水晶玉を抱えてテーブルに乗せようとする。
『あの、ご主人様。私がやりましょうか？』
セバスチャンが心配な様子で、根っこをうねうねさせている。正直言って気持ち悪い。
「い、いいでしゅ。自分でやらなければ、雰囲気が出ないでしゅ」
恐る恐る水晶玉を台座に乗せようとしている。
「あっ！！」
派手な音をたて、椅子をひっくり返して転んだ。もちろん、水晶玉も割れた。
「イタタタ、お尻が痛いでしゅ」
「あらら、水晶玉が割れちゃった」
水晶玉の残骸が飛び散っている。マーリンが破片で皮膚を切らなかったのは、せめてものの幸運である。
「仕方ありまちぇんねぇ。変わりに魔法のレンズを用意ちましゅ」
マーリンはテーブルの上で帽子から大きめの虫めがねを取り出した。
「水晶玉も椅子の上ではなく、テーブルの上で取り出せばいいのに」
僕は水晶玉の破片が床に飲み込まれて行く様子を見ながら言う。
どうやら、セバスチャンが片づけてくれているらしい。
「では、さっそく占いまちょう！」
マーリンがレンズをこちらに向ける。
「ねぇ、それって虫めがねに見えるけど、それで占えるの？」
「大丈夫でしゅ。魔法のレンズより水晶玉の方がカッコいいから使っていただけでしゅ」
マーリン「まぁ」と言って続ける。
「何かを占う時は、何か物を通して見なくてはならないんでしゅ。」
「何か物を通す？」
彼は頷く。

「占うべき相手が目の前にいる場合、水晶玉のように透明な物を通して見る事で、その相手の本質やその未来を見る事ができましゅ」
マーリンが虫めがねで僕を見る。彼の目玉が大きく、その細かい光彩までが見えてしまう。
「そして、遠くにある物や、国や世界などの広い範囲においての未来は、鏡で自分を見る事で占うのでしゅ」
「自分を見る？」
僕は首をかしげる。
「そうでしゅ。世界の一部である、自分という個を見つめる事で、全である世界を占うのでしゅ。夢で予言をする事はよくある事でしゅが、夢で自分を見つめる事で予言をするのでしゅ。占いに興味があれば、ひまな時にこの本を読んでみると良いでしゅよ」
マーリンは帽子から、一冊の本を取り出して僕に渡す。
「ん？　『サルでも分かる占い入門書』？」
本を受け取った僕は著者を確認してみると、『著；マーリン・エムリス』と書いてあった。
「君が書いたの？」
「そうでしゅよ。ベストセラーに選ばれた一冊でしゅ」
マーリンが胸を張って、説明を続ける。
「つまりでしゅね、あなたを占うのにはガラス玉だって十分って事で、実は魔法のレンズもただのガラスでしゅ」
「じゃぁ、最初から虫めがねでいいじゃん。なんで水晶玉なんて使うんだ？」
「だから、カッコいいからでしゅよ。さっき言ったでしょ」
マーリンは虫めがねをくるくる回して、手遊びしている。
「おい！　早く占えよ！」
ハンモックで寝転がりながらこちらを見つめていたルシファーは、僕らの無駄話にしびれを切らしたみたいだ。
「そうでしゅね、さっそく占いまちょう！」
マーリンは虫めがねを通して僕を見る。

『時と光の精霊よ！　我が前にありち者の、未来を見しぇよ！』
マーリンが呪文を唱えた後、僕をじっと見る。僕が虫めがねを見ても、マーリンの目が大きく見えるだけだが、マーリンには何か見えているらしい。
「なんと……、すごいでしゅ……、うん、なるほど」
虫めがねで覗くマーリンの瞳が大きく広がる。彼はしきりに頷きながら、僕を見つめる。
「……で、どうなの？」
「ふむふむ……」
彼は頷いたままで、僕の質問に答えない。
「ねぇ、マーリンってば」
「……」
黙ったまま見つめるマーリンにいらいらしたルシファーは、ハンモックから飛び降りた。
「いい加減、目を覚ませ！」
ルシファーが小指でデコピンする。
「痛いでしゅ！」
マーリンが椅子から転げ落ちて、額を押さえる。
「とっとと、結果を言え！」
「わ、わかったでしゅ！　今すぐに言いましゅから！」
マーリンは額をさすりながら、椅子に座る。
「では、結果を言いましゅ」
マーリンは目を鋭くして、占いの結果を話し始める。デコが真っ赤になっているので、いまいち締まらない。
「あなたの持つ称号は『忘却されし影』でしゅ！」
「ぼ、忘却されし影？」
マーリンの言う称号に、僕は首をかしげる。
「気に入りましぇんでしたか？　なら、『過ぎ去りし影』や、『闇夜の影』とかはどうでしゅ？　けっこう、カッコいいと思うのでしゅが」

「えっと、君が名前を考えているの？」
「そうでしゅよ。称号はその人の能力にちなんで付けるものでしゅからね」
「つまりだ……」
ルシファーが椅子に座った。
「ワタルの影が薄いって事だろう」
二人して僕の影の薄さを熱心に語る様子に、僕は涙をこぼしそうになる。影が薄いだなんて、親父にも言われた事無いのに！
じっと涙をこらえる僕を余所に、マーリンが語る。
「しかし、ただ影が薄いってわけではありましぇん」
マーリンが腕でペケ印を作る。
「ワタルの影の薄さは、ミラクルでしゅ。まず一つ、ワタルは魔物に気が付かれにくいので、魔物に遭遇しにくいです」
「なるほど、どうりで遭遇する魔物が少ないと思ったぜ！」
グサ！！
二人の会話が僕の心に突き刺さる。
「二つ目、気配を悟られないので、魔物に先制攻撃が成功しやすいでしゅ！」
「そうなのか？　まぁ、ワタルはチャンスが来ても、おじけて先制攻撃失敗しているだけかもなぁ」
グサ！
僕の足がふらつく。
「三つめ、意識から外れやすいので、感知・探索の魔法や、予言・遠見の魔法を阻害できましゅ！」
「お前の予言の時も、霧で隠れてしまっていたよな？」
グサグサ！！
僕は床に手をつく。
「そして、一番すごいのは四つ目でしゅ！」
「そ、その四番目は良い物だと嬉しいんだけど……」
僕の心は瀕死のダメージを負っている。これ以上、心に傷を負え

ば、僕は立ち上がれなくなってしまう。
「すごいでしゅよ。自信を持って良いでしゅよ」
マーリンがもったいぶって話す。
「あなたの持つ能力は、全属性魔法を結構優位に使えることでしゅ」
「結構優位に使える？」
マーリンの言葉に僕は首をかしげる。
「いいでしゅか、魔法とは、自分のエネルギーを精霊に送り、精霊の力をこの世に呼び込む事で使いましゅ。そして、基本的に精霊は自分の力を勝手に使われる事を嫌い、僕らの呪文に抵抗しましゅ。中には例外もあって、精霊に好かれて力を貸ちてもらえる人もいましゅが、その場合は必じゅ、それと対をなす精霊との相性が最悪になりましゅ。例えば、火と水みたいなのでしゅね」
「でもさ、僕は影薄いんでしょ？　精霊との相性がいいとは思わないけど……」
僕が疑問を口にすると、マーリンが指を差した。
「そう！　そこでしゅ！　君の影が薄いので、精霊は自分の力を使われても気づかず、呪文に抵抗できないのでしゅ！　いわば、精霊の力を盗みまくりでしゅ！」
ズドーンという擬音語が似合いそうなドヤ顔で、マーリンが説明する。彼の説明を聞いて、僕は新たな疑問が浮かんでくる。
「でも、城で一生懸命に修行したけど、たいした魔法を使えなかったよ？」
「それはでしゅね。おそらく、君には素質があっても、センスがないんでしゅよ」
「は？　どういう事？　素質があって、センスがないって、矛盾しているじゃん」
僕は痛めそうなまでに首をかしげる。
「つまりでしゅね。どれ程良い剣を持っていても、それを扱う技術が駄目ダメって事でしゅよ」
なるほどと、ルシファーが手を叩いて、マーリンの言葉をかみ砕

く。
「どれ程大きな物を持っていても、女を口説くのが下手くそって事か！　そりゃ、宝の持ち腐れだな」
マーリンとルシファーが顔を見合わせて笑う。
マーリンは僕の能力を凄い凄いと言っているけど、僕の能力って結局……、
「微妙〜！！」
僕は迷いの森の中心で、不満を叫んだ。

第２０話　勇者に眠りし力（後書き）

「はい！　学校のテストは、赤点を取らないが目標のワタルです。今回で勇者としての、眠れる能力が現れると思ったのに、微妙な結果でした。これで、魔王を倒せるのかなぁ？　これは、まだ見ぬ聖剣に期待するしかない！　それも微妙だったら、困るけど……。まぁ、後の事は後で悩むとしましょうか。波乱万丈、奇奇怪怪！　次回をお楽しみに！　さっそく、飛空挺らしきものを手に入れるかも！！」

第21話　異世界での移動手段

特殊能力が明らかになった勇者ワタル。しかし、その能力の代償は微妙に大きかった。

「……影薄……ぼそぼそ……時が見え……ぼそぼそ」

僕は部屋の隅っこで丸くなり、一人でぼそぼそ呟き続ける。

『ご主人様、もう少し言い方というものがあったのでは？』

「ぷー、面倒でしゅね」

マーリンは、はちみつたっぷりのミルクを飲む。「ぷはーっ！」とか言っている所が、大人のまねをする子供だ。

ルシファーとキリーは、きのこスパゲッティーをフォークいっぱいに巻いて、口に運ぶ。あれから、夜になるまで、僕はずっとぶつぶつ言っている。

「ちかしでしゅね、ここで勇者を待っているのも、本当に退屈でちたよ。勇者はまだか、まだかと待っている内に、試練の罠を作りしゅぎてちまいました。勇者の精神を試す、サキュバスの罠とかの出番もありましぇんでしたねぇ」

「その罠、今すぐ出せ」

マーリンの愚痴に、ルシファーがくいついて来る。

「残念、もう雇用期間が過ぎてちまいまして、サキュバスのシュジュキさんは帰りまちた。最近、召喚魔法の雇用体制が厳しくなりまちてね、色々と面倒なんでしゅよ」

「はぁ、召喚の雇用体制？　そんなもんがあるのか。じゃぁ、ワタルはいったいなんだよ」

「う～ん、事故やもぐりの召喚、又は神や運命に定められた召喚かのどちらかっと言う事でしゅね。まぁ、後者だと僕は思いましゅが」

語るマーリンの口周りについたミルクを、セバスチャンの根っこが拭きとる。

「通常の召喚魔法は、同じ世界の者か、又は世界の狭間に存在する

専門学校の卒業生と契約して呼び出すのでしゅよ。僕も通っていた事がありましゅよ。半年で飛び級卒業ちましたが」
マーリンは懐かしむように、学校について語る。
「ほー、そんな話は初耳だったな。召喚も面倒なんだな」
ルシファーが適当に相槌を打つ。半分くらい、聞き流しているようだ。そんな彼の様子に気が付かずに、マーリンは自分の考えをずらずら述べる。
「この世界の住人に、もぐりの召喚が出来る魔法使いはいないでしょうから……。きっと、ワタルは運命に導かれたのでしゅよ。彼の影薄には、絶対に意味があるのでしゅ！」
マーリンが自信満々に、隅っこで丸くなって何かを呟いている僕を指す。
「運命ねぇ。本当にこんな弱虫根暗が、世界の命運を握っているのかねぇ。天界に戻る為でなかったら、こんな奴についていかねぇぞ、俺は。まったく、神もミカエルも視力が落ちたんじゃねぇのか？」
ルシファーが僕の分のスパゲッティーに手を出しながら言う。
「……僕も食べる」
影薄とか、根暗とか、勝手な事を言われて落ちこんでいる人から、食事をとらないで欲しい。僕は、ルシファーが一口食べてしまったスパゲッティーを取りして食べる。
少し涙ぐみながらスパゲッティーを口に運ぶ僕の様子を見て、マーリンは思い出したかのように言う。
「あぁ、そう言えば、あなた達はどうしてここに来たのでしゅか？」
マーリンの気の抜けた発言に、僕とルシファーはフォークを落とす。
「……もしかして、僕達が君に会いに来たのか、知らないであんな無茶な試練を仕掛けたの？」
「おまえ……、とことん俺をこけにするつもりか！？」
僕のあきれた声と、ルシファーの険しい声が重なる。
「い、いやぁそのぉ……。占いで、勇者がこの森に来る事は分かっ

ていたんでしゅけど、どんな理由でここに来るかまでは、知らなかったのでしゅよ……」
ルシファーの睨みに、マーリンは慌てて言い訳をする。
「そ、それで、いったいどうしたのでしゅか？」
勇者は魔法使いに、これまでの事を説明した。
「なるほど……、これは便利なフレーズでしゅね。ただでさえ、この作者は無駄な描写が多いでしゅからねぇ。エコが騒がれているこの時勢に、資源を節約できましゅ」
「……いったい、何に感心しているの……？」
しきりに頷くマーリンに、僕は疑問を投げかけるも、無視された。ナイス・スルー。
「ふむ。では、ワタルに水面歩行魔法を伝授しましょう！」
「ようやくここまで辿り着いたか。ぜひ、お願いするよ」
僕はマーリンにお礼を言う。
「では、まずはこれから始めましょうかね」
マーリンは帽子から本を取り出す。
「へぇ、これが水面歩行の魔導書？」
僕は青い背表紙の本を手に取る。本を開くと、古い本特有の、鼻につんとくるような匂いがする。ページの端は少し擦り切れ、インクもかすれて薄い所もある。
「いや、それは魔法物理学の本でしゅ。何事も、基本から始めないとだめでしゅよ」
マーリンは次々と帽子から本を計七冊取り出した。
「うへっ」
勇者の目の前は真っ暗になった。

◆◇◆◇◆◇

「はぁ……、なんだかんだで、朝になっちゃたなぁ……」
僕は大あくびをしながら、立ちあがる。ルシファーとキリーはもとより、マーリンも寝ている。まぁ、彼は子供だから仕方ないかもしれない。
僕は再び大あくびをする。
「弱い僕は　生き残るため　　必死にもがいてあがく♪」
僕は死んだ魚のような顔をし、潰れたヒキガエルのような声で歌う。
「なんだかんだで　てんやわやで　　慌ただしい朝が来る♪」
僕はゾンビみたいなスローペースでターンする。
「あぁ　こんなに不安で　苦しくなっても　　死にたくなけりゃ進むしかない♪」
「朝っぱらから、うるさい」
ルシファーが、僕の頭にりんごを投げつける。かなり痛い。
「だって、自分ひとりで頑張ったのに、みんな寝ているなんてむなしいじゃん」
僕はたんこぶをさすりながら不平をもらす。
「歌う余裕があるって事は、水面歩行の魔法は完璧なんだろうな？」
「大丈夫だと思うよ、理論的には。ここじゃ、湖がなくて、試せないけど」
僕は大きくため息をつく。一度も実践せずに、理論りろんリロンでは、嫌になっちゃうな。
僕はのそのそとハンモックによじ登る。
「ふあぁ～！　おやすみ……Ｚｚｚ」
「起きろ！」
「エヴァッ！」
ルシファーが僕のハンモックをひっくり返し、僕を床にたたき落とす。顔やら、胸やら、足やらが痛い。そんな中でも、股間を強打しなかったのは、不幸中の幸いとしか言いようが無い。
「おい、ワタル。とっとと、海の魔物を倒しに行くぞ！　俺は一刻

も早く、天界でうはうはしたいんだよ」
ルシファーに僕は頭を踏まれ、ごりごり痛い。
「痛いイタイ。……キリーとマーリンはまだ寝ているんだから、もう少しいいじゃん」
「なら、今すぐ起こせ！」
「分かった、マーリンは僕が起こすから、キリーはルシファーが起こして」
ルシファーは僕の手をかかとで踏む。
「俺は、お前を起こした。今度はお前が二人を起こす番だ。さぁ、勇者ワタルよ。二人を深淵なる闇より二人を呼び戻すのだ！」
「……なに予言者っぽく言っているの？　ただ、二人を起こすだけなのに……」
僕は恐る恐る、キリーのそばに近寄る。
彼女は空色の髪をわずかに乱し、その長く天使（ルシファーを見た時点で、僕の中の天使像はがらがら崩れてしまったが）のようなまつ毛は上下で重なり合っている。規則正しい、静かな寝息が聞こえ、そのたびに胸がわずかに上下する。その上下する胸の上で交叉された二本の細くもしなやかな腕の中に、双子のバスターソードが抱きかかえられている。
「……なんか、かなり怖いのですが……」
「さぁ、行くのだ。勇者ワタルよ」
ルシファーが神妙なセリフを吐き、僕の尻を蹴ってくる。
「キリー！　起きて！」
僕は少し離れた所から呼びかけるが、彼女は一向に起きる気配を見せない。
「よし、彼女をゆするんだ！」
「や、やてみるよ。やればいいんでしょ……」
僕は手を出そうとして、考え直す。
「なんか、どうでもいいものは無いかな？」
僕は王家の猟銃袋を探り、未完成の銛を取り出す。変態鍛冶家が

泣こうが喚こうが、僕の知った事ではない。
　銛を逆に持ち、持ち手の部分をキリーに近づけてゆく。
「キリー、起きて」
　キーン！
　銛が彼女に触れるやいなや、彼女の剣によって、銛が僕の手からはじき飛ばされた。
　くるくる回った銛は、天上に深々と突き刺さった。
『ぐおぉぉぉ！！　痛いです～！！』
　セバスチャンが、四方八方から響いて来るような悲鳴を上げ、盛大に体を揺らす。騒ぎで家が揺れるのはギャグ漫画の定番であり、サ●エさんも顔負けのあり様だ。
　もちろん、ギャグ漫画と違う。これは単なる表現などではなく、現に、実際、その実、本当に家が揺れているのだ。家の中にいる僕らも、たまったものではない。
　僕とテーブルは床でひっくり返り、ルシファーは不機嫌な顔で立っている。しかし、天上でつるされたハンモックの中にいる二人は、それほど被害は無かったようだ。それでもさすがにセバスチャンの叫び声は聞こえたらしく、眠たげに目をこすって起きる。
「ーんん……、いったいなんでしゅか、騒々しい……」
　マーリンは大あくび混じりで文句を言う。キリーも無表情だが、少し機嫌が悪いらしい。
「マーリン、もう朝だから、海の魔物を…『そんなことより、早く銛を抜いて下さい！』…」
　僕の言葉を遮って、セバスチャンが声を荒げる。まぁ、もっともな話だ。
「あぁ、その。その銛は暫くすると、僕の手元に戻ってく…『待っていられません！』…」
「わ、分かったよ。今抜く、抜くから」
　僕は深々と天井に突き刺さった銛に手をかけ、思いっきり引っこ抜いた。

『イタイ〜！！』再び、セバスチャンが盛大に揺れる。

◆◇◆◇◆◇

「ふあぁ〜！　なんか、うるさくて目が覚めてしまいまちた」
「うそつけ」
マーリンは目をとろんとさせながら、文句を言う。
「……では、トンノ・ロッソまで、移動すればいいのでしゅね……。セバスチャン、後は頼んだでしゅ。おやすみ…Ｚｚｚ」
マーリンはセバスチャンに何か言うと、再び寝てしまった。
「ちょっと、マーリン！　起きてよ！」
『大丈夫ですよ。私にお任せ下さい』
僕が困った顔でマーリンを起こそうとすると、セバスチャンが僕に話しかけてきた。
『さぁ、トンノ・ロッソまで、移動しますよ。みなさん、席について、シートベルトを装着してください』
「いや、シートベルトって、どこにあるのさ？」
僕は嫌な予感がした。
『セバスチャン、トランスフォーメンション！』

◆◇◆◇◆◇

「王様！　王様！　大変でございます！　西から、何かが猛烈なスピードで近づいてきます！」
近衛兵が悲鳴じみた報告をしてくる。
「なんだと！　海の魔物の次は、空から別の魔物が襲ってくるのか！　くそ、この国は呪われているのか！　我々が何をしたというのだ！」
トンノ・ロッソの国王は、近衛兵の制止も聞かず、近くのテラスに出た。

「何だ！　あれは！？」
西の空から、赤と白っぽい物がどんどんと近づいて来る。あっと言う間に、それが城の真上まで来た。
「うわぁぁ！」
王様は慌ててテラスに身を伏せた。謎の飛行物体は、一番高い塔の一部を削り取って去って行った。
王様は城の瓦礫から身を伏せる直前に見た物を思い出して怯える。
「な、なんだ。あの人面キノコは！？　新たな魔物か！？」

◆◇◆◇◆◇

「……うぅぅ。酷い目にあった」
僕は懸命に吐き気を堪える。セバスチャンは、根元からジェットを、茎から飛行機の羽みたいなのを出し、まるで戦闘機のように飛んだ。荒れた海の中に船を出し、その上でぐるぐるバットをしてもここまで酷くはないだろう。
ルシファーはけろりとした顔をしている。飛んでいる最中、僕は物凄いGにより、床にへばりついていた。しかし、ルシファーは襲いかかるGにより、床に二本足で立っていた。神技である、いや、天使技か。ちなみに、Gとは、ゴキブリの事では無く、慣性の法則による力である。
しかし、ルシファーの凄さは分かるが、キリーとマーリンがハンモックの中で熟睡していたのには、とても驚いた。
『大丈夫ですか？　ちゃんと席についてくれれば、楽でしたのに』
「席って何？」
吐きそうな顔でセリフを吐く僕に、セバスチャンは説明する。
『すみません、ハンモックの事です。ハンモックには、揺れなどを除去し、安眠できる魔法がかけられています。ついノリで、席なんて言ってしまいました』
謝りながらも、少しセバスチャンは笑っているようである。恐ら

く、銛の一件を根に持っていたに違いない。キノコなだけに。
『それですみません。トンノ・ロッソ王国を通り過ぎてしまいましたので、また飛んで行きたいと思います。準備はよろしいですか？』
「おう、いいぜ」
「もう、ここから歩いて行くよ！」
ルシファーはおかしげに返事をし、僕は泣き喚いた。

第２１話　異世界での移動手段（後書き）

「こんにちは、飛行機に乗った事のないワタルです。全く、セバスチャンの能力には涙が出てきます。ファンタジー世界では、空を飛ぶ乗り物は定番ですが、キノコハウスが空を飛ぶのはこれが初ですよ。セバスチャンで体当たりすれば、たいていの魔物を倒せちゃう気がします。空でなら、敵なしですね。ＲＰＧでドラゴンに乗った主人公たちが魔物とエンカウントしないのは、ドラゴンに追いつけないとか、ドラゴンに勝てないからという理由なのかもしれませんね。では、みなさん。今日はここまで。波乱万丈、奇奇怪怪。次回をお楽しみに！

第22話　リフォームしましょう！

「はぁー、なんで俺がお前にあわせてトロトロ歩かなきゃならねぇんだ！？　セバスチャンで飛んで行けばいいのによぉ」
ルシファーは不満たらたらだ。
「歩いた方が健康にいいよ。セバスチャンに乗れば、乗り物酔いを起こしちゃうもん。ね、キリーもそう思うよね」
「……セバスチャンの方が楽で、なにより迷子にならない……」
「ハンモックには揺れやGを取り除く魔法がかかっているので、問題ないとおもいましゅが……。僕はセバスチャンで飛んだ方が楽でしゅ」
キリーとマーリンは僕に文句を言う。ちなみに、マーリンはテーブル大になったセバスチャンの上に座り、セバスチャンが複数の根っこで歩く。マーリンは飛ぼうと歩こうと、セバスチャンに乗っているので、疲れないはずだが、子供がじっとしているのも精神的に疲れるのかもしれない。
僕は銛をついて歩き、マーリンはセバスチャンに乗っている。ちょうど四人でえっちらおっちら旅をする様子は、まるで西遊記のようだ。僕の脳内でガン●ーラが響く……、というかセバスチャンが歌っていた。
「……セバスチャン、なに歌っているの？」
『過ごしやすい環境を整えるのは執事の役目です』
僕があきれ顔で聞くと、セバスチャンは当然のように答える。
『これがお気に召さないようでしたら、フィールド、街、城、ダンジョン、戦闘からボス戦まで多彩なバリエーションをご用意しております』
「いや、それは別に執事の役割じゃないと思うけどねぇ」
僕はため息をつきながら歩く。これまでに何回ため息をついたのか、逃げた幸せの量は計り知れない。

◆◇◆◇

そうやってトンノ・ロッソ国に戻って来た時には、すでに太陽が高く登り、お昼ご飯の時間になっていた。

町に入る関門には、二人の兵士が厳しい顔つきで立っていた。

「旅の者か？　この国に、どのような用事できたのだ」

「えっと、僕は昨日ギルドの依頼で外に出たワタルと申します」

「そうか、今確認する」

兵士はそう言うと、帳簿のような物を手に取り、確認する。

「幼児はいなかったはずだが、こちらの記録ミスかな？」

「えっと、その、そうだと思います」

僕は慌てて返事をする。こんな幼児が、魔法使いだなんて普通は信じられないだろう。

「すまんな、普段はざるのような警備だからな。今、普通に働いているように見えるだろうが、これでも警戒を強めた方なんだ」

兵士は照れたように言う。

「なんで警戒しているんですか？　海の魔物の事ですか？」

「海の魔物の事ではないよ。本来ならそっちも必死に対応しなければならないのだろうけど、海の魔物は陸にあがって来ないからね。ちょっと危機感が足りないようだ。でも、これは別の話なんだ。なんでも、お城が襲われたらしい」

「お城が襲われた！？」

兵士の深刻な話に、僕はすっとんきょな声を上げる。

「あぁ、城のてっぺんを破壊されたらしいぞ」

「いったい、どんな相手なのですか？」

僕が聞くと、兵士は難しい顔をする。

「いや、多くの人が見たらしい……、いまいち、俺は信じられないが、なんでも巨大なキノコが空を飛んで襲ってきたらしいのだよ」

なんか、これまた心当たりがあるような……。

もう一人の兵士も食いついてきた。
「あぁ、なんでも王様も直々に見たそうだ。そのキノコの魔物は毒のような物をまき散らしたのだ。量が少なかったせいか、城の者たちは具合を悪くしただけで助かったそうだ。全く、この国はどうなるのだか。昨日だって、魔物に家を壊された人が十数人いるのだよ。本当にてんてこ舞いだよ」
「あ、あのう。もう行ってもよろしいでしょうか？　僕達、急いでいるもので」
「あぁ、いいよ。こんな時勢だが、本当ならこの国は良い所なのだよ。この国の良い所をお見せできなくて、残念だよ」
兵士は困ったように笑う。
「そうですか、ではお元気で」
僕らは……、いや、僕は急いで門を通過した。三人はゆっくりと歩き、特にマーリンがセバスチャンに乗っている様子が憎たらしい。セバスチャンを小さくしてしまってほしい。
「あれ？　キノコ？　まさかな、ただの偶然だ。あんな小さなキノコが空を飛んで城を壊せるわけがないしなぁ。うんうん。あれ？　でも、魔物に家を壊された時期と……」
何かを呟き続ける兵士を後にし、僕らは宿屋に向かった。

部屋をとった僕らは、森の魔術師であるマーリンを連れて来た事を報告しに行く。もちろん、ルシファーは美女と遊びに行った。キリーとマーリンが付いてきてくれたのは運が良かったが、マーリンはセバスチャンをしまう事に駄々をこね、説得するのに大変だった。セバスチャンがいたら、ギルド長に城を壊したのが僕達だとばれてしまう。これ以上、あのじじーに強請られるネタを提供したくない。
僕が恐る恐る冒険者ギルドの扉を開くと、がらんとした空間が僕らを出迎えた。
「うわー。広いでしゅ～！　部屋の中でおいかけっこが出来そうで

しゅね」
マーリンが目を輝かせて走り回る。歩いて移動するのは嫌でも、走って遊び回るのは好きらしい。
マーリンがはしゃいでいると、不機嫌なギルド長が出てきた。
「こりゃ！　部屋の中で走り回るな！　たっく、この子の保護者は誰だ……って、お前か！？」
ギルド長が僕を見て、驚いた声を出す。
「お前、昨日迷いの森に行ったばかりなのに、もう帰って来たのか？」
どうやら、僕らが戻ってくるのに数日はかかると、ギルド長は考えていたらしい。まぁ、勇者として召喚された僕は、近衛兵と同等の実力でしかないし、ルシファーも武器らしいものを持っていない。彼はあくまでもキリーの実力を買って依頼してきたわけで、そのキリーとはぐれたと報告したのだから、戻って来られるかどうか怪しく思っていたに違いない。
「いや、運良く魔法使いに会えまして。報告しに来ました」
「そうか、早いに越した事は無い。……で、魔法使いはどこだ？」
ギルド長は僕らに視線を向ける。
「僕でしゅよ」
マーリンがギルド長のズボンのすそを引っ張る。
「……この子供が？　冗談も程々にしろ！」
ギルド長は、きょとんとした顔をじょじょに赤らめていき、怒りを爆発させた。
「嘘じゃないでしゅよ」
マーリンも疑われ、不機嫌になる。
「あの、こちらのマーリンは優れた魔法使いですよ」
「じゃぁ、その証拠を見せて見ろ！　魔法使いなら、魔法の一つでも使ってみろ！」
僕が口を出したら、ギルド長に罵倒された。マーリンもむきになって、腕を回す。

「いいでしゅよ。どんな魔法がいいでしゅかねぇ……。そうだ、流れ星の魔法はどうでしょう！」
僕は首をかしげ、ギルド長は馬鹿にしたように笑う。
「はっ！　流れ星の魔法？　昼間に使えるのか？」
「ふん、使えましゅよ」
マーリンが小さな腕を組んで、ギルド長を見上げる。
「ほう、なら頼もうではないか！　お願い事を三つ言えそうだ」
「ふふん、見て驚くがいいでしゅ！」
マーリンは椅子によじ登って、テーブルの上に登った。彼はテーブルを踏みつけると、小さな腕を大きく動かして、サッカーボール大の円を描く。
「ここに、これぐらいの大きさの流れ星を落とちてみせましょう！」
「ちょっと待った！！」
僕は慌てて待ったをかける。
「なんでしゅか？　せっかく気分がのってきたのに」
僕は両手でマーリンの顔を挟み、彼の目を覗きこんだ。
「お前は、空に流れ星を流すのでなく、流れ星をここ（・・）に落とすつもりなのか！？」
「もちろんでしゅ。願い事をいくつでも言えるでしゅ」
「なんじゃと！」
マーリンはあたりまえのように頷き、ギルド長は驚きでカバみたいに口を開けている。
僕はてっきり、空に流れ星を流す魔法だと思っていたが、どうやら隕石を堕とす魔法だったらしい。いくら堕ちて来る流れ星がサッカーボール大だとしても、冒険者ギルドの壊滅は確実であり、この国にどれくらいの被害を与えるかはかりしれない。
「それは困る、それは困る！　マーリン、もっと安全で、何も壊さない魔法にしてよ」
「うーむ、そうでしゅねぇ。どんな魔法がいいでしゅかねぇ。色々あって、迷うでしゅ」

マーリンは少し迷うようなそぶりを見せた後、何かを思いついたかのように明るい笑顔を見せる。
「そうでしゅ、このしみったれた建物をリフォームちましょう！きっと、人が集まる事、間違いなしでしゅ！」
マーリンの失礼な発言に、ギルド長の顔が険しくなる一方だ。
「では、いきましゅよ！」
マーリンは目を閉じ、精神を集中させる。
『母なる大地の恵み、それを受け取り巡る命！　このしみったれな建物を素敵にちて！』
マーリンが振った人差し指から、光が溢れ、建物全部を包み込む。
「うわっ！　眩しい！」
僕が手で目を覆っていると、光が薄れていったので、恐る恐る目を開けてみた。
「あれ、なんだか甘い匂いが……って、なんじゃこりゃ！？」
僕が立っている床は板チョコ、壁はホワイトチョコに変わり、マシュマロや色々なお菓子が飾り付けされている。テーブルは細長いクッキーで支えられた様々な種類のケーキになり、椅子も細長いクッキーをチョコで接着して作られている。天井はチョコ、ホワイトチョコ、イチゴ味のウエハースがびっしりと敷き詰められ、そこから飴細工のランプが下がっている。
「すごいでしょ！　僕は天才魔法使いでしゅ！」
マーリンは笑って喜びながら、テーブルのケーキに飛びつく。ケーキは少しも壊れずに、マーリンをふんわりと受け止める。
「……こっちの掲示板の文字も、チョコで描かれている……」
キリーは掲示板をかじりだす。
「この窓は飴で出来ている……甘い」
僕も飴の窓をペロペロ舐める。空色の窓はソーダ味だった。
「こら！　わしのギルドを食うな！　最近のギルドの経営が悪いから、他人に奪われる事も覚悟していたが、こんな奪われ方は想像しとらんかったわあぁぁ！！」

ギルド長のサルモーネさんは、まるで焼いた鮭のように顔を赤くて怒鳴った。僕は思わず口を止めるが、もちろんキリーとマーリンは口を止めない。
「うーん、このギルドは最高でしゅ！」
「ガツガツ、もぐもぐ、バリバリ、もぐもぐ」
マーリンは腕を振り回して喜び、キリーは一心不乱に食べる。
ギルド長はなんとかして二人を止めようとしていると、玄関の扉が開いた。扉はビスケットとチョコでできていた。
「おぉ、ここが最近できたデートスポットか！」
「「「キャァー！　かわいい！　美味しそうねぇ！」」」
ルシファーが美女三人を連れてきた。
最近出来たと言うか、今出来たばかりなのだが、いったいどういう情報のまわり方をしているのだろうか。
ルシファーは甘い物がそんなに好きではないらしく、連れてきた美女達がお菓子を食べ始めた。
「あら、美味しすぎるわ。食べ過ぎて太っちゃたらどうしいよう！」
「なら食うな！！」
お菓子を食べる美女に、ギルド長は怒鳴る。怒鳴りすぎて、血管がはち切れてしまいそうだ。
「これ美味しいわよ。ルーちゃんも一緒に食べればいいのに」
「ルーちゃんは甘い物が嫌いなのよ」
「ふふ、何言っているのよ。ルーちゃんの御馳走は……」
「「「わ・た・し・達！　キャー！！」」」
三人の美女は声をそろえて騒ぐ。
「はは、そうだな。俺はわる〜い、悪い魔法使いだぁ。お菓子を食べた子供をぺろりと食べちゃうぞ〜！　Ｔｒｉｃｋ　ｏｒ　ｔｒｅａｔ！　犯しが良いか？　それとも、いたずらがいいか？」
「「「キャー！」」」
ルシファーと美女達はわざとらしく追いかけっこをする。
僕が茫然とその様子を見ていると、外から子供達の声が聞こえて

きた。
「うぉー！　すげー！　ギルドがお菓子の家になっているよ！」
「うまいぞ！　マシュマロもある！」
お菓子を食べる音が聞こえて来る。どうやら、外もステキな造りになっているようだ。
「やめてくれー！　というか、お前達も食うな！」
ギルドのおばちゃんと娘もお菓子を食べていた。
さすがにギルド長が憐れになって、僕はマーリンのフードを引っ張った。
「ねぇ、元に戻してあげたら。ギルド長はちっとも喜んでないよ」
「……ちえっ！　分かりまちた。さてと、『元に戻れ！』でしゅ」
マーリンが指を鳴らそうとして、失敗したが、光は溢れて魔法が解けた。どうやら、指を鳴らす事にあまり意味はないようだ。
しかし、魔法を解いたと言っても、お菓子の魔法を解いただけだ。冒険者ギルドは荒れ果てた廃墟みたいになっている。
「えー、お菓子じゃなくなっちゃった。ムードが出てこないわね」
「はぁー、お菓子プレイは諦めるしかないわね」
魔法が解けて、がっかりする美女たち。しかし、いったいお菓子の家に何を期待していたのやら……。
「よし、続きは宿でするか」
「「「はーい！」」」
ルシファーは僕らを無視し、美女達と共に出て行った。
「……ルシファー、相変わらずの堕天使っぷりだな……」
人（※美女限定）が道を外していく様がありありと見える。よく、ナンパで女性を落とすと言うけど、ルシファーは本当に女性を堕としている。まっとうな社会から堕ちてゆくよ。
僕は深くため息をつく。
「じゃぁ、マーリン、キリー。僕達も帰ろうか」
僕が扉に向かうと、ギルド長に強く肩を掴まれた。
「待て、このありさまを、なんとかしてもらおうか」

「……やっぱりそうですよね、分かりましたよ。なんとか考えますよ」
僕は両手を上げて降参する。
「あたりまえじゃ！」
ギルド長もかんかんだ。まぁ、自分の家を壊されれば、誰だって怒るだろう。
「ねぇ、マーリン。これ、元通りに戻せる？」
「うーん、難ちいでしゅね」
マーリンが困った顔で腕を組む。どうやら、彼の魔法の力を持ってしても、元に戻す事は難しいらしい。
「なんたって、このギルドがどうなろうと、僕には興味がありましぇんからね。興味の無い魔法を成功させるのは難しいのでしゅよ」
「なんじゃと！　父から受けついだギルドをどうでもいいと！」
マーリンがさらりと酷い事を言う。
僕が必死に考えていると、一つだけ名案が浮かんだ。
「そうだ、マーリン、後であれをしてほしいな」
僕がマーリンに名案を伝えると、彼は頷いた。
「ギルド長、こちらの魔法使いマーリンが新しくギルドの建物を作ってくれるそうです」
「ほう、では今すぐお願いしたいな」
ギルド長は疑うようにこちらを見る。
「じゃぁ、マーリン、頼んだよ」
「分かったでしゅ。任せなしゃい！」
マーリンはエッヘンと偉そうに言う。
そして、トンノ・ロッソ国の冒険者ギルドの建物は、青の水玉と、緑色の水玉模様の人面キノコハウスが仲良く並ぶ事になった。セバスチャン二号と三号だ。

第２２話　リフォームしましょう！（後書き）

「はーい。お菓子の家を食べてみたい、ワタルです。お菓子の家の元と言えば、ヘンゼルとグレーテルですね。しかし、不思議です。家をお菓子にすれば、虫や動物に食べられたり、雨でふやけたり、腐ったりするはずです。保存するのに、大変な苦労をしそうですが、そこは魔法を使っているのでしょうか？　悪い魔女が不思議な力を持っているのであれば、普通に子供をさらって食べたほうが早いのでは？　第一、お菓子の家は子供たちを罠にかけるためのものでしょう？　森の奥深くでお菓子の家を発見するのであれば、それはその子供たちが森の奥深くに迷い込んでいるのです。別に、お菓子の家でなくたって、普通の家を建てれば、子供たちはその家に助けを求めに行くはずです。魔女はお菓子の家を保存する必要もなく、子供たちを捕まえられるはずですよね。まぁ、童話ですから、あまり深く突っ込まない事にしましょう。

では、波乱万丈、奇奇怪怪！　次回をお楽しみに！

第２３話　謎の襲撃

「ねぇ、キリー。何か見つけた？」
「……一生懸命探せ」
キリーは彼女が”目標”と呼んでいる、魔物の情報がずらりと並んでいる紙の束を見つめている。僕も最初の内は冒険者ギルドの依頼なのかと思っていたが、どうやら違うみたいだ。キリーが受けている依頼は、未だに謎のままだ。
「はぁ、依頼の魔物がちっとも見つからないなぁ」
僕はため息をつきながら、獲物を探し歩く。

◆◇◆◇

「わしのギルドが、わしのギルドが……」と、うわごとを呟き続けるギルド長を放置して、僕らは宿屋に戻った。なんでも、ギルドのおばちゃんと娘のアリーチェさんの話によると、僕らが戻ってくるのは予想よりも早かったので、出航する船の準備がまだできていないらしい。明後日、またギルドを訪れるように言われた。
僕はセバスチャンで空を飛んで行こうと考えた。セバスチャンの話によると、彼はジェット機のように飛ぶだけでなく、傘を高速回転させ、ヘリコプターのように飛ぶこともできるらしい。
しかし、キノコなだけに海が弱点らしく、高度２００メートル以上でないと、潮風で墜落してしまうらしい。それは、それは●の内ビルよりも高い。
無論、そんな高さから海に落ちれば僕は死ぬだろうし、空を飛ぶ魔法もまだ覚えていない。ルシファーが男を抱いて空を飛ぶなんてありえないし、キリーも悪竜から得られた力で空を飛べるものの、その制御は不安定らしい。上空から着地したキリーなら、２００メートル位ひょいと飛び降りそうで、僕としてもキリーと一緒に飛ぶ

のが怖い。マーリンと一緒に空を飛ぼうとも考えたが、彼の小さな箒を見た時点で諦めた。お尻が半分位までしか乗れそうにない。
そんな訳で、ルシファーは美女とイチャイチャ、マーリンはお昼寝、僕とキリーは冒険者ギルドで依頼を受けて金を稼ぐ事にした。ルシファーとキリーの遊び代と食費が僕の懐に冬をもたらすのだ。世界が救われるのが先か、路銀が尽きて僕の人生と世界が闇に覆われるのが先か、もうすでに熾烈な争いが始まっているのだ。
ギルドの依頼には、海の魔物と謎の飛行キノコの魔物の依頼があったが、無視をすると、狩りの依頼しかなかった。驚くべき事に、普通の動物はもちろんの事、弱い魔物から強い魔物も狩りの依頼に含まれていた。食べられるかどうかは魔物の種類にもよるが、以前、僕が魔法で溺死させたテディベアという熊の魔物もランクCに含まれ、結構な値段で取引されているらしい。熊の手が珍味だとか。
狩りの依頼は、依頼主の依頼を直接受けるわけではない。なぜなら、狩りは上手く狙った獲物が手に入るとは限らない。熊の魔物の依頼を受けても、手に入るのはウサギの魔物の可能性だってある。そうなったら、狩人や飲食店だって困る。そこで、ギルドが冒険者から獲物を買って売るシステムがあるのだ。
僕がキリーに狩りの依頼を受けると言うと、食欲旺盛な彼女は真っ先に頷いた。
そして、今に至る。

◆◇◆◇

僕が一生懸命に獲物を探していると、ウサギの魔物を一匹だけ見つけた。
―絶対に逃さない―
僕はそっと王家の猟銃を構える。
僕が狙いをつけて、引き金を慎重にひいていると……。
ウサギの魔物は突然顔と耳を上に立てて、身をひるがえした。

「ちっ、気がつかれたか！？」
僕は慌てて引き金を引き、猟銃が火を吹く。銃口から押し出された弾丸は回転しながら飛び出し、空を裂いてウサギの魔物を目指す。
「当てれ！！」
弾丸は木の幹に吸い込まれた。
「くそ、外したか！？」
僕が再び狙いを定めようとすると、キリーが隣に寄ってきた。
「……ワタル」
「キリー、あのウサギの魔物を追えば、巣穴を見つけられるかもよ」
僕はウサギの魔物を追おうとすると、キリーが僕の肩を掴む。
「ワタル」
「んもう、何さキリー？」
僕がキリーに顔を向けると、彼女は僕の後ろを指差す。
「ワタル、あの魔物を狙おう……」
「えっ？　どこどこ？」
僕が後ろを振り返ると、すぐ目の前に体長3メートルを超す、白い大きな熊がいた。その肝は高級食材とされ、高値で取引されるAランクの魔物であるダムガンだった。
その大きな手には鋭い爪がついていて、大きく開いた口には、僕の頭蓋骨をやすやすと貫いてしまいそうな程に鋭い牙があった。
「ぬおぉっ！！」
「グオォォォォン！」
ダムガンが吠える。
僕は慌てるが、怯えるばかりの僕ではない。スライム、ゴブリン、テディベア、黒豚と激戦を繰り広げてきた僕はもう、ただの中学生ではないのだ！　……あ、でも、戦った相手の名前だけを見ると、たいした魔物と戦っていないように見えるけど、本当に激戦を繰り広げてきたのだよ。
僕は震える人差し指で引き金を引き、高らかに銃声を鳴らし、二発ダムガンに向けて放つ。

「グオォォ！！」
しかし、ダムガンの毛皮は丈夫なようで、腹に弾が当たるも浅い、出血も少なめだ。
僕はダムガンが一瞬ひるんだ隙を突いて、攻撃を畳みかける。
この近距離では、装弾する余裕はない。僕は右手にありったけの意思を込めて、猟銃袋の中にあるはずの未完成の銛を呼び出す。この銛は呪われていて、捨てる事ができないだけではなく、その呪いを利用して手元に呼び寄せる事ができるのだ。
「喰らえ！」
「グオォ！！」
僕は召喚した銛を右手に持ち、傷を負った所に銛を突き刺す。怪我をしている所でも、毛皮は丈夫で、銛の先までしか刺さらなかった。
僕は銛の柄を足の裏で回し蹴りを放ち、銛を深くまで押し込むと同時に、後ろに跳んでダムガンとの距離をとる。
「キリーも手伝って！」
僕は装弾しながら、キリーに怒鳴る。
「……私には無理だ……」
「なんだって！？」
キリーの悔しそうな声に、僕は焦って聞き返す。
「私の毒の剣で切れば、あいつを食べられなくなる……」
「またそれか！　何か、代わりの武器はないの！？」
僕が三発連射する。ダメージを負わせるものの、決定打には足りない。
キリーは腰に下げた袋を探り、武器らしきものを取り出す。
「……あの宝探しの鉄の棒（ダウジング）で見つけた」
彼女が握っていたのは、真っ白で、少し大ぶりな鳥の羽だった。
「……って、それは羽ペンだよ！？　それで何をするの！」
「……これで敵を撃破する」
彼女はダーツのように右手で思いっきり投げつけた。

「グオォぉ！」
熊のお腹に吸い込まれように刺さり、羽の半分が熊の体に埋まる。
「羽ペンをどうやって投げたらあんな風に刺さるんだ？」
「……これで決める……」
今度は袋から大ぶりで豪華な飾り付けが施された扇を取り出した。
「えぇ！　扇で戦うの。ゲームにある中でも、どんな風に攻撃しているのか、一番謎な武器！」
キリーは畳まれた扇を握りしめ、ダムガンの脳天を叩き割る。
「グゴォォ」
重たい音を立てて、ダムガンは倒れ伏せる。もちろんキリーの扇も二つに折れた。
「うわぁ、本当に扇で倒しちゃったよ……」
彼女の実力にはお手上げとしか言いようが無い。
「……ワタル、これを切り分けて、その袋の中に……」
「はいはい」
僕は名刀秋雨で熊を解体する。匠の技物で、とても滑らかに刃が入った。これからは、この包丁を隠し武器にするのがいいかもしれない。腰に猟銃をぶら下げ、手には銛を持ち、包丁を隠し持つ。……これじゃ、勇者というより完全に猟師だ。
「……今日のお昼は期待できそう……」
「これは依頼で狩った獲物だからね。食べちゃだめだよ」
キリーは解体する様子をぼんやりと眺めていたが、彼女は急に顔を上げた。
「ん、どうしたの、きりー？」
僕は少々臭いダムガンの血で手や服を汚しながらキリーに目を向ける。
彼女は押し殺したような声で呟く。
「……ワタル、殺気を感じる……」
「えっ、魔物がいるの！？」
僕は慌てて猟銃を構える。

「……魔物よりもずっと禍々しい」
キリーは無表情ながらも、その中に真剣な色が見えた。
「いったい、どこに？」
僕は回りをキョロキョロ見渡す。
キリーは背中のバスターソードを抜き、ある一点をじっと睨みつける。
「ははは、まさか気づかれるとは……」
さっきまでは何も居なかったはずなのに、声が聞こえた次の瞬間には、一人の少年がたたずんでいた。
少年は黒いマントを身に纏い、フードを目深に被って顔を隠している。手には魔法を使うための杖を持ち、背中に何かを背負っているらしく、マントに妙な膨らみが目立つ。
「お前、……私達の獲物を横取りしに来たな……」
キリーが無表情で睨む。そんなキリーの言葉を意外そうに、謎の少年は肩で笑う。
「あははは、まさかそんな風に思われるとはねぇ。あいにく、俺は世界を飛び回っていて、忙しい身だ。そんな暇はないね」
謎の少年の穏やかだが、自分達に悪意を向けられているのを感じる。頭の中で、警鐘が響く。こいつは危険だと。
「何が目的なんだ！」
「さぁてね、なんでしょう？　……なんて、白々しいか」
謎の少年はゆっくりと杖をあげ、こちらに向けてきた。
「目的は“お前たち”だよ」
フードからわずかに覗く唇を歪ませ、さもおかしそうに笑う。
「お前は、魔族、なのか」
「さてね、どうでしょう？」
少年は余裕を見せつけるように、杖でくるくるとて遊びする。
「まぁ、そんな質問は無意味だと思うけど……。あえて言えば、違うかな」
たしかに、僕らの敵が、自分の正体を明かすメリットなんて無い。

敵の言う事を信じられないのであれば、質問する意味もない。
しかし、準備は整った！
「はっ！」
僕は地面を蹴り上げ、砂で目潰しを仕掛ける。
砂と石が謎の少年をめがけて宙を舞う。
「てっ！」
そして、小石は木の幹に当たって跳ね返り、自分の額にぶつける。
「……何してんだ！？」
目潰しの効果は薄かったらしい。その上、自分で蹴った石に、自分で当たる僕を見て、謎の少年はあきれたような声を出す。
―しかし、それも作戦の内だ（※真っ赤なウソ）―
僕に気を取られた少年の死角を狙い、キリーが大ぶりなバスターソードで斬りつける。
絶対に避けられないスピードとタイミング……のはずだった。
「なっ！　偽物！」
キリーが驚きで目を見開く。
バスターソードは謎の少年を肩から脇腹にかけて袈裟切りに走るのだが、まるで水面を斬るかのような手ごたえだった。
「ははは、ご名答！」
幻覚で出来た少年がほほ笑み、光になって形が崩れる。そして、キリーの足元で複雑な幾何学的な模様の光る魔法陣となり、彼女を捉える。
「くっ！」
キリーは地面を思いっきり蹴って、魔法陣から逃れようとするが、魔法陣は彼女を追いかけ、足から離れない。
魔法陣は足から、腰、そして背中に辿り着き、光を強めた後で消えた。
「……いったい、今のは……」
キリーは顔をしかめ、辺りを見渡し、少年を探す。僕も銃を構え、五感を凝らす。

「それは、お前の力を抑える魔法だよ」
キリーの真横から謎の少年が姿を現す。
「！？」
キリーは驚くも、反射的に、目にもとまらぬ速さで剣を振るう。
しかし、少年は軽々と後ろに一回転して避ける。
「おっと、危ないじゃないか。かなり封印したのに、それだけの力を持っているとは」
「私に何をした」
キリーが剣を構えながら睨む。
「なーに、さっき言っただろう？　お前の力を“抑えた”と。お前は常に、膨大な魔力を自分の身体能力の強化に変換している。それを邪魔しているだけだ。まぁ、それも完璧ではなかったようだが」
僕は謎の少年に向かって発砲するが、簡単に避けられてしまう。
「まぁ、気を付けるべき相手は女、お前だけだった。お前の力を抑えておかなければ、俺の魔法が一切効きそうになかったからな」
「クソ！」
僕は悔しさのあまり、唇を噛みしめる。この少年にとって僕の存在は虫けら同然のようだ。そして、そう扱われても仕方のないぐらいに、僕は弱い。
「じゃぁ、お前らには消えてもらおう」
少年が何かを呟いてから、杖を振るう。
目の前に太陽の如き光があった。
光の洪水が押し寄せ、全身を叩くような衝撃が走り、世界は灼熱の地獄に変わる。
僕は声にならない悲鳴を漏らし、４、５メートル後方に吹き飛ばされた。
「ヴぅぅ……」
目を光に焼かれてしまい、景色がぼんやりと白く薄れてしまう。
体中が悲鳴をあげ、どこが痛いのか、自分の体がどうなっているのかも分からない。

ワタルは、“この少年はキリーを攻撃しただけ”という事を知らなかった。
ワタルはただ“キリーへの攻撃”の余波を喰らっただけという事を……
余波だけでこれだけのダメージ。
「キ……キリー……」
ぼんやりと霞む視界の中には、空色の少女は倒れ伏せていた。
この霧のかかった目では、彼女の傷を確認できないが、キリーは戦えるような状況でない事ぐらい察せられる。
「……ん――まだ、生き……――」
謎の少年の声が途切れ途切れに聞こえて来る。
―もう、だめか―
僕の脳裏にあきらめがよぎった時だった。
「――前達、……邪魔を――」
謎の少年のいら立つような声が聞こえて来る。
いつの間に現れたのか、黒っぽい格好の人と、青っぽい髪の人が立っている姿を最後に、僕は意識を手放した。

第２３話　謎の襲撃（後書き）

「はーい、練習中の野球部のボールに顔面で受け止めた事のあるワタルです。危険というのは、いつも思いもしない所から降ってくるものなのです。白鳥やカラスの落とし物をぶつけられたり、木の枝に頭をぶつけたり。ちなみに、今回の謎の人物は四シリーズ目であきらかになる予定です。本当に気が長すぎ。このシリーズを愛読している方には申し訳ありませんが、気長に応援してください。

では、本日はここまで。波乱万丈、奇奇怪怪。　次回をお楽しみに！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7217v/

最弱勇者とチートな勇者の御一行様

2012年1月13日18時59分発行